マイコンBASICマガジン別冊
SUPER Soft MAGAZINE DELUXE Vol. 10

CHALLENGE! Personal Computer A.V.G & R.P.G V

アドベンチャーゲーム　ロールプレイングゲーム

チャレンジ!! パソコン アドベンチャーゲーム&ロールプレイングゲーム V

パソコンゲームの楽しさを伝える本

★素晴らしきアドベンチャーゲームの世界
スナッチャー
アンジェラス
バーニングポイント
サイオブレード
きまぐれオレンジロード
ホワッツ・マイケル
オールド・ヴィレッジ・ストーリー
ガウディ
展望台
秘録・首斬り館
神の聖都
ルパン三世・バビロンの黄金伝説
どろろ

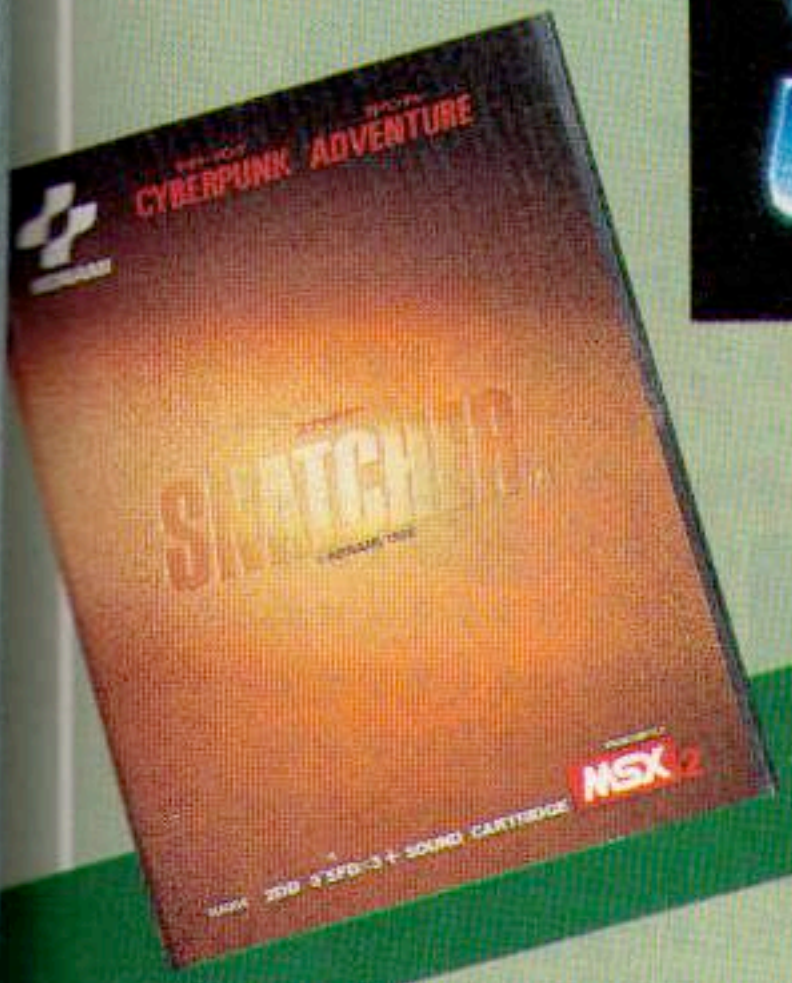


★ロールプレイング・ワールドへの誘い
ワンダラーズ・フロム・イース
サーク
ハイドライド3 S.V.
ウィザードリィIV
アドヴァンスト・ファンタジアン
アークス

★シミュレーションゲーム・ガイダンス
★ホンネで討論！クリエイター&読者座談会
★第1回全国統一AVG&RPG模擬試験
★人気ゲーム㊙テクニック集
★ゲーム・ミュージック楽譜集

山下 章

SNATCHER



スナッチャー 比類なき良質のシナリオを持ったサイバー・パンクAVG

●対応機種／価格：
PC-8801mkⅡSR以降シリーズ（5インチ2D×5）8,800円
MSX2（3.5インチ2DD×3＋SCCカートリッジ）9,800円
●発売日：'88年11月26日
●発売元：コナミ

コナミのAVGというと，これは極めて珍しい。過去に『シャロム』という，MSX用の作品があったけど，画面構成はけっこう『ドラクエ』っぽくて，純然たるAVGではなかった。そう考えると，この『スナッチャー』が，コナミ・ブランドから発売される初の本格的AVGということになる。

「通常制作期間をはるかにオーバー」――この話を聞いただけでも，開発スタッフの意気込みがうかがえるだろう。マニュアル付属の設定資料集を見れば，それだけの開発期間を必要としたのも，なるほどとうなずける。舞台となる21世紀の日本（ネオ・コウベ・シティ）の産業や環境問題，交通や社会現象，流行っているスポーツや遊びと，実に細かな設定がなされているんだ。

こうした設定がそのゲームの“世界観”を構築していくわけだけど，今までのAVGで，これほどまでに凝った世界観を持った作品はなかった。いや，RPGでさえ，ここまでやっている作品は数少なかったように思う。

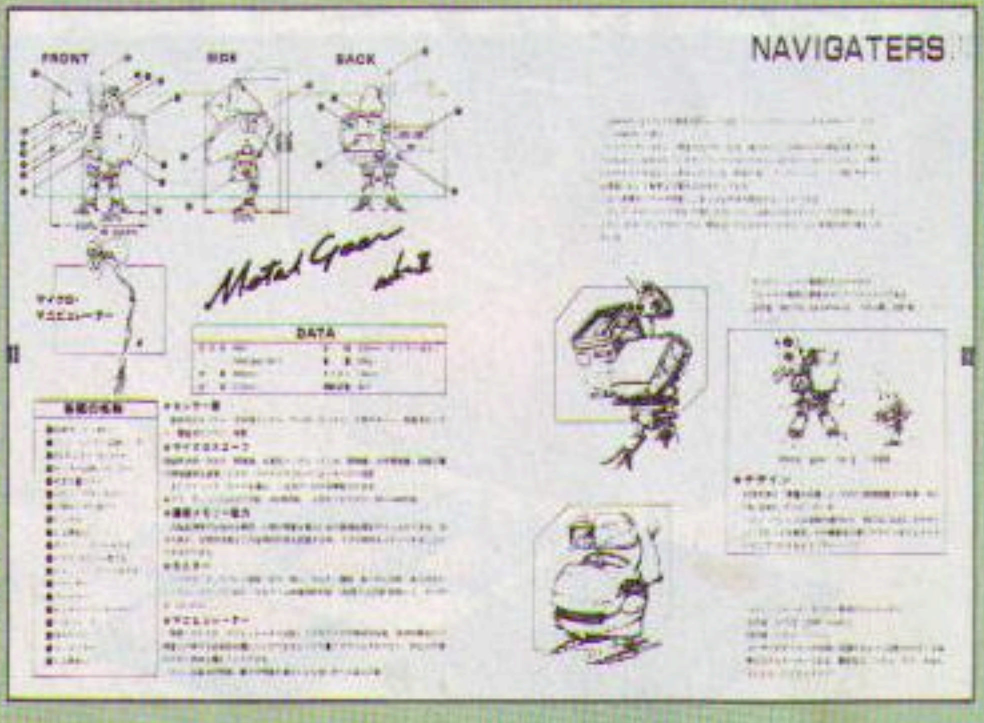
別にゲームをプレイする上で，その世界に対するこれらの基礎知識が要求されるわけじゃない。でも，世界観がしっかりしているかどうかで，間違いなく感情移入できる度合いが変わってくるハズ。ゲームをプレイし終わったあとにマニュアルの設定書を読み返すと，きっと『スナッチャー』の世界に対する感慨もひとしおになるぞ。試してみてね。

で，気になるゲームの完成度だけど，これが実にいいデキ。BGM40曲，効果音81種，画面数200，シナリオ原稿枚数900枚――特に素晴らしいのが，起伏に富んだシナリオ構成だ。伏線，どんでん返しはもちろん，映画や小説で使われる，魅せるための演出手法が巧みに盛り込まれている。このシナリオを書いた人は，かなりの数の映画・小説をこなしているのではないだろうか。

なかでも最も強く影響を受けていると思われるのが，映画『ブレードランナー』。AVG『ジーザス』と映画『エイリアン』の関係がそうであったように，『スナッチャー』も『ブレードランナー』をモチーフとしている部分が多い。もちろん，単なるパクリには終わっておらず，独特の世界観を再構築しているのが見事だ。言わば，『ブレードランナー』へのオマージュ（仏語：尊敬，敬意の意味）を捧げた作品，とでもいうところかな。

いつの間にか人間とすり替わって，残虐な事件を次々と巻き起こしていくスナッチャー。その正体を見破り，いち早く破壊することが任務であるJUNKER。プレイヤーのキミは，新任のJUNKER，ギリアン・シードの役を担当することになる。ある一体のスナッチャーについて調べあげていくうちに，おぼろげに見えてくるスナッチャー軍団の凶悪な計画とは？　そして，その本拠地はどこに……!?（ああっ，こうして書いているだけでも，もう一度プレイしたくなってきてしまった）。

処理スピードに多少の問題はあるけど，とにかくこのストーリーは，AVGファンならずとも一見の価値ありだ。『沙羅曼蛇』もいいけど，ボクとしては『スナッチャー』のアニメビデオのほうが見てみたいですね，コナミさん。



練りに練られた設定資料。こういう設定のひとつひとつが，ゲームの世界を作り上げていく。読んでいるだけでも楽しいぞ。本書の中にもふんだんに掲載してみたので，ぜひご覧あれ。

HOW TO PLAY あそびかた

もうみなさんおなじみのコマンド選択型のこのゲームは，画面右側に表示されているコマンド群の中から，自分がしたいことを選んで進めていけばOK。ひととおりすべてのコマンドを試せば，物語はけっこう進行するわけなんだけど，途中で用意されている〝コマンド選択以外の部分〟というのが，なかなかのクセ者だ。パスワードを入力したり，人物名を推理してキーボードから打ち込んだり，犯人のモンタージュ写真を作ったりと，このへんで行き詰まっちゃう人が多いんじゃないかな。詳しいヒントは本文中でフォローしてあるので，そちらを参考にしてね。



画面右にならんでいるコマンド群の中から，自分が行ないたいものを数字で選ぶ。とにかくひととおり試してみることだ。

使用するキー

0〜9(テンキー)…コマンドを選択する。射撃するエリアを決める。

, ……………………選んだコマンドをキャンセルする。

SHIFT …………射撃モードに入る

その他フルキー…文字を入力する

注)テンキーのないMSX2では，射撃のとき，以下のキーをテンキーに対応させて使う…7,8,9,U,I,O,J,K,L

ゲームデータの記録，再開

ゲームの途中経過を保存したいときは，「メタルギア使う」のコマンドを選ぶ。すると，つづいて表示されるコマンド群の中に「セーブする」というものがあるから，それも選択。指示どおりに従えば，データA〜Cに3種類の途中データを保存しておくことができるぞ。セーブはシナリオ・ディスクに行なわれるので，そのディスクだけはプロテクト・シールを張ったり，ノッチを開けたりしないようにしてくれ。そうそう，メタルギアというアシスタント・ロボットが一緒にいるときじゃないとセーブはできないからね。早いとこハリーからメタルギアをもらっておくべし。



「メタルギア使う」というコマンドを選ぶ。

セーブしたところからゲームを再開したいときは，一度パソコン本体をリセットしてしまおう。ほら，ゲーム・スタート時に「セーブしたところから」ってコマンドがでてきたでしょ。それを選べばOKだ。



セーブは，AからCの3か所でできるのだ。

ゲームの目的

JUNKERの一員となって，ネオ・コウベ・シティに潜むスナッチャー軍団を根こそぎ退治すること。

ゲーム・オーバー

戦闘シーンで敵の攻撃を何発か受け，体力がゼロになるとゲーム・オーバー。その他，カトリーヌの家にあるパソコンを壊したりしてもゲーム・オーバーになる。余談ではあるが，カトリーヌにHなことをしたり，アウターヘブンで職業がバレたりしてその場から追いだされても，何度か通っているうちに再び入れるようになるんだ。とりあえずハマリのないゲームなので，ゲーム・オーバーにならない限りは，ひたすら何かをしていれば道は開けるぞ。

Inside The Package パッケージと中身



- **パッケージ**…なんともシブイ表紙。ゲームの雰囲気にマッチングしているぜ。
- **設定資料集&ユーザーズ・マニュアル**…ゲーム制作に使われた設定資料に加え，ストーリー導入部のマンガまで載っている。もちろんプレイ方法もバッチリだ。
- **ディスケット**…シーン別に入れ替える必要があるので，常に全部用意しておこう
- **SCCサウンド・カートリッジ（MSX2版のみ）**…『スナッチャー』の音楽があのSCCサウンドで聴けるのだ！ しかもこのカートリッジは「コナミ・ゲーム・コレクション」シリーズにも対応している。SCC版『グラディウス』をぜひキミに聴いてほしい！

ホンキでPLAY ホンネでREVIEW

オススメ。ひたすらオススメ。これほどエンターテイメントに徹したシナリオのゲームは，なかなか見られない。従来のコマンド選択一辺倒だったAVGのカラを破ろうと，リアルタイム・ゲームや，モンタージュ，パスワードの推理シーンなどを取り入れたのが見事に成功している。

ウィットに富んだメッセージや，場面展開にピタリとマッチングしたBGM(さすがコナミ！)も文句なし！まだプレイしたことがないという人は，ぜひともお試しを。コレは買っても損はしないね，ウン。

でもちょっと不満を感じたのが，スピード関係。まず，ディスクのアクセス・スピードが遅い。88版はまだしも，MSX2版になると……う〜ん。それに，メッセージ表示も高速化できるような工夫がほしかったね。コマンド選択型のAVGでは，疑心暗鬼でどうしても同じコマンドを繰り返し選ぶことが多い。そのときに同じメッセージが表示されるのをただ待っているのは，けっこうな苦痛なのだ。キーを一発押せば，メッセージをスキップ（瞬時に表示）することができる――ボクはそっちのほうがいいけどなあ。

ま，次回作では，そのへんのスピード関係が改善されることを期待しときましょ。えっ，当然あるんでしょ，次回作は？　だって，このエンディングだと，やっぱり消化不良の感じがするもの。主人公の過去の記憶や，スナッチャー軍団との決着がハッキリしてくれないとねえ。

それなしでも十分すぎるくらい楽しめたけど，読みだした小説は最後まで読み切りたい――。『スナッチャーII』，待ってます。

ギリアン・シードの捜査日記

何度も言うようだけど，この『スナッチャー』というゲームは，AVG史上でも有数の素晴らしいシナリオを持った作品だ。それをこの本で扱うに際して，どういう形で掲載しようか，非常に迷った。

従来の〝チャレアベ・パターン〟では，このゲームの驚くほど細かく練られた設定や，起伏に富んだシナリオの面白さを，まだプレイしたことのない人にうまく伝えることは難しいかもしれない。かと言って，単なる攻略法の記述は，もちろんイヤだ……。

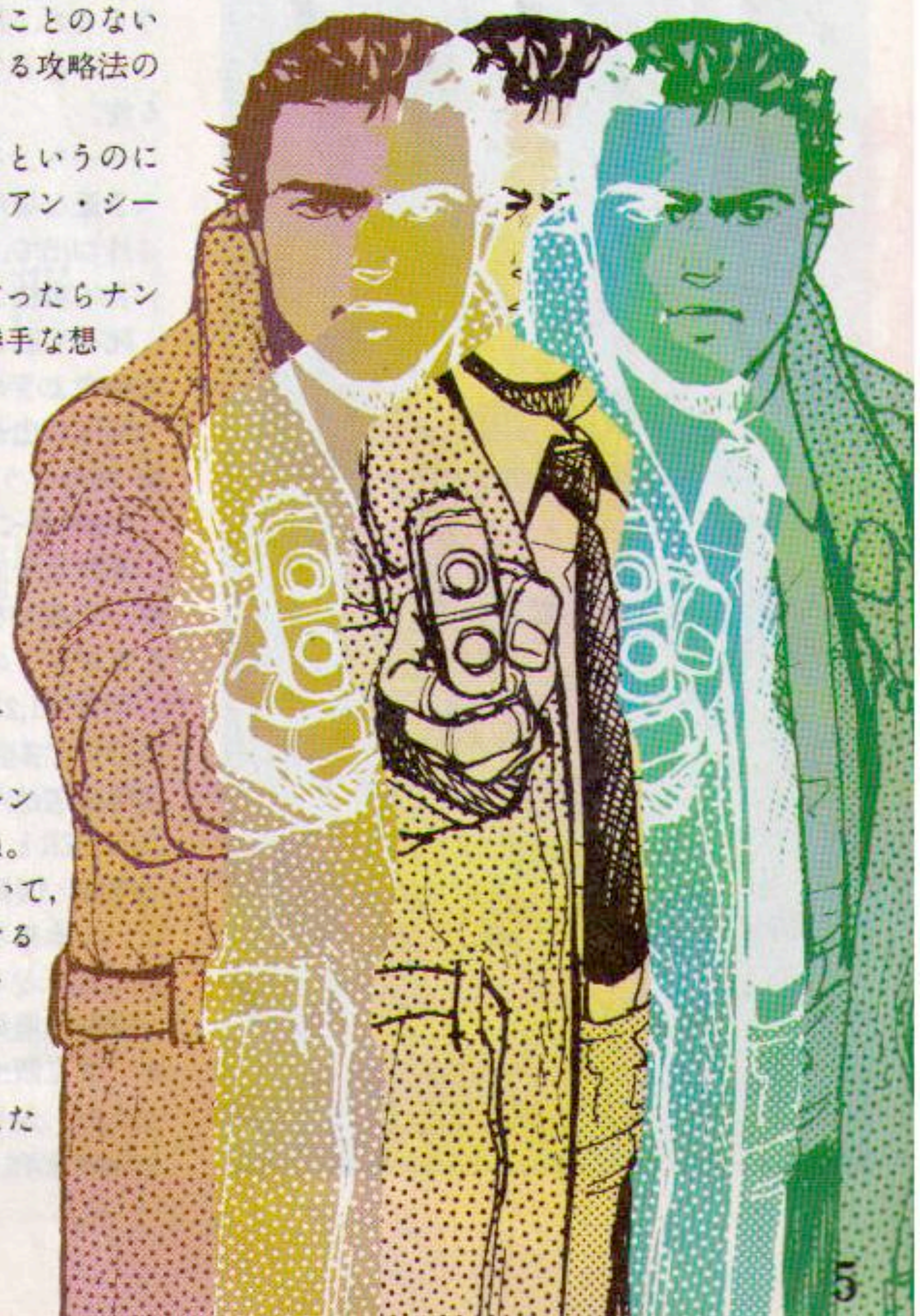
いろいろと考えたあげく，今まで試みたことがない〝物語風〟というのにチャレンジしてみることにした。拙い文章ながら，主人公のギリアン・シードの視点から，前半部のACT 1を綴ってみたつもりだ。

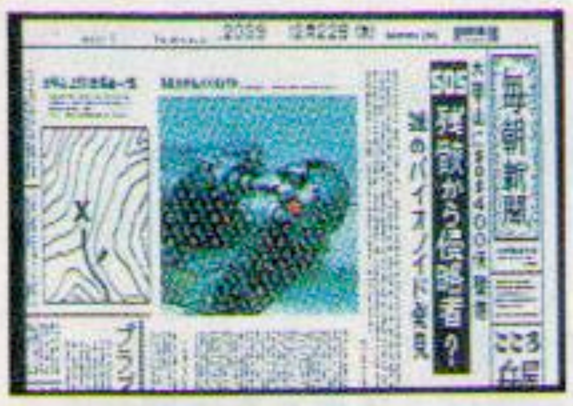
重要なヒントとなる部分は，あえてボカした。そのかわりと言ったらナンだけど，ゲームのストーリーに描かれていなかったシーンを，勝手な想像の下にふくらませてある（アレンジしてしまった部分もかなりある）。

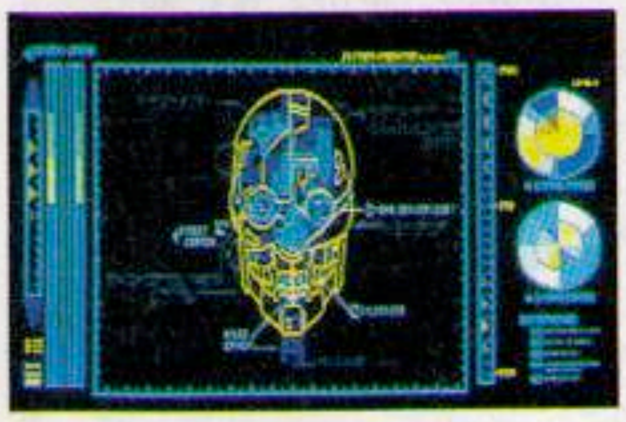
ただ，ちょっと残念だったのが，伏線を引くだけ引いといて，物語がプチッと終わってしまったということ。話を全部書いちゃったら，ゲームをプレイしようという気持ちも薄れるだろうから，この辺が妥協点かなと思ったんだけど……。まあ，ACT 2は自分でプレイして，キミの手で物語を完結させてください。もっとも，続編が予定されているのか，ゲーム自体にもエンディングまで行っても説き明かされない伏線が幾つもあるけどね。そうそう，一応ACT 2は，ノーマルのチャレアベ・パターンで，46ページから掲載してあるぞ。そちらもどうぞ参考にしてね。

AVGにしろRPGにしろ，最高の楽しみかたは，その世界について，ストーリーについて，自分でさらなる想像を巡らし，思いを馳せることだと思う。ここに書いたストーリーで，ボクが『スナッチャー』をプレイして思い描いた世界を感じ，読者のみなさんにもそこに感情移入してもらえたら，すごくうれしい。

そして，これを読んでのあなたの意見や感想が聞かせてもらえたら，もっとうれしいです――。

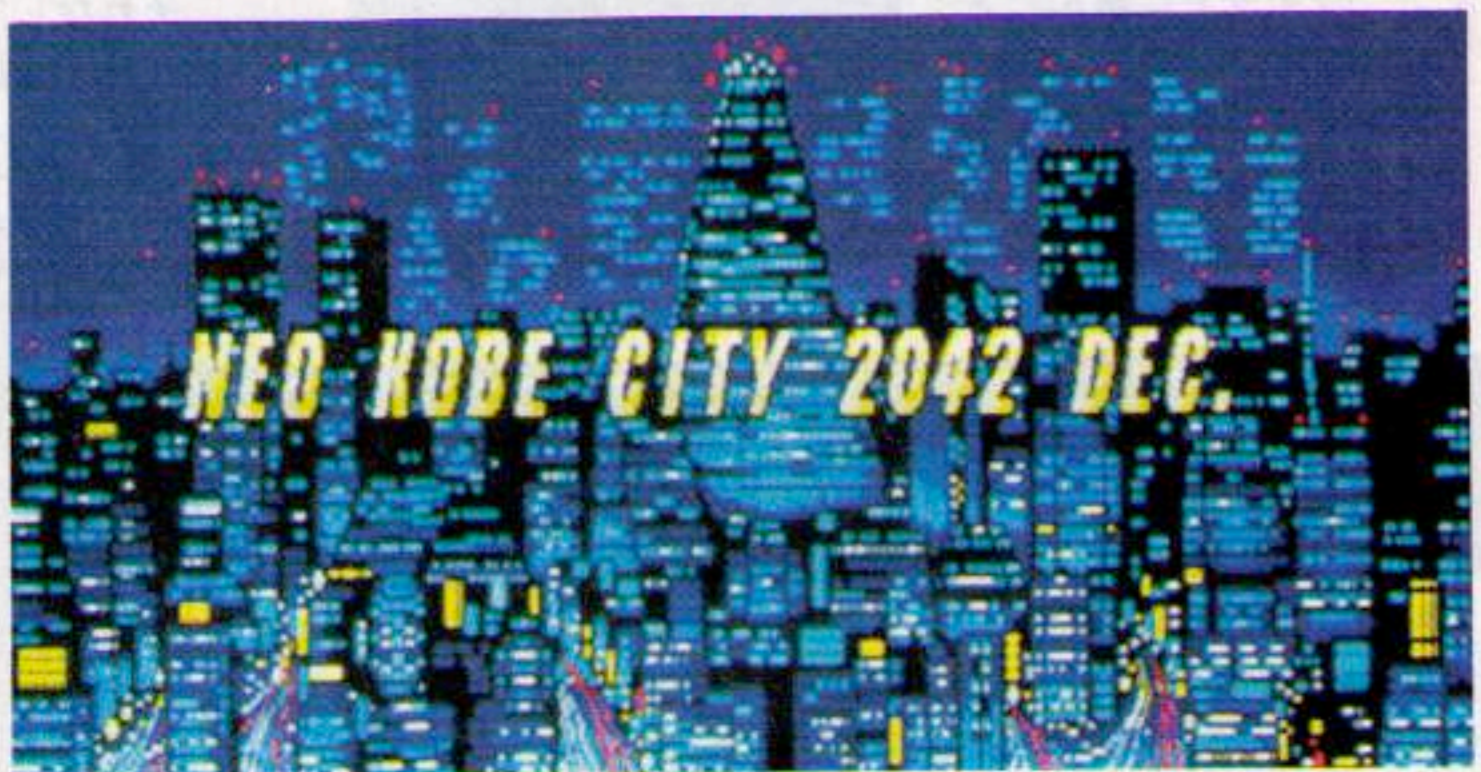






PROLOGUE-プロローグ

2042年12月。
人類は異常な危機に直面していた。
謎の生命体，バイオロイドの出現である。
国籍，目的，正体不明。
某国の新兵器か？　外界からの侵略者か？
彼らは冬になると現れ，人を殺害，密かに本人とすり替わり，社会に浸透していく。
人工の皮膚をまとい，汗をかき，血を流すこともできる。
極めて，有機的，かつ無機体そのもの。
オリジナルとの見分けはほとんどつかない。
彼らは人の体を奪い（スナッチ），すり替わることから，『スナッチャー』と呼ばれた……。
（ゲーム・オープニングより）



無数の光の点が，真っすぐな軌跡を描いて，車窓を流れていく。
まるで，星々の真っ只中を，駆け抜けているかのようである。
そのあまりの美しさに，空陸両用車〝トライサイクル〟のアクセルを緩める俺。
――ちょっと寄り道していくか。
手近な場所にあったビルの屋上に，車体を降ろす。
外に出て，体を思い切り伸ばし，深呼吸をしてみた。
実に爽快である。
死をも厭わず，危険な仕事に向かおうとしているのが，まるで別世界の出来事のように思われた。
眼下に広がっている明かりの数々が，俺のステージのために用意された装飾物のようでもある。
だが――。
それは所詮，見せかけだけの美しさなのであろうか。よく見ると，きらびやかでありながら，どこかしら空虚さを感じさせるビルのネオンサインが，さながらこの街を象徴しているかのようであった。
世界で1,2を争う犯罪都市，ネオ・コウベの夜景は，見る者の心をなぜか感傷的にする。
俺の名はギリアン・シード。本日付けで，ここ，ネオ・コウベ・シティにJUNKERとして配属される。
年齢，国籍，経歴等，一切不詳――と言っても，別に気取ってるわけじゃない。本来ならばきちんと自己紹介したいところなのだが，どうやら俺，世間で言うところの記憶喪失らしいのだ。
現在の俺が持っている記憶は，3年前の，よりによってシベリア――いわゆる〝中立領土〟から始まる。
まあ，少しでも俺のことを知ってもらうために，まずはその話から聞いてもらおうか。



1991年，モスクワのチェルノートン研究所で原因不明の謎の大爆発が起こったという史実は，あまりにも有名である。

それにより，当時ワルシャワ軍が極秘に開発していた細菌兵器〝ルシファー-α〞が，大量に大気中に拡散し，全世界のほぼ半分が壊滅状態に陥った。人類史上，前例を見ない生物災害（バイオ・ハザード）——今で言うところの「大惨事」である。

〝ルシファー-α〞は半年後，突然変異により自然消滅し，人類は間一髪のところで全滅をまぬがれた。しかし，その被害は凄まじく，とりわけシベリア地区の荒廃ぶりには目を覆わんばかりであったと言う。

「ルシファーの後遺症により，この土地には半世紀の間，動植物は全く育たないであろう」

生物学者，科学者たちに，こぞってこう言わしめた同地区は，国連が中立領土として管理することが決定。第三国の軍事侵攻を防ぐため，さらには領土内で起こった異常現象を観測するため，毎年「シベリア探索隊」と呼ばれる一団が派遣されることになる。

そして，2039年。

その第17次シベリア探索隊によって，俺と俺の妻ジェミー・シードは，中立領土内にて保護された。

なぜ俺たちが，いまだに無人の荒野であるシベリアなどに行ったのか（あるいは居たのか）？　また，なぜ俺たちには，その保護されたとき以前の記憶が全く無いのか？

記憶を失った当人たちが，そうした疑問の解答を得られるはずもなく，かと言って，第三者の人間たちがどれだけ状況データを揃えようとも，結論を導きだすには至らなかった。

が，一つだけ確かなことがあった。

記憶を無くしているという事実は，俺たち夫婦の関係を冷え切ったものとするのに十分すぎる要因だったということである。

翌2040年，別居。

単に「夫婦であった」という過去の事柄に縛られるだけで，愛しあった日々という最も重要な記憶を無くしてしまった二人にしてみれば，一緒に生活すること自体，甚だ不自然なことだったのかもしれない。

別居後，すぐに俺は，軍の長期特殊訓練を志願した。

くる日もくる日も，死を覚悟するようなハードな訓練に身を任す。

記憶喪失などという中途半端な状態で，どうにも収拾がつかなくなっている自分の気持ちに，踏ん切りがつけられるかもしれない。ジェミーに対する未練（と呼んでいいのかどうかわからないが）も捨て切れるかもしれない——そんな淡い期待を抱きながら，である。

ひたすら訓練プログラムを消化していった俺は，もともとその手の才能があったのか，みるみるうちに成績が上がり，いつしか訓練所の中でもトップを争う凄腕の兵士に成長していた。

同期の連中たちは，俺のことを，正確な射撃の腕前を評して，こう呼んだ。

「Pinhole-shooter（針の穴でも撃ち抜く男）」と。

風の便りで，ネオ・コウベに出現したというスナッチャーの噂を聞いたのは，ちょうどその頃だった。

そして，長期特殊訓練をはじめた日から2年後——つまり，今現在。

そのスナッチャーと戦うための職業に就くことになろうとは，俺自身，夢にも思わなかったことであった。

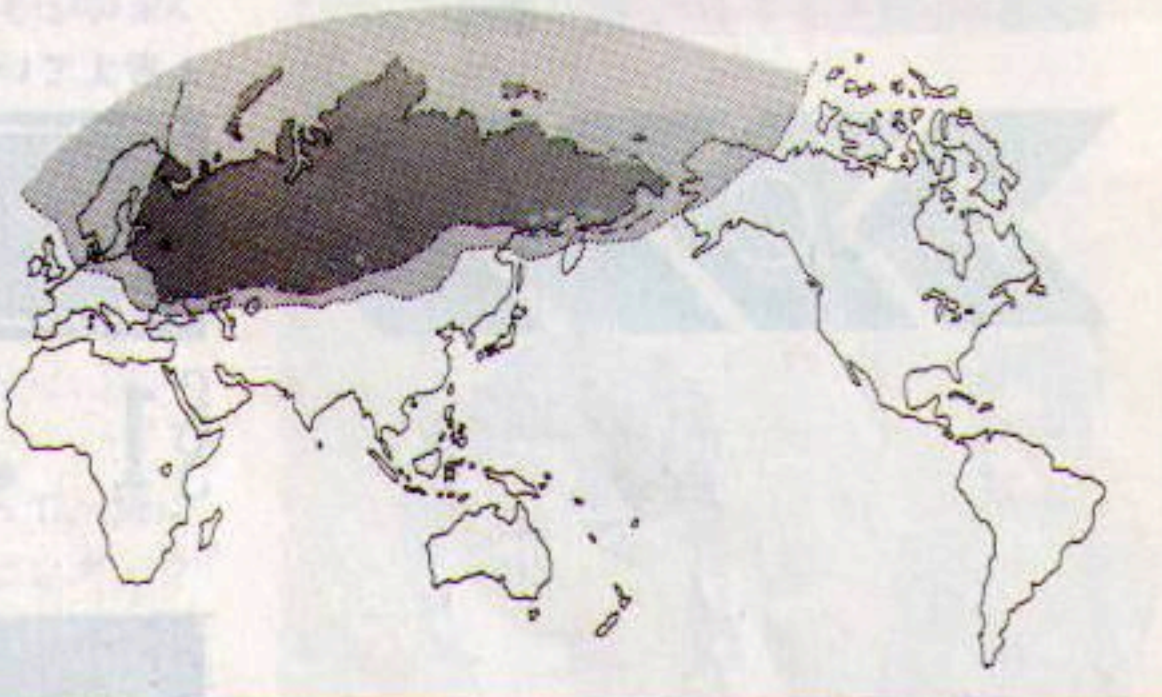
軍から俺に下された特別辞令は，JUNKER本部への転任指令だったのである。

JUNKER——Judgement（判定する）Uninfected（スナッチされていない）Naked（純粋な）Kind（人類）&（かどうかを判定し……）Execute（処理する）Ranger（特捜隊）。

それは，冬になるとネオ・コウベに現れ，次々と殺人を繰り返し，いつの間にか本人とすり替わっていくスナッチャーを殲滅させるために設置された



「大惨事」の被害範囲





ネオ・コウベ・シティ

20世紀末にあったポート・アイランド，六甲アイランド，ハイ・ハーバーランド，神戸国際空港，神戸複合産業団地という五つの人工島が統合されて生まれた，人工大陸。

さまざまな人種，民族の入居を認可して，文化と技術の世界的交流をめざしたが，結果的には人種のルツボを瀬戸内海上に作ることになった。現在は，犯罪者，ミュータントの巣窟と化している。

総面積	600.00km²
総人口	600万人（登録者のみ）
未登録人口	推定50万人
建設面積	20%：業務用
	80%：住宅

ネオ・コウベ・シティのシンボル・マーク

ネオ・コウベ・キッズの間では，「逆ギッチョ」と呼ばれ，親しまれているマーク。彼らの間では，指で「逆ギッチョ」をすることがあいさつとなっている。





ギリアン・シード(推定31才)
Guilian Seed
主人公。3年前，記憶喪失の状態で発見された。それ以前の記憶は深い謎に包まれている。妻のジェミー・シードとは，2年前から別居中。軍での特殊訓練を経て，JUNKERの“ランナー”としてネオ・コウベ・シティに配属される。

特別機関である。

鉄屑(JUNK)を破壊する人(er)とも訳され，“鉄屑処理人”などと呼ばれたりもする。

一般市民に紛れ込んでいるスナッチャーを見つけだし，恐るべき戦闘力を有するそいつを破壊する――その作業は困難を極めるため，必然的にJUNKERになるのは，何かしらの分野のエキスパートであるのが通例になっていた。

その点から考えると，今回の俺のJUNKER赴任にはいささか解せないところがある。

たかだか銃の扱いに秀でているぐらいで，JUNKERに選出されてしまって良いものなのだろうか。

――ふっ。まあ，そんな余計な心配をすることもないか。

JUNKER，ね。軍の訓練所よりは，いい退屈しのぎになるかもしれないな。

“百万クレジットの夜景”と呼ばれるネオ・コウベのビル明かりを背に，たばこの煙をくゆらせながら，一人俺はつぶやいた。

そのときはまだ，これが俺の数奇な運命の幕開けになろうなどとは，微塵も考えていなかったのであるが……。

ACT 1

☆☆☆SNATCH☆☆☆

§1 JUNKER'S OFFICE
――ジャンカー本部



ネオ・コウベ・シティ，セントラル区，ポート・アイランドMT-7-3-2――JUNKER本部のあるコナミ・オムニビルは，その住所に，周囲のビルよりも一際高くそびえたっていた。

巨大なとうもろこしに似ていることから“ビッグコーン”と呼ばれているこの建造物は，地盤の緩いネオ・コウベ地区に，惑星コロニー建築技術を導入することによって最初に建てられた，地上630メートルにも達する超高層ビルである。

その所有者は，20世紀にコンピュータ・ゲームの分野を開拓し，今や押しも押されぬホーム・エンタテイメント・システム用ソフトの大手配給元となった，コナミという会社であると聞く。

ここ，ネオ・コウベ・シティでのコナミの勢力は強大で，事実，街地の半分近くが，その所有地なのであった。

――あやかりたいもんだぜ，まったく。

俺は，フロア150のトライサイクル駐車場にインターセプターを乗りつけ，フロントらしき場所に歩を進める。

『JUNKER』というマークが描かれた自動ドアの横に，いかにも重厚そうなガラスで囲われた，ポッド状の受付があるのが目に入ってきた。

近づくと，そのポッド内にいる受付嬢らしき女性が，品の良い笑顔を作る。

JUDGEMENT UNINFECTED NAKED KIND & EXECUTE RANGER.
JUNKER
SINCE 2042.

JUNKER

2042年8月，警視庁所属チーム「対スナッチャー特殊班」と政府諜報機関「Rug hunt」とが合併，政府直属機関として正式に「JUNKER」が設立される。

［JUNKER5か条］
(1)JUNKERの目的は，バイオロイド“スナッチャー”を処理することである。
(2)JUNKERはたとえ(1)を実行する為であっても，人を傷つけてはならない。
(3)JUNKERはスナッチャーとしての完全な証拠がない限り，物質的捜査，拘束はできない。(民事法第18条第12項，スナッチャー問題に関する人権保護)
(4)JUNKERは一般市民のバウンティ・ハンター(刑事法特記事項3項，バウンティ・ハンターの補助)と協力，サポートの義務がある。
(5)JUNKERは(1)を実行する為の特殊権限，ブラスター，ナビゲーター，トライサイクルの所持が許されている。





「いらっしゃいませ。JUNKER本部へどのような御用件でしょうか」
彫りの深い，ハーフっぽい顔立ちの美しい女性である。きめ細かな肌の張り具合いと，ポニーテールにまとめあげた髪の大きなリボンが，彼女がまだ20代の前半であることを示していた。加えて，ショッキング・ピンクの洋服が，艶やかさに華を添えている。
そのあまりに澄んだ瞳と，大きくはだけた胸元に，思わずどぎまぎしてしまう俺。
「あ，ああ，本日付けでJUNKER本部に配属された，ギリアン・シードです」
挨拶をすると，事務的とも思えた彼女の笑顔の中に，親しみの色が浮かび上がってきた。
「まあ，あなたが！　ようこそ，話は聞いてるわ。私はミカ・スレイトン。ここの受付とオペレーターをしているの。以後よろしくね」
「こちらこそよろしく，ミカ・スレイトン」
「ミカでいいわ。……ちょっと待ってくださいます？」
そう言うと彼女は，手元のボタンをポンポンと軽快にたたいた。それに反応して，ポッドを囲うガラスが音もなく開いていく。
「このポッドの強度は，重戦車並なのよ。酸素や食糧も用意されているから，ちょっとしたシェルターみたいなものね」
説明しながら，ミカは脇にできた，決して広いとは言えない出入口から手際良く出てきた。「案内するわ。ギリアンが着いたら，局長のところへ連れてこいって言われてるの」

ミカ・スレイトン（23才）
Mika Slaton





JUNKER受付嬢兼オペレーター。コウベ学園都市大学にて，犯罪心理学，社会情報処理学を専攻。卒業後，コウベ特殊犯罪研究所に入るが，すぐにJUNKER本部へと転職する。日本系とユダヤ系の混血。一見クールだが，内面は非常に情熱的な女性。

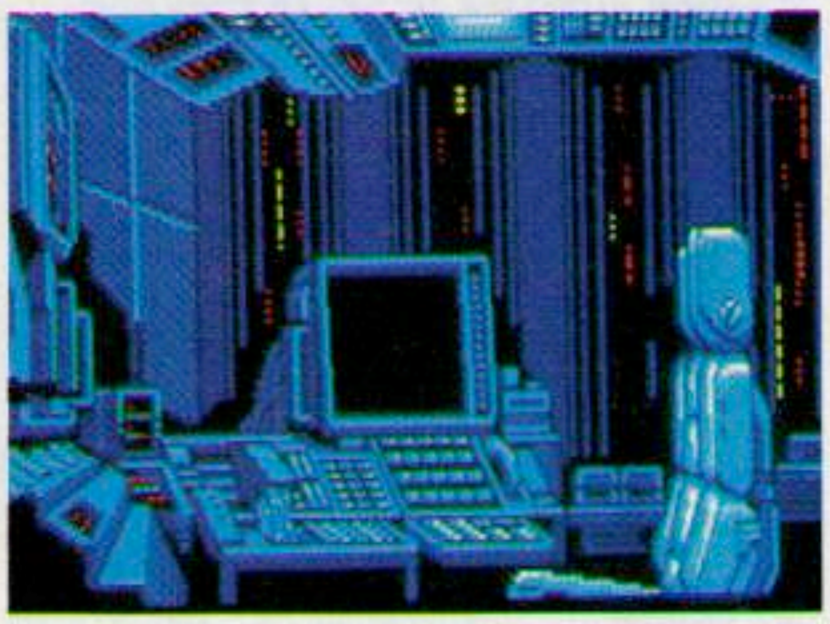


ミカの後に従って，俺は移動廊下〝ムービング・ウォーク〟に乗った。
「ギリアンは，軍の訓練所でとっても優秀な成績だったんですってね」
「あ，ああ。まあね」
「そういう人がJUNKERに加わってくれると，頼もしいわ」
ミカの笑顔は，実に快活である。殺伐としがちなJUNKER本部において，彼女の笑顔が果たす役割は大きいに違いない──そんなことを考えていると，どうしても彼女に一つの質問をせずにはいられなくなった。
「ミカ，君みたいな女の子が，どうしてJUNKERなんて危険なところにいるんだい？」
「えへっ。みんなそれを聞くのよねえ。……私，コウベ学園都市大学で，ずっと犯罪心理学を勉強してたの。卒業した後も，初めは研究所でずっと研究を続けるつもりだったのね。だけど，そんなところにいると，猟奇殺人だの，変な事件ばっかり担当させられて，もう心が荒んじゃって……。そんなときに，ここの局長にうちに来ないかって誘われたの。……即，OKしちゃった。スナッチャーっていう存在にも，研究上とっても興味があったしね」
ミカは，はにかみながら，ペロリと舌をだした。なるほど，なかなか積極的な女性のようだ。
「さあ，ここが局長室よ」
ムービング・ウォークが停止した正面のドアを，ミカがノックした。
「局長，ミスター・ギリアンをお連れしました。入ります」
その部屋には，様々な映像を映しだした幾つものモニターが並んでおり，それを腕組みしてじっと見つめる恰幅のいい男がいた。その濃い口髭が，ある種の威厳のようなものを漂わせている。
部屋に入るなり，男は視線を俺にくれる。実に鋭い眼光であった。
「ようこそ，ギリアン・シード君。私が局長のベンソン・カニンガムだ」
椅子から立ち上がり，俺の体をつま先から頭まで一瞥すると，ベンソン局長は言葉を続けた。「初めに言っておくが，JUNKER──なかでも君に担当してもらう〝ランナー〟は，実際にスナッチャーと対決する死と隣り合わせの危険な職業だ。人間になりすましているスナッチャーを捜しだし，一般市民





ベンソン・カニンガム
(46才)Benson Caningum
JUNKER本部局長。20代の頃，特殊部隊「FOX FOUND」で戦略教官として働いていた。以後，スナッチャー対策本部長，対スナッチャー特殊班班長を経て，JUNKERのヘッドに。語学，サイエンス，法学に堪能。武術においては，柔道でオリンピックに出場したこともある。



に犠牲をださないように，奴らを破壊する——口で言うのは，たやすいが，既に幾人もの仲間がこの世を去って行った。こちらも奴らに狙われているということを心しておいてくれたまえ」

「わかりました」敬礼をする俺。

このベンソン局長についての噂は，俺がいた軍の訓練所ですら耳にすることができた。スナッチャー対策本部，対スナッチャー特殊警察班の設置を一人で推進し，不安のどん底にいたネオ・コウベ・シティの市民に安らぎを与えた男，ベンソン・カニンガム——。今でこそ局長に落ち着いてはいるが，JUNKER本部が設立されるまでは，第一線のランナーとして活躍し，破壊したスナッチャーは数知れないと言う。

そのベンソンの下で働けるということ——それは，俺が軍の辞令を二つ返事で承知した理由の一つでもあった。

「君の活躍に期待しているぞ。人間の正義の心を持って，捜査に当たってくれ」

「了解。頑張ります」

俺は一通りJUNKERとスナッチャーについてのガイダンスを受けると，「ギリアン・シード」という名前が登録された，真新しいJUNKERカードを手に，局長室を後にした。

「どうだった，局長の印象は？」ムービング・ウォークでミカが，いたずらっぽく俺に聞く。

「うん，なんていうか……威厳のある人だな。歴戦の勇士って感じがする……」

「ふふっ。怒るとほんとに怖いんだから」

ミカは笑いながら，人差し指を角のように自分の頭につけるポーズをとった。そして太い声色を作りながら「ミーカ，おまえは最近たるんどるぞっ！……なんてね。では，鬼のミカちゃんが，ギリアン・シードに他の部屋も案内しまーす」

「おいおい，フロントのほうは留守にしちゃって大丈夫なのかい」

「平気よ。ちゃんとドアはロックしてきたし，誰かきたらブザーが鳴るはずだもの」

初めにミカに案内された部屋は，不思議な機械音の鳴り響く，コンピュータ・ルームだった。

暗い室内に張り巡らされた情報伝達用の光ファイバーや，機械の表示系統が美しく輝いて，そこはあたかも宇宙空間のようである。

「このコンピュータは『ガウディ』と言って，全国のデータベースとネットされてるから，どんな情報でも自由に引きだせるのよ」と，部屋の中央に置かれたモニターの前に座りながら，ミカが説明する。

ガウディ？——あのゴーファとの戦いで勝利したヴィクセンの遺物じゃないだろうな？（おっと，そりゃゲームの話か）

「そうねえ，たとえばうちの超優秀ランナー，ジャン・ジャック・ギブスンを調べてみましょうか」

ミカがいかにも慣れた手つきでキーボードをたたくと，ギブスンに関するデータが，次から次へとガウディのモニターに表示された。

スナッチャー破壊歴という項目から，いかにギブスンという男が凄腕であるかがうかがえる。

「ギリアン，練習だと思って，ジャンの娘のカトリーヌについて調べてごらんなさい。きっと驚くわよ」

「どれどれ——『カトリーヌギブスン』，と，これでよし——おっ，えっ，えっ！　カトリーヌって，あの有名なCMモデルのカトリーヌなのかい？　おおっ，しかも3サイズまで登録されているとは……えーと，バストが81で，ウエストが……」

「もうっ，ギリアンったら！」ミカがぷうっとほほを膨らませる。

おっと，いかんいかん。JUNKERたる者，常にハードボイルドに決めておかないと。

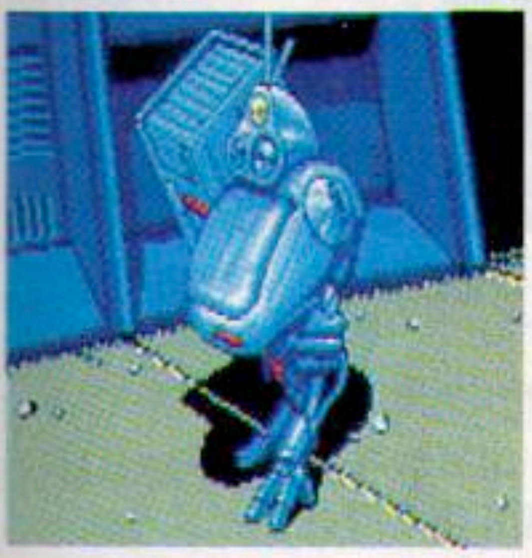
「ハリー，彼がギリアンよ」

「ほう，あんたが新入りのランナーかい。よろしく頼むよ。……はて，以前

にどこかで会った気がするのだが，気のせいかのう」
つぎに連れていかれた部屋——メカニック室では，JUNKER帽を被り，あご髭をたんまりとたくわえた，ハリー・ベンソンが俺を出迎えてくれた。かなりの高齢のようではあったが，その瞳は少年のように輝いている。
「おやじさん」と呼ばれているこのハリーほど，JUNKERのメンバーで，世間的に名が知れ渡っている人物はいない。なにしろこの人，ノーベル賞を3回も受賞しているという，超天才なのである。
「初めまして，ギリアン・シードです」
「ギリアンか。やはりどこかで聞いたような名前じゃな」
——そう言われても，俺にはハリーと過去に出会った記憶は全くない。
「まあよい。ともかく，あんたのために特別仕様の品を二つも作っておいたぞ」
ハリーは記憶をたぐるのをやめると，パンパンと強く手を2度たたいた。

カシャン，カシャン……。
かすかな金属音と共に，部屋の奥の壁に映った影が，こちらに近づいてくる。
はじめはその影の大きさに驚いていたのだが，その本体が視界に入ると，意外にもそれは，1mにも満たない2本足の歩行型ロボットであることがわかった。
右肩の位置に大きめのモニター，ひょこっと首が伸びて，頭部には2本のアンテナと，なんともユニークなデザインである。
ハリーは，口元を緩ませてこちらを見ながら，ロボットに話しかける。





「おい，メタル，自己紹介しろ」
すると，そのロボットが反転して顔を俺に向け，実によくできた人工音声でしゃべり始めた。
「はい，ギリアン，初めまして。あなたのサポートを努めます，メタルギアmkII（SR以降）です。どうぞよろしく…」あっけにとられている俺に，ハリーがあご髭をなでながら，うれしそうに解説する。
「はっはっは，これがランナーのアシスタント，〝ナビゲーター〟じゃよ。あんたが捜査するときに，こいつが分析，記録，通信その他のサポートを行なってくれるはずじゃ」
「はあ。それにしてもメタルギアmkII（SR以降）——ですか？ へんてこりんな名前ですね」と，俺。
「うむ。20世紀末に世界を恐怖のどん底に





ハリー・ベンソン（55才）
Harry Benson



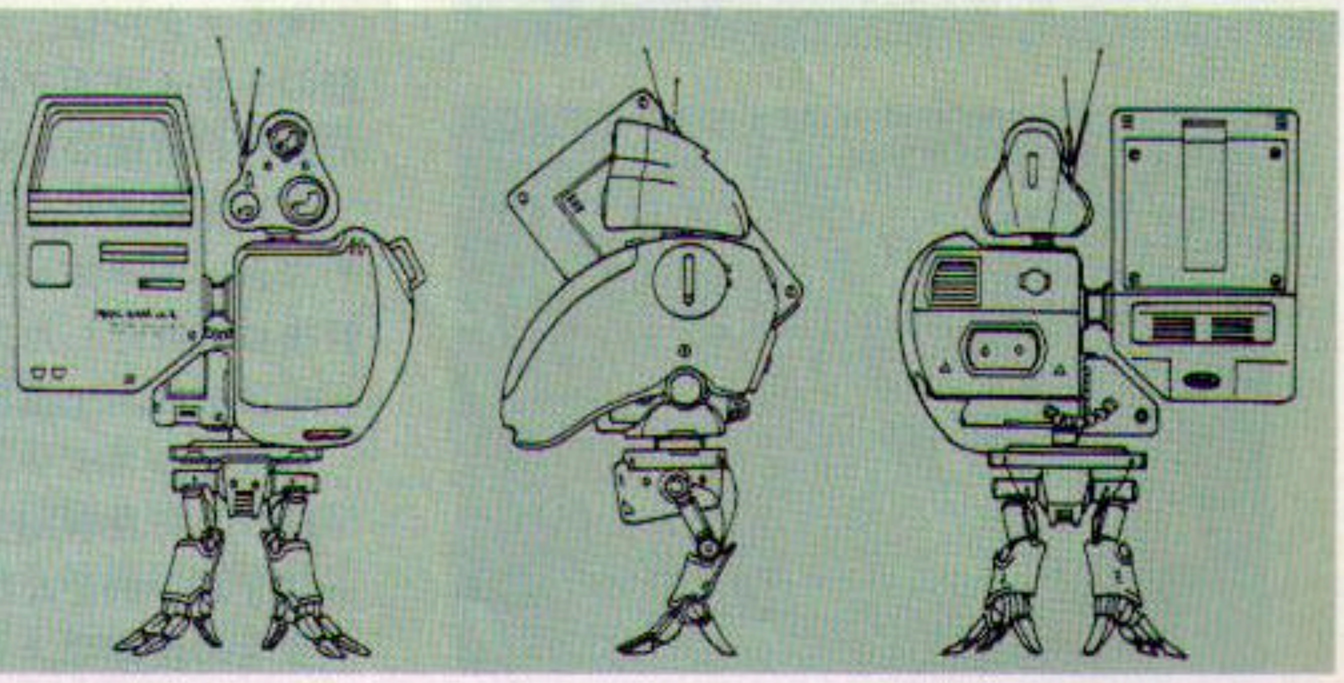


JUNKERメカニック・マン。『大惨事』の際，両親を失い，政府にひきとられる。わずか14才で博士号，第三次世界大戦のとき，数々の新型兵器を考案するなど，天才ぶりをいかんなく発揮。ノーベル賞を3度も授賞する。Rug huntよりJUNKERへ転任。

メタルギアmkII（SR以降）

ギリアン・シード専用のナビゲーター。捜査上の分析，記録，通信を行ない，JUNKERの捜査活動を円滑にするように設計されている。各種センサーを搭載し，あらゆる危険を察知することが可能。「スキャニング令状」が発行されたのちには，スナッチャーか人間かを分析する「スキャニング」という行為ができるようになる。

・DATA
正式名……NAVI——metal gear mkII
全高………980mm
全長………310mm
全幅………530mm（モニター含む）
重量………50kg
モニター…12inch
積載容量…40リットル



たたきこんだ『悪魔の兵器・メタルギア』からデザインを採っているからな。名前は，それへのオマージュのようなもんじゃよ，はっはっはっ。加えて，あんたの性格・個性データまで採り入れた，わしの自信作だぞ」

「メタルって呼んでくれればいいですよ，ギリアン」俺とハリーとの会話に，メタルが口を挟んできた。

「そう，メタルちゃんでいいのね」

ミカがメタルの頭をなでながら，子供をあやすような声で言う。「わあ，メタルちゃんはかわいいんだあ。あたしもこんなペットが欲しいなあ（ペットじゃないってば！）」

「ポッ！　ボクもギリアンよりミカさんと一緒のほうがいいなあ」

おうおう，メタルのやつ，なんて調子がいいんだ。

ん，待てよ。俺の性格に合わせて設計されているってことは……。

「それからもう一つ，こいつも持って行くがいい」

言いながらハリーは，棚の中から一丁の銃を取りだした。

実に洗練されたデザインで，手にしてみると非常に軽い。安定性も良く，まるで俺の手に合わせて，その形状が決められたかのようである。

「どうだ，気に入ったか？　軍で使用しているレイガンとは，わけが違うぞ。これはブラスターといってな，一発でスナッチャーを破壊できる威力を持っているのじゃ」

「ええ。最高ですよ，こいつは。どうもありがとう……おやじさん」

「なーに，これがわしの仕事じゃからな」

ハリーは，いたずらっぽく片目をつぶってみせた。

そのとき――。

ビイィィー，ビイィィー。

和やかになりかけていたその場の雰囲気を，かん高いブザーの音が切り裂いた。

「きゃっ，なに？　なんの音？」

近くから大きな音が聞こえて，驚くミカ。

どうやら音は，メタルから発されているようだ。

「ジャン・ジャック・ギブスンより緊急入電です。つなぎます」

メタルの肩のモニターが作動し始め，そこにギブスンの顔が映った。



「こちらギブスン，こちらギブスン，M地区の工場跡でスナッチャーらしき男を追いつめた。至急，応援頼む」

張りつめた糸のような緊張感が走る。

「ギリアン，行きましょう」

メタルに言われるまでもなく，俺はJUNKERコートをつかむと，駐車場へと走っていた。

「メタル，もたもたしてると，おいてくぞ！」

心配そうに俺を見送る，ミカとハリー。

「頑張ってね，ギリアン」

「ブラスターは使い手の反射スピードに反応することを忘れずにな。頼んだぞ」

俺とメタルは，用意されていたトライサイクルの新車に乗り込んだ。42年型のトライサイクルは，シティの交通網管理システムと直結しており，オート走行が可能な優れた乗り物である。

行き先指定カーソルを，M地区の工場跡にセットする。

ふわっと車体が浮き上がったかと思うと，窓の外の風景がみるみるうちに背後に流れだした。

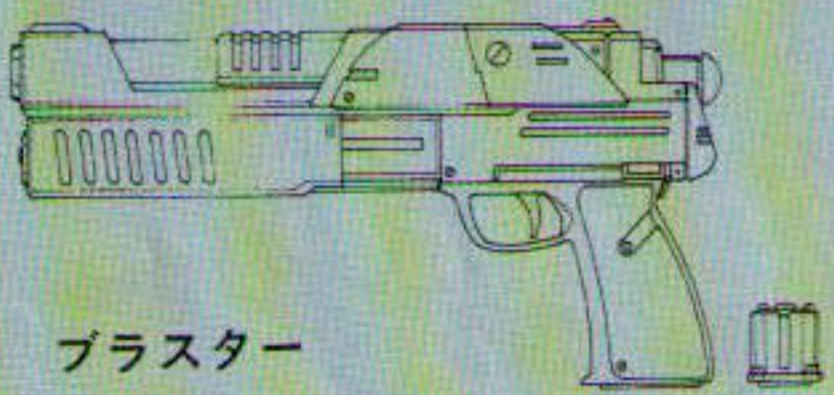
やれやれ。配属早々，事件か……。

いきなりスナッチャー様のおでましとはな。

腕ききのJUNKER，ギブスンが追いつめた男――なぜそいつがスナッチャーだとわかったんだろう？

奴らの正体は，一体……。





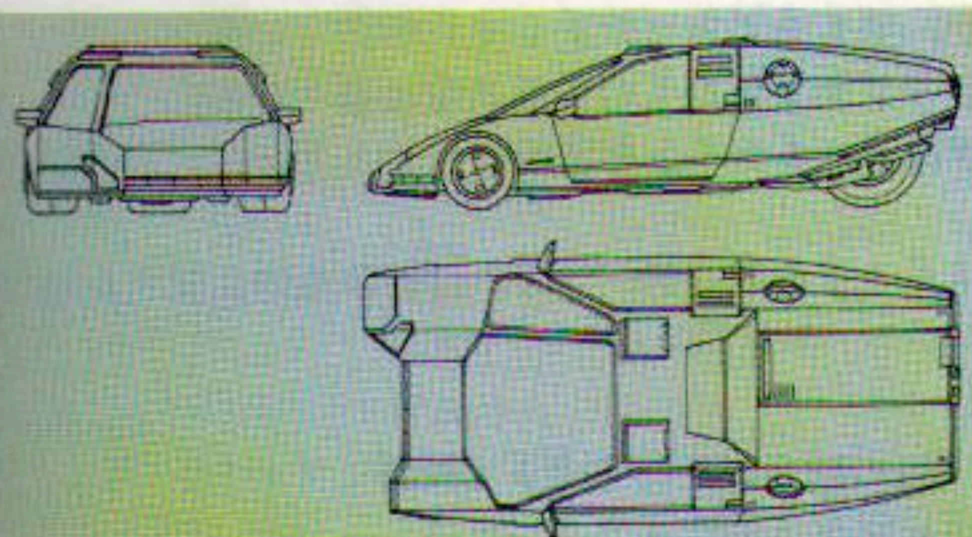
ブラスター

スナッチャーを処理することができる唯一の武器。フィードバック機構を採用しているので，使用者の反射スピードによって，無限に速射性が高まる。グリップに内蔵されているセイフティ装置のセンサーにより，使用者の指紋，体温等を照合。持ち主本人でなければ，トリガーが引けない仕組みになっている。

・DATA

正式名………BLA-H17（type3）
設計者………ハリー・ベンソン
協力…………S&M社，NASA
口径…………15mm
全長…………380mm
銃身長………150mm
重量…………900g（エネルギー・パック含む）
装弾数（エネルギー・パック）……1個
ビーム出力…焦点断面積/cmに一点照射でセラミック装甲60mmを貫通する。





トライサイクル

JUNKERが使用する空陸両用車。地上走行は三輪駆動，ホバー走行及び空中では車輪を収納し，ジェット推進で飛行する。通信衛星や「アルファビル」を介したナビゲーション・システムにより，シティ内全域の自動操縦を可能としている。

・DATA

正式名	42年型インターセプター type R
全長	3980mm
全幅	1630mm
全高	1255mm
ホイール・ベース	2480mm
フロント・トレッド	1400mm
車量重量	650kg
車体素材	炭素繊維＋スーパー・エンプラ

それに，弱点は…？

ちっ，まだまだわからないことが多すぎるぜ。

――ネオ・コウベ・シティの夜空を，1台のトライサイクルが駆け抜けた。



§2 DEATH OF GIBSON ――ギブスンの死

「うぎゃーっ！」

断末魔とも思える男の叫び声が響き渡ったのは，俺たちが工場跡に到着するのとほとんど同時だった。

「メ，メタル，今のは……」

「ええ，確かに人間の，それも男性の悲鳴です」

俺の脳裏を，嫌な予感が過ぎった。

まさか，ギブスンが……。いや，ガウディで調べた限り，驚異的なスナッチャー破壊率を誇っているギブスンが，そう簡単に殺られるとは思えない。

そう言えば，追いつめたスナッチャーは，男だと言っていた。あれは，そのスナッチャーの悲鳴なのでは？

「メタル，お前の持っている特殊能力で，なんとか調べようはないのか？」

「ちょっと待ってください。今，動体反応をチェックしてみます。……あっ，複数の動体反応があります！　ギリアン，気をつけてください。スナッチャーもしくはインセクターが工場内に潜んでいるかもしれません」

「その〝インセクター〟ってのは，なんだ？」

「スナッチャーが警戒センサー用に使うクモ型のロボットです。知能レベルは低いんですが，ニードル・ガンを装備しているので侮れません」

「わかった。とにかく中を調べてみないことには始まるまい。行くぞ！」

夜空の雲が，強風によってとてつもない速度で吹き流されていく。

時折その雲々の中に走る，白い閃光――稲妻。

嵐が近づいているようであった。

俺はメタルを従えて，廃工場の建物に足を踏み入れる。

その真上に覆い被さっている巨大な黒雲が，これから俺たちが出会う惨劇を暗示しているかのようでもあった。





工場内は，ひびが入った壁の隙間や窓から漏れる外の光（主に街灯かなにかだと思うが）で，なんとか視界が保たれていた。

かなりの長い年月，使用されていない建物のようであった。

通路とおぼしき場所には，壊れた配管やコンクリートの塊が転がっており，加えて，ゴミ捨て場になって

ジャン・ジャック・ギブスン（55才）
Jun Juck Gibson



30年間，サイエンス・コップ（科学警察官）として働いていたが，妻（アリス）をスナッチャーに殺され，JUNKERに転職。デカ時代の経験と知識を生かして，驚異的なスナッチャー破壊率を誇るベテランJUNKER。現在，一人娘のカトリーヌと二人暮らし。

いたのであろうか，瓦礫が，至るところに散乱している。

足元が不確かなため，どうしても俺たちの移動速度は遅くなる。

「ギリアン，ボクに内蔵されているライトを使用しましょうか？」メタルが小声で提案した。

「……いや，よそう。万一スナッチャーがいたら，格好の標的に成りかねないからな」

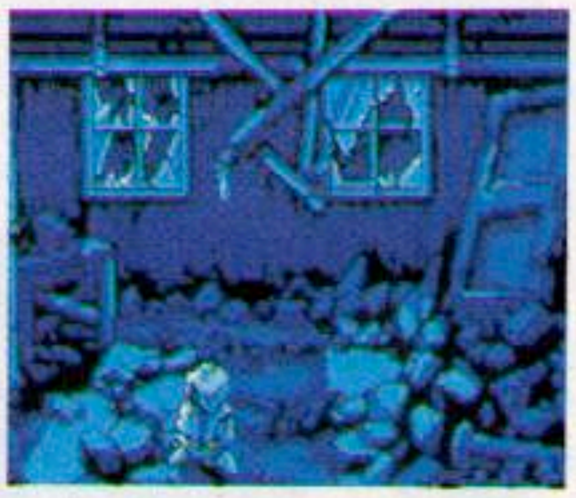
カツーン。カツーン。

静寂が支配する空間に，俺の靴音がやたら大きく反響していた。

……ピシャン。……ピシャン。

ときどき思いだしたように，水滴のしたたり落ちる音がどこからかそれに返事をする。

その二つの音が奇妙な調和をみせ，不思議なリズムを創作していた。



通路の曲がり角に差しかかったところで，もう一つ別の音が加わって，そのリズムの秩序は崩された。

メタルが人工音声の周波数も合わせ損ねるほど，慌てて叫んだのである。

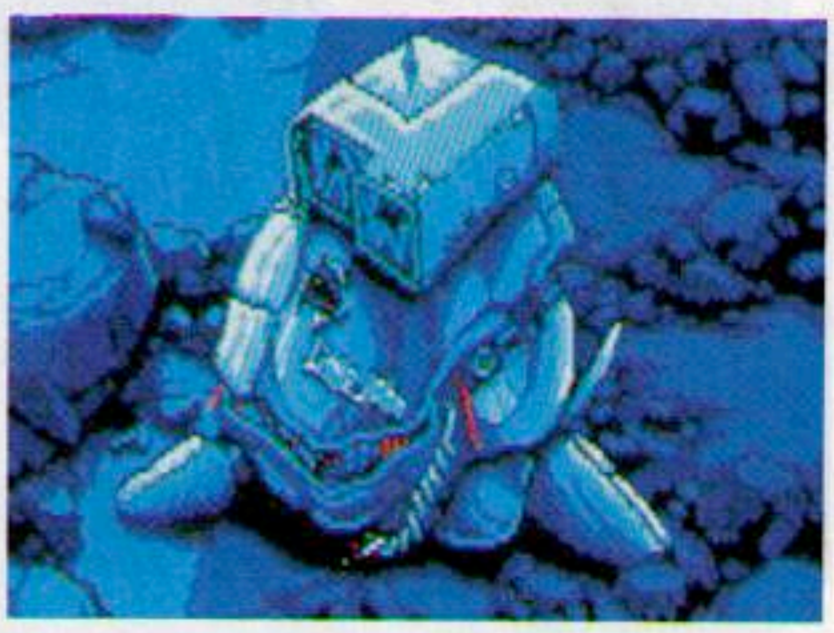
「リ，リトル・ジョン!!」

「メタル，どうした？」

「ジャン・ジャック・ギブスン専用のナビゲーターです。見てください！」

メタルが近寄っていく方角を見ると，そこには，ほとんど屑鉄と化したナビゲーターが転がっていた。

まだ半分溶け続けているような真新しい焼け跡が，ボディを横断している。その真下に，「LITTLE JOHN」というネームが刻まれているのが，辛うじて確認できた。



「おおっ，リトル・ジョン……。メチャクチャだ……」

ナビゲーターにも喜怒哀楽の感情があるのだろうか。メタルは，悲痛としか言いようのない音声を発する。「どうやら，スナッチャーが口から発射するレーザーカノンによって，破壊されたようです……」

――メタルよ。同僚が殺られたのには同情するが，今は悲しんでいられるときじゃない。

「メタル，リトル・ジョンのメモリーはどうだ？　無事なら抜き取っておいてくれ」

「は，はい。データが残っているかどうか，今は確認できませんが，一応メモリーチップを回収しておきます」

メタルは肩から，細い腕のような〝マイクロ・マニピュレーター〟を伸ばすと，丹念にリトル・ジョンの側頭部から薄いカード状のチップを引き抜いた。

その作業を見届けてから，俺はメタルの背をたたき，わざと力強い声をだす。

「よし，ギブスンはこの近くにいるぞ。センサーをちゃんと働かせておけよ，メタル」



それから歩くこと数メートル。

妙な臭いが俺の鼻を突いていた。

どこかの国の郷土料理でも思い起こさせるような，生臭い臭いである。

既にメタルもそれに気づいているようで，盛んに体中のランプを点滅させながら，発臭元を調査しているようであった。

やがて，センサー類を駆使してメタルがそれを発見する。

「ギリアン，右奥の柱の根元に人が倒れています！」

脱兎のごとく，柱に駆け寄る俺。

――スナッチャーか？　それともギブスンなのか？



そこに到着した俺は，しばらくの間，凍りついたかのように動くことができなかった。

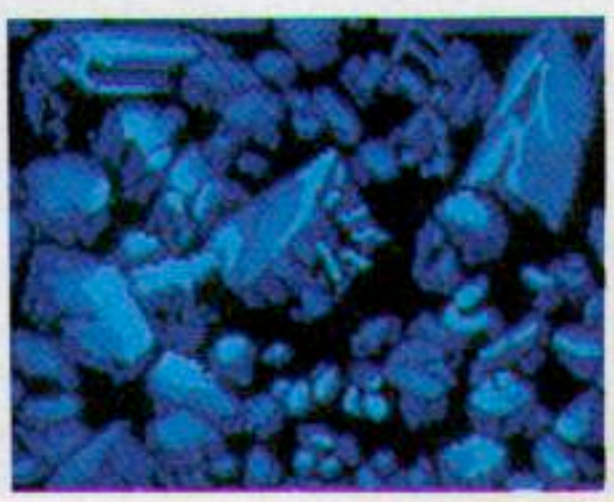
後から追いついたメタルも，まるで機能が停止したかのように，一言の音声も発しようとはしなかった。

飛び散った肉片。べったりと柱や地面に付着した鮮血。人間の形状を保っているとは言えない死体――。

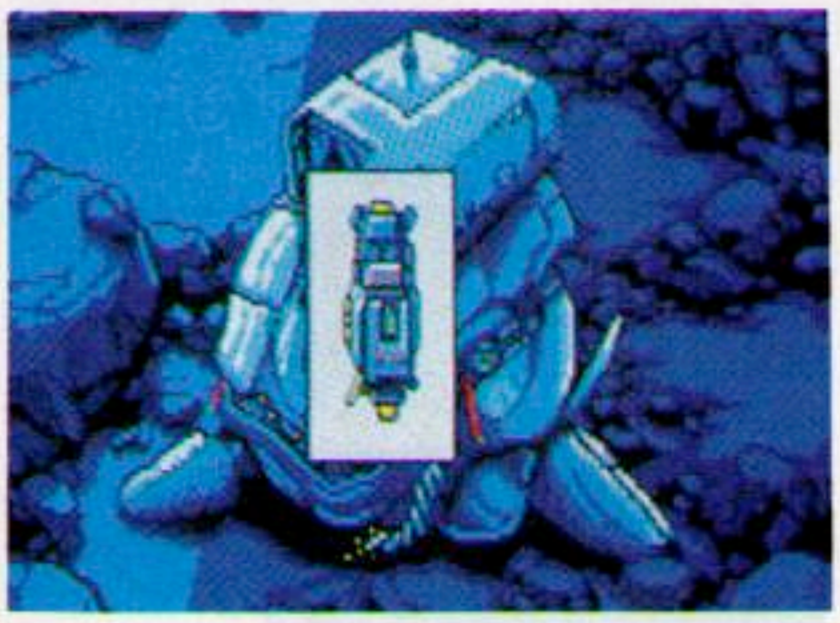
見るも無惨，と形容するしかないのだろうか。
ギブスンの頭部は，胴体と離れて，血の海となった地面の上に転がっている。その首の切り口が，かなり強い力によって，無理矢理ねじ切られたことを示していた。
「ギ，ギブスン先輩……。とんだ出会いになっちまいましたね」
俺は胸の前で十字を切った。「あなたには，いろいろご教授いただこうと思っていたのに……」
――就任するなり，こんな場面に出くわそうとは……。やれやれ。JUNKERとは，退屈しのぎどころか，とんでもなく苛酷な職業のようだ。
俺は感情を押さえて，敢えて厳しい口調で命令した。
「メタル，ギブスンの死体を調べてみてくれ。スナッチャーに関するなにかが出てくるかもしれないからな」
「わ，わかりました。……あっ，ギブスンの右手に毛髪が握られています。それから，爪の隙間からは，皮膚組織が検出されました」
おそらく，スナッチャーに首を締め上げられたときに，ギブスンが苦しまぎれにつかんだものなのだろう。
「よし，メタル，分析を頼む」
「はい，やってみます」
メタルの肩のモニターに，目まぐるしく分析データが表示された。
「分析，終了しました。結果を報告します……毛髪の持ち主は，シルバーグレイの髪で，ヨーロッパ系，A型，RH-の男性です。一方，皮膚組織のほうは，ヨーロッパ系，O型，RH-の女性のものです」
――ん？　おかしいぞ。スナッチャーは，複数だったのか？　ギブスンの報告と違うな……。
その他にも，ギブスンの身体から，幾つかの遺留品が見つかった。なかでも気にかかったのが，胃袋の中に確認された〝残存物〟である。
「ギリアン，分析の結果，残存物は鯨肉であることがわかりました」
「ゲイニク？」
「クジラの肉です。ジャンは3時間ほど前に，どこかで鯨肉を食べたということになります」
――はて，今どき鯨肉を食べさせてくれる店なんて，あるんだろうか？　絶滅を防ぐため，かなり以前から鯨を料理・販売することは，国際的に禁じられているはずなのだが……。
考えを巡らしているそのとき――。
明らかに俺たちは，無防備になっていた。
その間隙を突いて，背後から巨大な〝気〟が迫る。
反射的に振り返る俺――。
メタルの動体反応センサーがアラーム音を鳴らしたのはそれと同時だった。
「動体反応あり！　ドアの向こう側になにかが隠れました」
メタルが叫んだ。
確かに，こちらを覗いていた，輪郭のはっきりしない白い人影のようなものが，ドアの右奥へ姿を引っ込めたような気がする。
それを見てとると，俺はブラスターをしっかりと握りしめ，ドアへと走った。まだ一発も試射していないのが気がかりだったが，スナッチャーを目前にしてそんなことも言ってられない。
ほうっ。
ドアの手前の壁に背中をつけ，大きく息を吸い込む。
〝せえのっ！〟
心の中で掛け声をかけるのと同時に，俺はブラスターの照準を前方に合わせながら，ドアの奥側へと踏み込んだ。
一歩を踏みだす時間が，恐ろしいほど長く感じられた。
が，予想に反して，そこにはスナッチャーどころか，動きそうなものなど一つもなかった。そのうえ土砂が崩れて道がふさがっており，とてもそれ以上は先へ進めそうにもない。
「動体反応センサーを使用してみましたが，この場所では，なにも感知しません」と，メタル。
おかしい，奴は一体どこへ消えたんだ？







「ギリアン，なんだか変な音が聞こえませんか？」
「……いや，なにも聞こえないが」
「私の音波センサーが，確実にさっきまではなかった音に反応しています。ギリアン，ついてきてください」
　メタルは反転すると，入ってきた道を引き返し始めた。俺は今一度ブラスターを握り直し，メタルを追った。



　ドアの外へ出ると，なるほど，メタルが言うところの音が，俺の耳にも捕えられるようになってきた。
　しかし，それはスナッチャーの移動音などではなく，コチコチ，コチコチという，規則正しい機械音である。
「メタル，これは一体，なんの音だ？」
「わかりません。今，センサーを使用したところ，音の発信源は，リトル・ジョンだということが判明しました」
　なぜスクラップ同然のリトル・ジョンが活動を……？　俺は例の曲がり角の瓦礫の中に横たわっているリトル・ジョンを，注意深く調べてみた。
　すると，そのボディに，先刻までなかった長細い機械が取り付けられているのが見つかる。
　こ，これは――時限爆弾っ!!
「たたた，大変だ，じっ，時限爆弾だっ！　メタル，解体してくれっ！」
「ええっ！　……む，無理です。このタイプの爆弾の解体には，かなりの時間がかかります」
「となると……」
　顔を見合わせる俺とメタル。声を揃えて。
「逃げるしかないっ！」
　ピイィィー，ピイィィー。
　走っている最中，メタルから例のアラーム音が鳴りだした。
　ええい，この非常時に。相手なんかしてられるか。

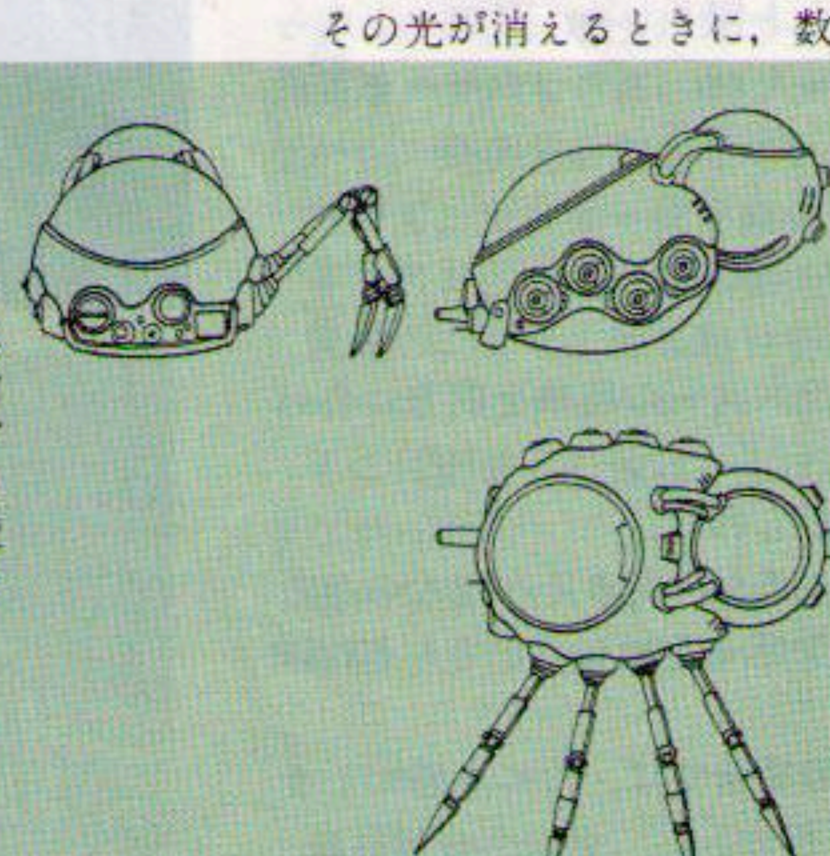


　一目散に出口をめざす俺を，メタルが制する。
「ギリアン，止まってください。危険です！　前方に，多数のインセクターの反応があります」
「なにっ！」
　時限爆弾とインセクターによる挟み討ちか。スナッチャーの野郎め，なんとも念の入ったこった。
　見ると，コンクリートの残骸の隙間から，するすると数体のインセクターが今にもその姿を現そうとしていた。そして，ニードル・ガンの先端を，俺とメタルに向ける。
　が，超高速の動体相手に特殊訓練を積んできた俺の目には，その動きは，所詮コマ送り程度の速度でしかなかった。
　ズギュン，ズギュン，ズギュン……！。
　火を吹く俺のブラスター。
　まばゆい数本の光が薄暗い空間を切り裂く。
　ガシャン，ガシャン，ガシャン……。
　その光が消えるときに，数箇所で生みだされる，小さな爆発音――。
　インセクターがニードル・ガンを発射するよりも早く，俺のブラスターから放たれた光の弾道が，的確にすべての胴体を打ち抜いていたのである。
「ヒューッ，ギリアン，やるじゃないですか」
「ふっ，銃の腕なら，ネオ・コウベ・シティ中を捜しても，俺の右にでる奴はいないぜ。さあ，外へ出るぞ！」
「だめです」
「なんだ，まだインセクターがいるのか？」
「いえ……腰が抜けました」
　おいおい，なんてロボットだ。

インセクター

　スナッチャーが警戒センサー用に使うクモ型ロボット。尻部よりセンサー錦糸をだし，それに触れた者にニードル・ガンで攻撃する。ジェット推進でジャンプ移動可能。警視庁科学鑑識課の「JUNK」が幾度となく解析を試みたが，自爆装置を持つため完全捕獲ができず詳細は不明。

・DATA
正式名……………………INSECTOR-01
全長（本体のみ）…150mm
体長（足を含む）…300mm
全高………………………200mm
重量………………………500g



「つべこべ言うな。走れ！ 爆発するぞ！」
「……だめです，動けません」
「世話のやける奴だ。それっ！」
俺たちが出口から飛びだすやいなや，背後で大爆発が起こった──。



§3 KATHALINE
──カトリーヌ



間違っても，気持ちの良い帰還とは言えなかった。
確かにスナッチャーに関する幾つかの手掛かりは得ることができた。しかし，そのために失った代償──ジャン・ジャック・ギブスンの死──が，あまりにも大きすぎたからである。
俺が戻ったとき，メタルからのリアルタイムのデータ送信によって，すでにその訃報は本部にも伝わっていた。
しーんと静まりかえる局長室。
局長の机を囲んで，ミカとハリーがギブスンの死を悼んでいた。
部屋に俺が入ってきたのに気づくと，ミカが口を開く。「お帰りなさい，ギリアン……。大変だったでしょう……」
「……すまない，俺が未熟なばっかりに」
「ううん。ギリアン，あなたのせいじゃないわ。ジャンは，ジャンは……，精一杯戦ったんだと思うわ……」
ミカの大きな瞳から，はらはらと大粒の涙があふれた。「だけど，だけど……。JUNKERって，なんて哀しい宿命を背負った職業なの……」
そこから後は言葉にならなかった。
肩を震わせながら，ミカは嗚咽を漏らす。
俺には，彼女にかけてやる慰めの言葉がとても見つけられなかった。
と，横からハリーが，酒臭い息をまき散らして，荒々しく俺にからんできた。



「なんのための応援じゃ！……あんたがもう少し……有能だったら……ジャンは，奴は……死なずにすんだかも……」
「ハリー，それは違います！」メタルが抗議する。
俺はそれを制して，「いや，いいんだ，メタル。……ハリーの言うとおりだ」
「ひっく。……ジャンはなあ。ここができてから……ずっと……わしとコンビを組んでおったんじゃ……どうしてくれるんだ……坊主……」ハリーは明らかに泥酔していた。
「おやじさん，そのくらいにしとかないか」
ハリーのからみかたを見かねた局長が，口を挟む。「今回の件は，ギリアンに責任はない。そのくらいは，おやじさんもわかっているだろう」
「……ああ。わかっとるさ……。じゃが……これぐらいは愚痴らせてくれよ……」
再び，その場に沈黙が訪れようとしていた。

アクションゲームの融合

選択型のAVGっていうと，ゲーム・システム的には，似たり寄ったりになっちゃってるのが実状だ。番号を選んで，物語を進行させて……と，ほとんどのゲームがこのパターン。確かにストーリーが面白ければそれでいいって声もあるけど，ゲーム性という点では，他のジャンルに比べると低いということは否定できない。

「スナッチャー」では，そうしたマンネリ化を打破しようと，プラスアルファの要素がいくつも盛り込まれている。冒頭でも触れた，モンタージュの作成や，パスワードや人名を推理するという，プレイヤーに考えさせる部分がそうなんだけど，注目してほしいのが，アクション・ゲームをうまくミックスしているということだ。

今までにもAVGで，戦闘シーンなどにアクションを取り入れたタイプのゲームは何種類かあった。が，どうもチグハグな印象を受けた人もいるんじゃないかと思う。なぜそこをアクションにしなければいけないのか，必然性が感じられなかったからだ。

そのへんをなかなか巧みに処理したのが，このゲーム。主人公ギリアンの視点から見た射撃ゲームとして，ストーリーにうまく組み込んでいる。

そのゲーム自体は，誰もが知ってるだろう"モグラたたき"。画面が9分割されて，敵のいるエリアに対応するテンキーを押すだけという非常に単純なものだ。しかし，なぜかこれが妙に緊張する。殺られるとゲーム・オーバーになるからという理由もあるのかもしれないけど，スナッチャーが出現しそうなときは，プレイヤーにピリピリと緊迫感を与えてくれるのだ。ブラスターを撃つ前に，シフトキーを押さなければいけないってこと――これもウマイ表現だと思う。

アクションの要素をも，ゲームを盛り上げるための演出効果として消化した，数少ない作品の一つだ。



JUNKER本部にある，射撃室。「ジャンカーズ・アイ」という射撃訓練システムがあって，ブラスターの腕を磨くことができる。ここで慣れておいたほうがいいかもしれないね。



ジャンカーズ・アイは，レベル1～4まであって，数字が大きいほど難度が上がる。次々とめくれていくパネルのうち，人間の顔のものを撃たずに，どれだけ的確にスナッチャーの顔を撃ち落とせるかを競うシステムだ。パーフェクトをとるのも，そんなに難しくはない。

それを避けるように，局長が話しだす。

「ギリアン，最初から大変な事件に出くわしてしまったな……。まさかあのギブスンが……。だが，これで君にも，JUNKERが生半可な心構えでできる仕事じゃないというのがわかってもらえたと思う」

俺は唇を噛み，大きく頷いた。

局長が続ける。

「我々はいつまでも仲間の死を悲しんでいるわけにはいかない。スナッチャーどもを一掃すること，それがギブスンへの一番の供養になるに違いないのだ」

「ええ，私もそう思います」

いつの間にか俺は，自分自身の中に，残虐なスナッチャーに対する人間としての"怒り"が，ふつふつと煮えたぎっているのを感じていた。

「ギブスンは，確証がつかめるまでは捜査内容を私にも明かさない主義だった。最近の奴の態度を見ていると，どうやらスナッチャーについての重要な事実――弱点や見分けかたなどをつかみかけていたらしい。生前のギブスンの足取りを追って，それを解明するのだ。頼んだぞ，ギリアン」

局長は，悲しみを忘れるかのごとく，一気にまくし立てた。

「わかりました。ギリアン・シード，必ずやスナッチャー軍団を壊滅させてみせます」

俺は敬礼をしてから，ハリーの前へ足を運んだ。

「おやじさん，これ……リトル・ジョンのメモリーチップです。ギブスンが命がけで調べたなにかが入っているかもしれません。分析をお願いします」

と，ハリーはそのチップを力強く握り締め，先刻までにはなかった，優しい表情を見せる。

「……わかった。……すまなかったな，ギリアン……ひどいことを言っちまって……」

「いいんですよ」
おやじさんたちの心の動揺を，決して非難することはできない。
もしもギブスンと親しい付き合いをしていたなら，俺だって間違いなく，こうして捜査を続行することはできなかったであろうから。

とりあえずは手近なところ，刑事部屋にあるギブスンの机とロッカーから調べてみることにした。

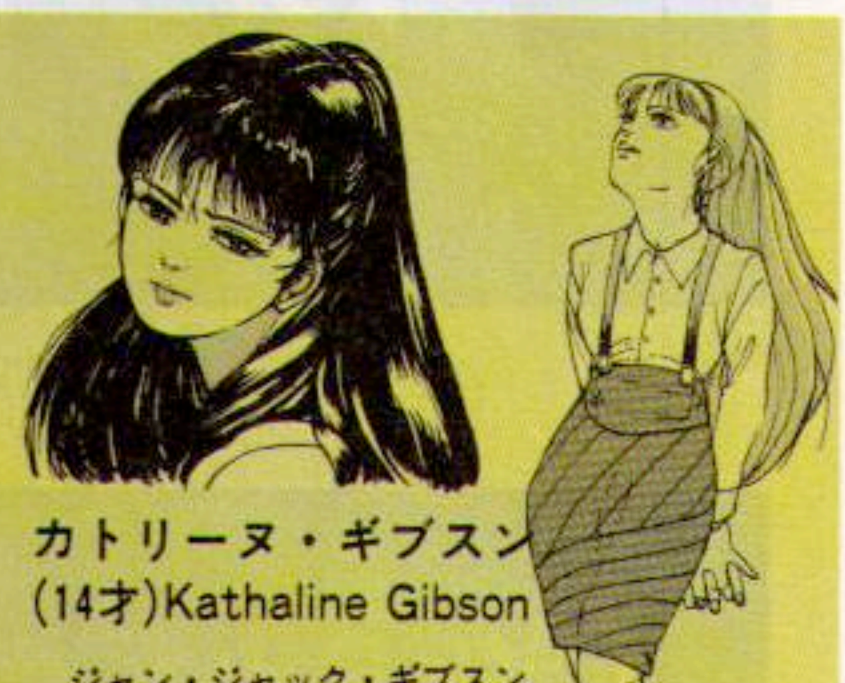


案の定，幾つかのギブスンの所持品と思われる物が見つかった。
机の上に置かれた紙切れには，「ヤツは決まって，木曜日にあの店に現れる」——一体，なんのことだ？
鍵のかかった引きだしも，ギブスンの遺品を使えば，なんてことはない。
むっ，このカプセルは……？
「メタル，分析してくれ」
「OK，ギリアン。……これは胃潰瘍の薬です。そう言えば，ギブスンの死体の胃袋は，かなり重症の潰瘍でしたね」
「ギブスンは胃潰瘍で，それを自覚していたのか。だとしたらなぜ，わざわざ鯨料理などという胃に負担のかかるものをスナッチャーを追いつめる前に食べたりしたんだ？」
「わかりません。いずれにせよ，鯨料理が鍵を握っているのは間違いないようですね」
「よし，その線からあたってみるか。その前に……」
「ギブスンの家へ行ってみるんですね」
「そのとおり」
——メタルの奴，俺の考えることがわかるようになってきたじゃないか。
ギブスンの机やロッカーから見つけた，フロッピーディスクその他を手にすると，俺たちはトライサイクルに乗り込んだ。
なにも言わなくても，メタルが行き先指定カーソルをギブスンの家に合わせてくれる。
俺とメタルとの間に，不思議な信頼関係のようなものが形成されているのを初めて実感したのが，そのときだった。

トライサイクルは，北野の高級住宅街の一角に静かに着陸した。
——ほう，危険な職業というだけあって，JUNKERの収入は決して悪くはないようだ。



眼前に建っているギブソン家は，アーリーアメリカン・タイプで，なかなかの風格を漂わせている。これだけの大きさとデザイン，さらに立地条件を考えると，かなりの高級屋敷であることは，素人目にもわかった。
いかにも質感のありそうな木製のドアをノックしてみる。
コンコン，コンコン。
「誰，誰なの？」ドアの向こう側から，少女のおびえた声が聞こえた。
「新しくJUNKERに配属された，ギリアン・シードです。今回のジャン・ジャック・ギブスンの件について少々……」
「ちょっと待って。あなた，本当にJUNKERなの？　JUNKERなら，その証拠を見せてちょうだい」
父が死んだことに対して，過敏になっている彼女の気持ちもわからないではない。俺は彼女の言うがままに，JUNKER証を見せたり，質問に答えたりした。
しばらく誠意を見せていると，ようやく彼女の気持ちも落ち着いたようだ。
「疑ったりしてごめんなさい。どうぞ中へ入ってください」
ドアを開けてくれたのは，紛れもなくジャン・ジャック・ギブスンの愛娘，カトリーヌだった。
その赤くはれあがった目の周りが，彼女がこれまでに流した涙の量をうかがわせた。
「このたびは，俺が無力だったばかりにお父さんを……」
俺がそう言いかけると，カトリーヌは首を大きく横に振り，しっかりとした声で，一言一言を噛みしめるように話し始めた。
「私，父のことは覚悟してました。……これでもJUNKERの娘よ。……もう



カトリーヌ・ギブスン
(14才)Kathaline Gibson
ジャン・ジャック・ギブスンの娘。「ミス・サーティーン」のオーディションに合格して以来，主にホログラム・サインのCMモデルとして活躍中。しかし，「アルファビル」による「ジュニア・ハイスクール」課程中級に在学中のため，学業を優先させている。



大丈夫。心配しないで，ギリアン。泣こうにも，涙は枯れはてちゃったから」

あどけなさを残しながらも，ふと見せる大人びた表情。CMで見ているとおり，やはりカトリーヌは美しい少女だった。

加えて，その汚れを知らない美しさの中に，ある種の気丈さが見え隠れしている。

モデルとして実社会で働いているせいもあるのかもしれないが，とても14才のそれとは思えない精神的な強さであった。

「ところで，本部のお父さんの机から，こんなものが出てきたんだが……」

例のフロッピーディスクを見せながら，俺。

「あっ，これは父のパソコンのだと思うわ。奥の書斎にあるので，どうぞ」

カトリーヌに連れられて入った書斎には，かなり旧式のパソコン，PC-88mk2百式(SR以降)が置いてあった。

さっそくディスケットを挿入して，電源をONにする。

しかし，画面には無情にも『パスワード？』との文字が表示された。



「カトリーヌ，お父さんのパソコンのパスワードって知らないかい？」

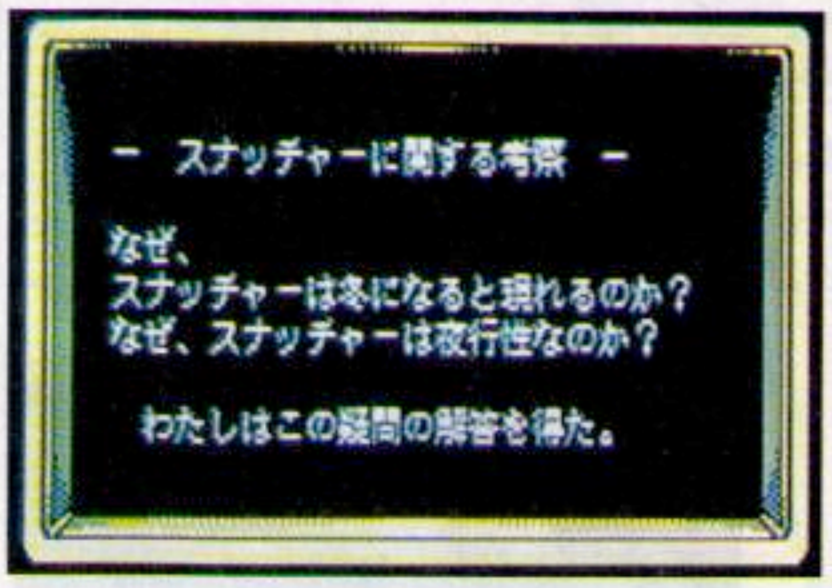
「ごめんなさい。父は仕事のことは，一切私に話しませんでしたから……」

仕方がない――。俺は，めくらめっぽうにキーボードをたたきはじめた。

なかには，俺のこの無謀とも思える行動を非難する人もいることだろう。が，案ずるより生むが易しとは，よくも言ったもんだ。メタルの適確なアドバイスで，なんとか俺はパスワードを見つけだすことに成功したのである。

フロッピーディスクの中身は，『スナッチャーに関する考察』という題の文章であった。以下にその内容を要約して紹介することにする。

▼なぜスナッチャーは夜行性で，なおかつ冬になると現れるのか？　それは，奴らの不完全な人工皮膚のためである。日焼けをすると，皮膚ガンの症状を起こし，命取りになりかねない。従って，スナッチャーは太陽光線を嫌う。



▼スナッチャーの判別方法

①皮膚の状態を調べる。

②ガン細胞特有の悪臭がするかどうか臭いをかぐ。

③衣服が人工消臭繊維でできているかを調べる。

④日焼け止め〝サン・スクリーン〟を持っているかどうか調べる。

▼さらに奴らは，ガン化した皮膚をどこかの病院で治療&メインテナンスしているはずである。

私はついにその病院を見つけた！　　　12月13日

P.S.バウンティ・ハンターのランダム・ハジルとかいう男には気をつけろ。

パソコン以外にも，ギブスンの書斎には，手掛かりになりそうなものが幾つかあった。

闇市『JOY-DIVISION』のシールが張られた日焼け止め〝サン・スクリーン〟のビン。

なぜかクイーンの位置が空いているチェス盤（その抜けている駒は，言うまでもなくギブスンのコートから既に見つけている)。

今の俺には，それらが何を意味するのか，全く理解不能である。

「カトリーヌ，お父さんに関するものは，ここにあるので全部かい？」

「ええ，父のものはすべてこの書斎に……あっ，あと，裏庭のアリスもそうだわ。……父が飼っていた犬なんです。アリスって名前は，死んだ母からとったものなの」

一応アリスに会ってはみたものの，特に気になるところはなかった。



これにてギブスン家の調査は一通り終わったわけか――。

「協力どうもありがとう。俺はこのまま捜査を続ける。念のために俺のビデオフォン・ナンバーと住所を渡しておくよ。なにかあったら，ここに連絡してくれ」

「うん，わかった。ギブスン，気をつけてね……」

それに続く言葉が，カトリーヌの喉まで出かかったように見えた。が，彼女はそれを飲み込むと，極めて平易な言葉にすり替えた。

「またときどき，来てちょうだい……」

短い一言ではあったが，実に感情の込められた言いかたであった。

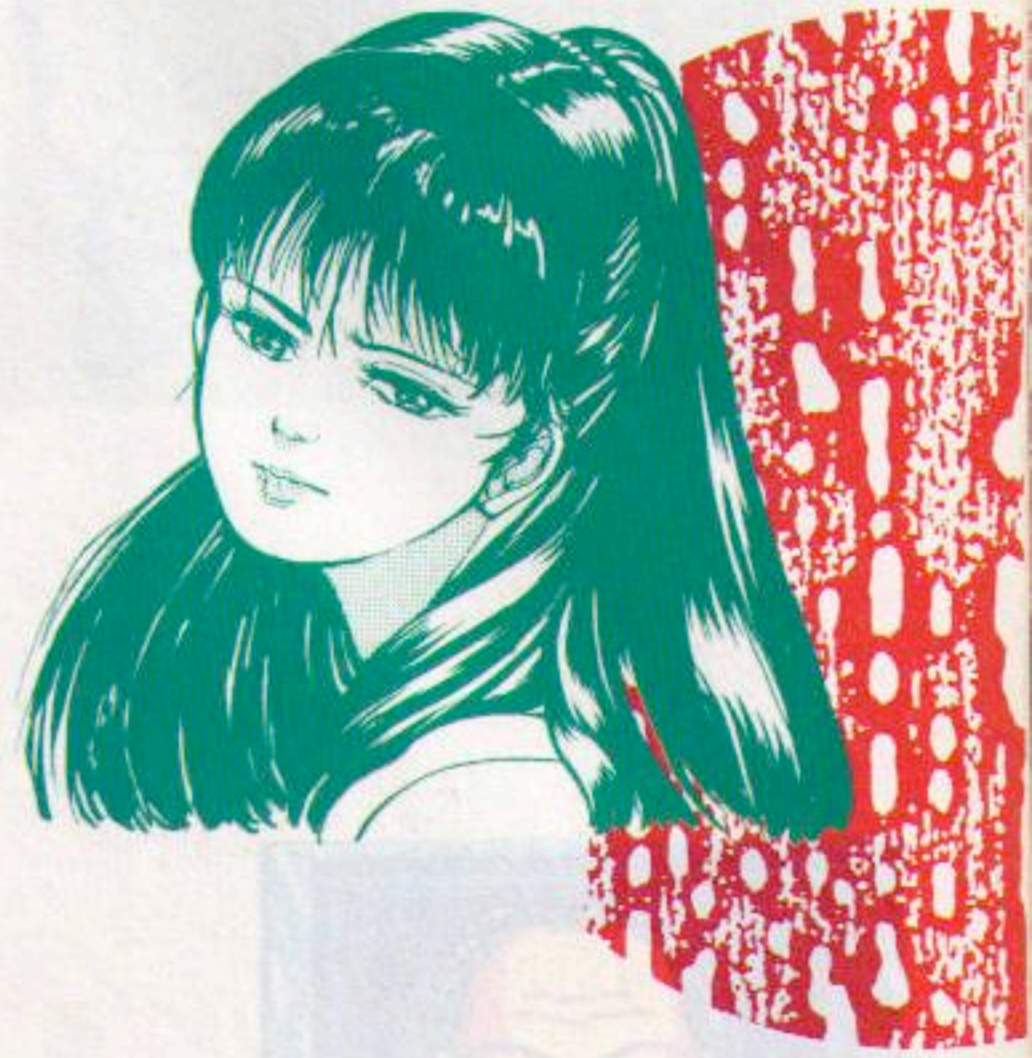
毅然とした態度をとってはいるものの，カトリーヌの悲しみがどれほど深いものなのか，痛いほど伝わってくる。

別れの挨拶をし，玄関のドアを開ける。

外に出ると，東の方角の空が白み，いつの間にか，夜が明けようとしていた。

屋敷の周りに植えられた，手入れの良く行き届いた美しい花々に目をやる。

その葉についた朝露の雫が，まるでカトリーヌの涙のようにも感じられた。



§4 JOY-DIVISION
——ジョイ・ディビジョン

「鯨料理？　もしかしたらナポレオンなら知ってるかもしれないわ」

数日の間，行き詰まったかのように思われていた捜査は，ミカのその一言によって，予期せぬ進展を見せた。

「ナポレオンっていうのは，誰だい？」仮眠から目を覚ましたばかりなので，俺の声はまだいくらか曖昧さを残している。

「ジャンが使っていた中国人のタレコミ屋よ。確かサイエンス・コップだった頃からの付き合いだって言ってたかしら……」

「どうやったらそのナポレオンと連絡がとれるかな？」

「ごめんなさい，そこまではわからないわ」

「サンキュー，それだけでも十分だ」

ミカから得た情報を頼りに，俺はコンピュータ・ルームへと走った。まだ眠っている脳細胞を起こすかのように，頭を大きく振りながら。

困ったときのガウディ頼み——おそらくネオ・コウベの情報を統括しているガウディなら，そのナポレオンという人物に関しても，なんらかのデータが登録されているに違いないと考えたからである。

さっそくシートに座り，ナ，ポ，レ，オ，ン，とキーボードをたたいてみた。

しばしのアクセス時間の後，該当データ発見を知らせるランプが点滅を始める。それに伴い，ディスプレイを埋め尽くすかのごとく，大量の文字が画面に浮かび上がった。

が，しかし——。

それは，ナポレオンはナポレオンでも，フランスの英雄，ナポレオン・ボナパルトについてのデータであった。

「ちっ，ガウディの奴，お茶目にもほどがあるぜ」

お手上げという仕草をしている俺を見て，メタルが提案する。

「ギリアン，ハリーに聞いてみませんか。ギブスンとは仲が良かったみたいですから，知ってるかもしれませんよ」

「そうだな。行ってみるか」

俺はガウディをキッと睨んでから（もちろん，それがなんの意味も持たないことは先刻承知なのだが），メカニック室へ向かうムービング・ウォークに乗った。



久々に訪れたメカニック室は，息苦しさを感じるほどの酒臭い空気が充満していた。

椅子にぐったりともたれかかっているハリー。

おそらく，あの日以来ずっと酒を飲み続けているのであろう。これでは，まだメモリー・チップの分析など期待できそうにない。

と，ハリーはこちらに気づき，虚ろな笑みを浮かべた。

「おおっ，ジャン……帰ってきたか……。どうじゃ，例の計画は……スナッチャーを根こそぎ退治できるって奴を，そろそろわしにも教えてくれよ……」

明らかにハリーは，ギブスンの幻影を俺に重ねて見ていた。

言葉が途切れると，手にした先の細いブランデーのビンに口をつけ，グイッとあおった。

——ん？

「おやじさん，このブランデーはどうしたんですか？」ハリーの肩を強く揺すりながら，俺は尋ねた。

「……ん，おお……こいつは，お前さんの机から持ってきた奴じゃよ。……勝手に持ちだして悪かったな……なあに，形見分けをしてもらおうと思ってな……」

そこまで言ったとき，幻覚世界を旅していたハリーの意識が，現実に引き戻される。

「形見分け……？おおっ……そうじゃ……ジャンはもうこの世には……」

ハリーは目頭をおさえ，沈痛な面持ちで押し黙った。

「メタル，ビデオフォンだ。ビデオフォンをかせ！」突然光明を見いだして，叫ぶ俺。

「はあ，ビデオフォンなら私の中に内蔵されていますが……。いきなりどうしたんですか？」

「まあ，見てろって。とは言っても，自分の体の一部だから見えないか……」

「いいえ，もちろん自分のモニターに何が映っているかぐらいはわかります。それに，ギリアンが何をしているかだって，こうすれば……」

そう言うと，メタルは首をニョキっと伸ばし，器用にも自分で自分のモニターをのぞき込むようなポーズをとった。なんとも滑稽な姿勢である。

「……わかったわかった。いいか，しっかり見てろ。3,9,の，5,……。これでよし」

ボタンを押し終えると，呼び出し音が2，3度鳴った後，黒髪にダーク・ブラウンの目をした，なんともうさん臭そうな中国人の顔がモニターに映った。





ほらな——。メタルに向かって軽く親指を立ててから，俺はその中国人と話し始める。

「おまえがナポレオンか」

「ああ，そうだが，あんたは誰だい？」妙にしゃがれた声である。

「ギブスンの知り合いだ。情報が欲しい」

「あんたもデカかい？　信用ならんな。……よし，それじゃ暗号といくかい」

——暗号だって？　少々焦りはしたものの，いざナポレオンが口にしたキーワードを聞いてみると，なんてことはない。まさにガウディさまさまだ。

俺はナポレオンと会う約束を取り付け，ビデオフォンを切った。

トライサイクルの駐車場に向かう途中，メタルが不思議そうに聞く。

「どうしてナポレオンの連絡先がわかったんですか？」

「ふっ，言うなれば，〝ナポレオンに乾杯〟ってところかな」

ナポレオンと待ち合わせをした場所は，ネオ・コウベ・シティ高層ビル街のほぼ中心に位置するアルタミラ前であった。

その周辺は，年末ということもあり，クリスマス・ソングが方々から聞こえ，忙しそうに行き来する人々で賑わっている。

クリスマス・ケーキを手に，家路を急ぐサラリーマン。ここぞとばかりにプレゼントを親にねだっている男の子。肩を組みながら，年に一度のロマンチック・ムードを味わっている恋人たち……。

そうした光景に見とれていると，ふいに背後から声をかけられた。

「あんたが新しいJUNKERかい」

ビデオフォンで聞いたとおりのしゃがれ声をした，ナポレオンである。が，頭には帽子をかぶり，その上から，ローブのようなものをまとっていた。

やはりタレコミ屋は，余計な人間に顔を見せないようにする必要があるのだろう。一歩間違えば，情報に関係する相手から命を狙われかねない，危険な裏の仕事であるのだから。



そう考えると，〝木を隠すなら森の中へ〟——意外とこういう場所のほうが人目につきにくいのかもしれない。

「まあ，ギブスンのだんなも気の毒なことになっちまったな。で，あんたは何を知りたいんだい？」と，ナポレオン。

「あ，ああ，このネオ・コウベ・シティで鯨料理を食べさせている店を教えてほしいんだが……」

俺がそう聞いてから，一時の沈黙があった。

何をもたもたしているんだ——そんな顔を俺がすると，ナポレオンが不機嫌そうに言う。

「ふん，あんた，名前はなんていうんだい？」

「名前？　ギリアン・シードだが……」
「ギリアンか。あんた，礼儀ってものを知らんのか。ただで情報がもらえるほど，世の中甘くはないんだぜ」
くそっ，なんて現金な奴なんだ。
俺は財布から数枚の紙幣を取りだし，折りたたむと，ナポレオンの服の袖に突っ込んだ。
――ああ，こういうのに使った金は，経費で落ちるんだろうか……。
「へへっ，そうこなくちゃな。なんだい，鯨料理の店かい。それならアウターヘブンっていうエイリアン・パブが有名だぜ」
「アウターヘブン？」
「ああ，けっこう各界のVIPが集まる店でな。コスプレ・タイムになると，客もメイクをしてないと入れないのさ。もしもあんたが入ろうってんなら，JOY-DIVISION製のマスクが必要だぜ」
JOY-DIVISION！――ギブスンの家で見つけた，日焼け止めのビンに記してあった店の名前だ。間違いない，これぞまさしくギブスンの足取りなのだ。
「そ，そのJOY-DIVISIONってのは，なんだ？」
「コウベの高架下がベースになった，なんでもマーケットのことさ。危ない連中が集まってるから，行くんだったら，気をつけな」
「それで，そのアウターヘブンとJOY-DIVISIONは，どこにある？」
「おっと，そいつは別料金だぜ」
ちっ。足元を見やがって。だがこの際，多少の金をけちってはいられない。
「ほらよ，これでどうだ」
「まいどありい。アウターヘブンは，HS区の17番街だ。JOY-DIVISIONは……まあ，こっちは有名だから，わざわざ俺が教えるまでもないだろう。あんたもJUNKERだったら，それくらい自分で調べるんだな」
言い終えるとナポレオンは，そそくさと雑踏の中に消えていった。
――まったく，金を払ったっていうのに，なんていい加減な奴なんだ！
腹立たしくも思ったが，確かに大々的な宣伝を展開しているJOY-DIVISIONの連絡先を見つけるのには，さほど時間は要さなかった。灯台もと暗し，というやつである。
JOY-DIVISIONにビデオフォンで連絡をとり，店の場所を確認してから，俺とメタルはアルタミラ前を後にした。

問題のサンノミヤK区5番街は，いかがわしい露店が立ち並ぶ通りであった。
♪ッタ～ンタンタ～ン～
どこの国のものとも知れない奇妙な音楽が，JOY-DIVISIONの店奥から流れ出ている。
行き交う人々も，皆どこかしら異様である。
「どけ，こんなところで立ち止まんな！」
「邪魔だ，道を開けろ！」
多くの人は，他人と目を合わせないように下を向きながら，急ぎ足で歩いている。肩をぶつけたりすると，とげとげしいセリフを吐く者も少なくない。
身分証明書なしで商品の販売・購入ができる，客の購入記録は一切残さない――そうした闇市の性格上，なにかヤバイ買い物をしたい連中が，この一角に集まっているようだ。
それにしても，進路に立っている他人に対してタックルをくれていくようなこの歩きかたは，尋常ではない。
「いてて…(こいつ，前見て歩けよな！)。メタル，店に入るぞ。このままじゃ，体がアザだらけになっちまう」
「ええ，そうしましょう，ギリアン。私も首の耐久力に自信がなくなってきました」

ネオ・コウベの大地主，コナミのマークに似た看板の下をくぐり，JOY-DIVISIONに足を踏み入れると，店内はかなりの繁盛ぶりであった。
買い物をしている客を見渡すと，白い肌，黒い肌，その中間のような色……まさに人種の坩堝である。
「いらっしゃい！　ゆりかごから墓場まで，うちにはなんでも取り揃えてあ

ナポレオン(年令不詳)
Napoleon



ギブスンが使っていたタレコミ屋。中国人らしいのだが，それ以上のことは誰も知らない。『大惨事』以後の大量移民と共に，ネオ・コウベにやってくる。花粉症なのか，絶えずくしゃみをしている。





りますぞ」と，愛想を振りまく店員。

とは言っても，薄汚れた長衣で深々と身を包んでおり，妖しい光りを放つ目ぐらいしか確認できないのではあるが。

「ちょっと失礼する。こういう者なんだが……」俺はJUNKER証を見せて，聞き込みをしてみることにした。

「ちっ，ポリ公か。わしはこの商売は長いんじゃ。そんなもんでビビるかい！」

「まあ，待て待て。ちょっと聞きたいことがあって来ただけだ」

「けっ，だれがポリ公なんかに協力するかい」

そう反抗的な態度をとられると，こちらとしても下手にでてばかりいるわけにはいかない。

「おいおい。こっちには本庁の捜査課へ通報して，おたくの店を検挙することもできるんだぜ」

「……ぐっ。……聞くなら早く聞いてくれ。商売の邪魔になっちまうからな」

急に店員の語調が柔らかくなる。

「ああ，手間は取らせないぜ。まずアウターヘブンって店について教えてほしい」

「ほう。どこから聞いたのかは知らないが，お前さん，アウターヘブンを知っているとはな……。そうさ，あの店はうちと，アプライエンスの独占契約を結んでいるのさ」

「アプライエンス？」

「コスプレタイム用のメイクマスクのことさ。あそこのコスプレタイムに入りたいんだったら，うちのマスクが必要だぜ。この際だから，買っていきなされ。……さあ，どれにするね？」

――なるほど，ナポレオンが言っていたとおりだな。

店員の商売根性をそのまま受け入れるのはシャクだったが，俺は，イースター島にある巨大な石像，モアイのマスクを買った。数ある中から迷わずこれを選んだ理由はただ一つ，値段が安かったからである。

「まいどどうも。……おお，特殊メイキスト，リック・ベーカリーのオリジナル作品を選ぶとは，お目が高い。これでお前さんは，一躍アウターヘブンの人気者さ。ひっひっひっ」

「もう一つ聞きたいことがあるんだが……」

「どうぞなんなりと。品物さえ買ってもらえれば，お客様だからな」

――ころりと態度を変えやがって。最初からそうやって素直に協力しろってんだ。

「この人に見覚えはないか？」ギブスンの写真を見せてみた。

「ああ，この人かい。良く来る人さ。そうそう，この間も日焼け止めを一つ買っていったな。……だが，いつも買い物が目的で来るのではないようだったのう。他の客のことをじっと見ているようじゃった」

張り込み，か。

ギブスンの追っていた男が，JOY-DIVISIONとアウターヘブンに，なんらかの理由でしばしば足を運んでいた。その理由が，男がスナッチャーであるためのものだったとしたなら……。

そうだ，すべてが1本につながるぞ。

「メタル，次へ行くぞ」

「へい親分，合点承知！」

「……お前，どこでそんな言葉を覚えたんだ？」

「へへっ。この前から，ケーブル・テレビの情報をメモリーしているんです」

「……ったく。なら，アウターヘブンのコスプレタイムはさぞかし楽しいだろうよ」



§5 OUTER HEAVEN
——アウターヘブン



HS区17番街——。

「へい，らっしゃい，らっしゃい。そこのお兄さん，ちょっと寄っていかないか」

アウターヘブンの前では，狼のマスクを被った呼び込みが，客引きをしていた。派手なタキシードに長ネクタイ，それにアンバランスなマスクとくれば，否が応にも人目を引く。

違法である鯨料理を扱っているのに，堂々とこれほど目立つ客引きをするとは，なんとも豪気な店である。

忙しそうに道行く人に声をかけている呼び込みに近づくと，俺はその耳元でささやいてみた。

「この店で鯨料理が食べられるってのは本当かい」

狼男の呼び込みは俺の姿を確認すると，一瞬の間をおいてから，作ったような低い声色で答え始める。

「なにを言うんだい，だんな。鯨を料理するのが法律に触れるってことを知らないんですかい。うちの店じゃその手のヤバイことは一切してませんぜ」

身振り手振りを交えながらのかなりのオーバー・アクションである。

しかし，俺のほうもその程度のご体裁で，はいそうですかと，素直に引き下がるわけにはいかない。

「いや，実はナポレオンっていう男とか，JOY-DIVISIONのおやじとかに紹

関連CD

最近のゲームっていうと，ゲーム中，ギンギンにBGMが鳴り続けるものがほとんど。ところが，「スナッチャー」のBGMで特筆すべき点は，音楽が常に鳴りっぱなしになってはいない，ということだ。

映画やテレビドラマがそうであるように，本当に必要な場面でだけ音楽が流れる——このゲームでは，その手法を用いている。そう，音楽までもが演出効果のひとつになっているのだ。

もちろん，アーケード・ゲームで数多くのBGMファンを持つコナミだけに，曲自体のクオリティもメチャクチャ高い。ゲーム・ミュージックが限りなく映画音楽に近づいた一作と言っていいだろう。

この「スナッチャー」の全BGMを収録したアルバムがキングレコードから発売されている（音源ソース：PC88サウンドボードII版）。単に音楽を録音しただけではなくて，曲によっては，英語のナレーションやセリフなんかが入って，ドラマ仕立てになっていたりするのがウレシイ。ギリアンやジェミー，ランダムの声が聴けるぞ。オススメ！

「SNATCHER」

発売元：キングレコード（Tel 03-945-2111）
　　～コナミ・レーベル
メディア／価格：
　　CD　276A-7713　　2,843円（税込）
　　CT　230T-3713　　2,369円（税込）
収録曲：①プロローグ（AD2042 Neo Kobe City）②大惨事・魔王ルシファーの降臨（Bio Hazard）③オープニング（Twilight of Neo Kobe City）④Evil Ripple⑤Theme of Snatcher⑥遭遇・謎のバイオロイド（Creeping Silence～Criminal Omen～Danger Dance…&Justice All）⑦Innocent Girl⑧Theme of Jaime⑨Decadance Beat⑩追跡・ジャンの残した手がかり（The Entrance to Hell～Theme of Izabel）⑪Theme of Kathaline⑫Theme of Junker⑬罠・トライサイクルの暴走（Blow Up Trycycle）⑭脱出・ランダムよ永遠に（Spreading Diehard～Eternal Promise）⑮Faded Memories⑯死闘・暴かれた真実（Restoration～Preasur of Tension～Endless Pursuer）⑰エピローグ（Beyond Sorrows）⑱Master of Puppets Among The Disease⑲新たなる戦い（Theme of Ending）
特典：16ページ解説書（ライナーノーツ，日本語対訳付き台本，ラフ・スケッチ集，楽譜2曲分）





介を受けたんだが……」

俺がそう言うと，客引きは突如，おかしくて仕方がないという様子で，腹をかかえて笑いだした（なぜ彼が笑ったのか，そのときの俺には皆目見当もつかなかったのではあるが）。

「はーっはっはっ，ひーっひっひっ。そうか，わかった。ナポレオンの紹介ね，はっはっはっ。よし，おいらのほうからマスターに連絡して，だんなが鯨料理を食べられるように手筈を整えておきますわ。もちろん，だんながすべて内密にしてくださるという前提の上ででですがね――うちの鯨肉料理は，天下一品ですぜ。なにしろ，日本近海から南氷洋の間で密猟したクジラしか使ってませんからね。遺伝子操作で作られたようなものとは，全然味が違いますぜ。はーっはっはっ，ああ腹がいてえ」

こいつ，なにがそんなにおかしいんだ？　まあいい，とにかくこれで確認はとれたわけだから。

「OK，それじゃさっそく食わせてもらおう」

「だんな，ちょいと待ってくだせえ」

店に入ろうとする俺を，狼男が体で制した。「今はコスプレタイムなんです。悪いんですが，そのままの格好じゃ入店を許可するわけにはいきませんね」

おっと，そうだ。忘れてた。せっかく買ったんだから，活用しないとな。

俺はモアイのマスクをしっかりと被りながら「これでいいんだろ？」

「はいはい，ちゃんとJOY-DIVISION製の物のようですね。準備がおよろしいようで」

狼男は入口のカーテンを開け，流れている音楽の音量に負けないように大声で叫んだ。「スペシャル・ゲスト1名様，ご案内っ！」

さっそく俺とメタルは，そのカーテンの隙間から入っていこうとする。

そのとき狼男が，先刻まで俺の陰に隠れていたメタルの存在に気づいた。

「おや，だんな，そのロボットはなんですかい？」

びくりとするメタル。

――まずい，ここでJUNKERだということがバレると，店内での捜査に支障が出る。

「……ん，ああ，こいつは俺のペットのようなものなんだ。なに，本当は家に置いてこようと思ってたんだが，勝手についてきちまってね」

「ペットねえ……」

じろじろと狼男がメタルを眺める。「本来ならペットの入店はお断りするところなんだが――ま，いいか。なにしろあのナポレオン様の御紹介とあっちゃな。はっはっはっ」

ほうっ，ナポレオンはこの店に顔がきくようだな。あれだけの先行投資をした甲斐があったってもんだ。



俺とメタルが案内されたのは，重々しい扉によって区切られた，店内の隅にある支配人室であった。

部屋の中では，四つ目の実に奇怪な怪物のアプライエンスを被っている男が，忙しそうに帳簿をいじっている。俺たちに気づくなり，その怪物が胸に手をやり一礼をするのは，結構不気味であった。

「ようこそいらっしゃいました。私がこの店のマスターです。お客様は鯨肉料理がお望みだとか……。少々お値段が張ってしまいますが，よろしいですか？」

高額の出費は痛いが，ここまできて断るわけにもいかない。

「ええ。それが目的できたんですから，ぜひとも……」

俺はマスターが提示した，とても安いとはいえない金額を即金で払った。その際に，ちらりとメタルに視線をくれる。

メタル，俺が金を払っているこの場面を，しっかりとメモリー・チップに記録しておいてくれよ。後でそれを証拠に，局長から金を返してもらうんだからな――。

「たしかに頂戴致しました。料理のほうは後ほど席にお持ちします。今日はイザベラのステージもありますので，どうぞごゆっくり」と，マスター。

「イザベラ？――ひょっとして，あの21世紀のマリリン・モンローと言われている，イザベラ・ベルベットですか？」



「そうです。彼女は無名時代，うちで働いていましてね。今，ホロムービーの撮影がオフなので，来てもらってるんですよ」

わあお，こんなところでイザベラと会えるなんて！

一目散にステージ脇の席に駆け込もうとする俺。が，そのズボンの裾を，メタルがしっかりと握って離さない。

――おっと，いかんいかん。ここへ来た本当の目的を忘れるところだった。

俺はギブスンの写真をマスターに見せ，当たり障りのないように話を脚色しながら尋ねてみた。

「いや，実は友人を探しているんですがね。借金をしたまま行方をくらましてしまったんですよ。こいつなんですが――ここの店で見かけませんでしたか？」

「うーん，私はあまり店に出ないものですから……。店の従業員のほうが詳しいと思いますよ」

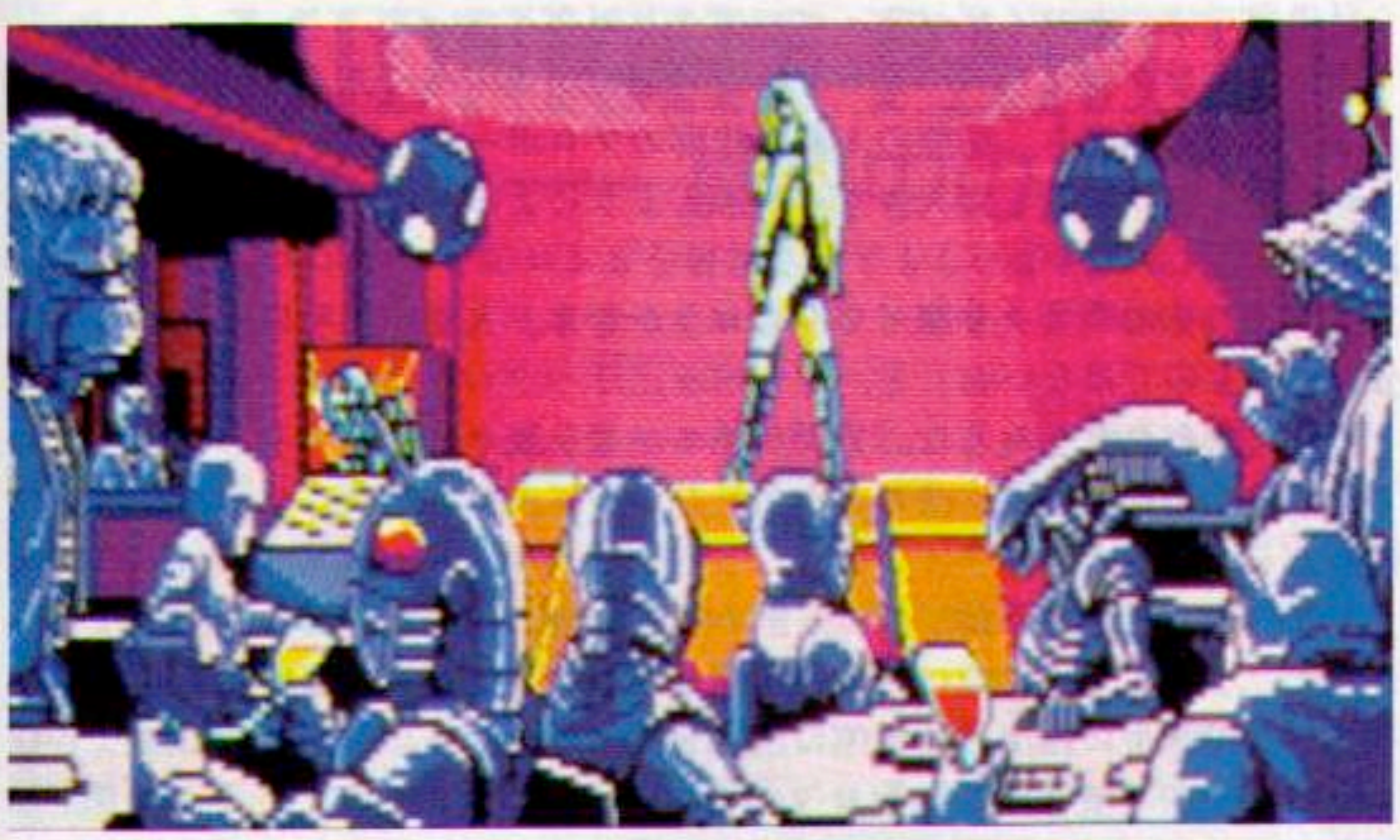
残念。マスターはギブスンについて，なにも知らないようだ。となると，店内で目撃者を探すしかない。

まずは店のムードに慣れないとな――。

いいかげんな理由にかこつけて，俺はイザベラのダンスが良く見える特等席へと走った。

なんの相談もなしに，おいてきぼりをくらったメタル。俺の後を急ぎ足で追いかけながら。

「まったく，ギリアンったら，もう。ミーハーなんだからぁ！」



席に着いた俺とメタルは，しばらくの間，イザベラのダンスに真剣に見入っていた。

妖しげな音楽に，美しい肢体が揺れる――。

大きく肌を露出したイザベラの衣装に，赤やピンクのスポット・ライトが照らされて，そこに実に艶かしい空間が作り上げられていた。

俺たちに限らず，見る者は皆その美しさに魅惑され，一言の声も発しようとしない。

やがて，鯨肉料理がテーブルに運ばれてきたところで，俺とメタルは現実の世界に引き戻された。

「どうだメタル，これでも俺をミーハーだなんて言うか？」

「はあっ。キ・レ・イ・で・す。ロボットの私でも，心引かれてしまいます」

「そうだろう，そうだろう」

メタルにイザベラの魅力を認めさせた俺は，なんとなく勝ち誇ったような気分で，目の前にある鯨肉を口にした。

――!! これが，すこぶる美味い。さすがに，法律違反でなおかつ高額でありながらも，高い人気を集めているだけのことはある。

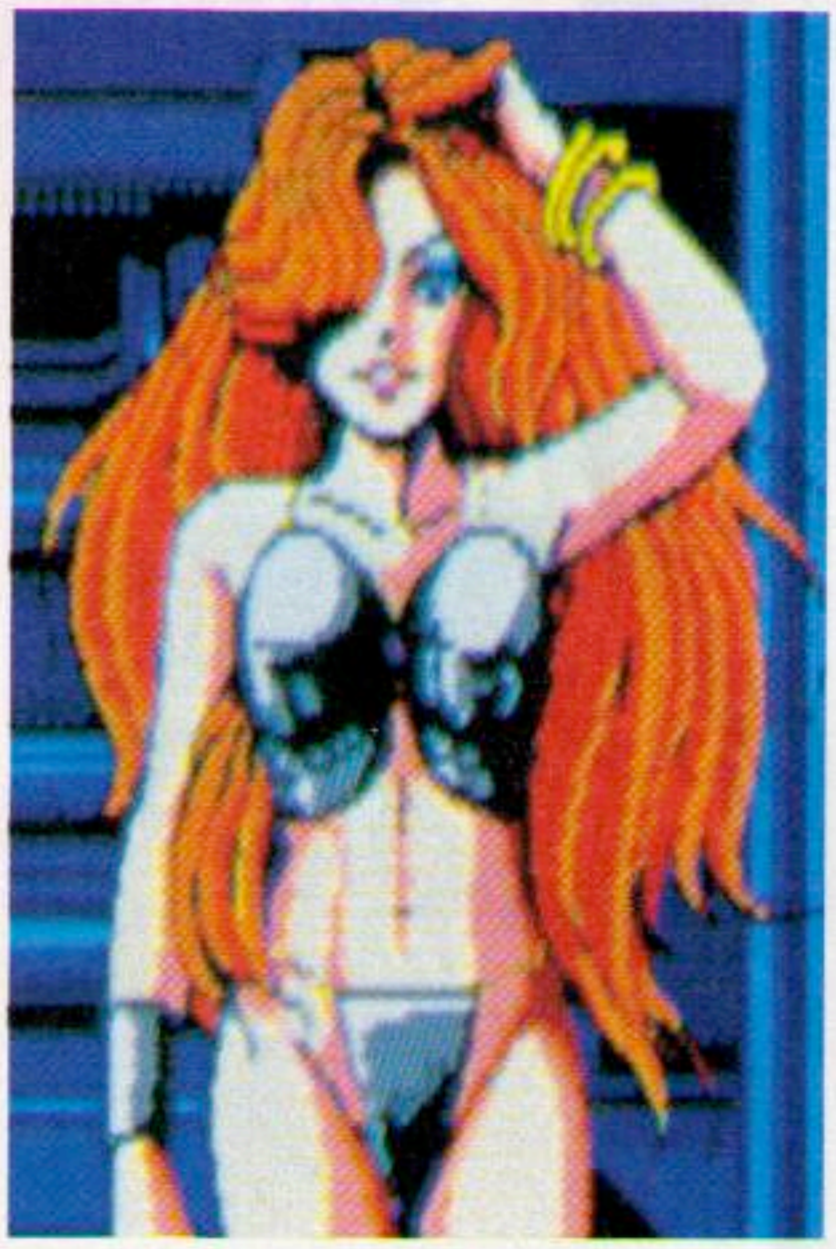
「メタル，こういう味がわからないってのは，ロボットは気の毒だなあ」

「いいえ，味覚として味わうことはできなくても，成分や構成物質を分析して，理解することができますから。なんなら，やって差し上げましょうか。えー，この鯨肉は，……」

イザベラ・ベルベット（24才）
Izavella Velvette

ホログラム・ビジョンの人気女優。アウターヘブンで，ダンサーとして働いていたところをリドリー・スコッティ監督に見初められてデビュー。40年度，コウベ国際映画祭最優秀主演女優賞受賞。翌41年，カンヌ映画祭特別審査員賞受賞。

「やめてくれ，せっかくの食い物がまずくなっちまう！」
「すみません，ギリアン。こんなことをやってる場合じゃありませんでした」
——そうだ。ギブスンについての情報を収集しなければ。
だが，店内にいる客たちは，イザベラのダンスに見とれていて，何を質問しても上の空である。
くそっ，それならば……。
「すいません，ちょっと聞きたいことがあるんですが……」
俺は，ステージが終わって控室に戻る途中のイザベラに声をかけた。
「ふふん。電話番号だったら，お断りよ」
髪をかき上げながら，艶かしい声でイザベラが答える。
「いえ，ちょっと行方をくらましてしまった友人のことについて……」
「まあ，それは穏やかじゃないわね。いいわ，あたしにできることなら協力するわ。ここじゃナンだから——控室にきてちょうだい」
周囲を見回すと，イザベラが言ったことの意味がよくわかった。店内の客たちが皆，俺のことをきつい視線で睨んでいるのである。
どうやら，つい今し方まで店内の憧れを一身に集めていた美女に気安く話しかけている俺は，この上もない悪漢の役になってしまったようだ。とは言え，〝おめんライダー〟や〝エイリヤン〟のマスクを被っている者に睨まれても，ちっとも怖かないのではあるが。



パタリ。
控室のドアが閉められた。
目の前には，あのイザベラ・ベルベットが立っている。
実に見事なブロンド・ヘアーと，透き通ったブルー・アイ。欠点の指摘のしようのない顔立ち。均整のとれた抜群のプロポーション……。
一つの部屋に彼女と二人きり——考えようによっては，夢のような状況と言えるかもしれない。
「まずは，そのマスクを取ってもらおうかしら。人面像相手に話すのは，気分のいいものではないわ」と，イザベラ。
俺は，言われたとおりに，アプライエンスを脱ぐ。
「まあ，なかなかのハンサムさんじゃない。で，行方不明になった友人ってのは，どういう人なの？」
そう言うとイザベラは，じっと熱い視線を俺に向けた。が，俺は照れてしまって，とてもその視線に自分の視線を重ねることができない。ましてや，イザベラの派手に露出された体に視線を置くことなど，よほど酒に酔ってでもいないかぎり不可能である。
というわけで，必然的に俺の視線は，床に落とされることになる。
「あらあら，下を向いたまま，ずっと押し黙っちゃって，どうしたの？　……ははーん，もしかしたら，あたしと二人っきりになりたいから嘘をついたのね」幾分，挑発的なトーンである。
「いやっ，決して嘘なんかじゃなくて……えーと，その，あなたがあまりに美しすぎるから，ついおとなしくなってしまったんです」
「まあ，お上手なのね」イザベラは親しみを込めた笑顔を見せた。
いつまでも照れてばかりもいられないので，俺は度胸を決め，ギブスンの写真を見せてみる。
「彼がそうなんですが……」
「あら，この人なら良く覚えてるわ。鯨料理を食べた後，気分が悪くなって血を吐いた人じゃないかしら」
——ギブスンだっ!!
「そうです！　そのときのことをもっと詳しく聞かせていただけませんか」
「え，ええ。あまりにも気分が悪そうだったから，少し控室のベッドで休んでいったら，と勧めたの。そうしたら，『いや，やらなくちゃいけないことがあるから』って，よろよろと別のお客さんの後について，店を出ていったわ」
「別のお客さんっていうのは？」
「うちの常連さんよ。——でも，その常連さん，ちょっと変わった人なのよねえ。いつも必ずコスプレタイムでないときに来て，店内にいる他のお客さんの顔をジロジロと見て帰るの。なんか気持ち悪いでしょ」

もありがとう」
くなっちゃったのね。あなたってなかなか魅力的よ」
ザベラ。
俺は少し大胆になる。
ったら，電話番号を教えてもらえないかな」
だったでしょ」
きたいことがあるかもしれないから……」
ため？」今までになく，イザベラは艶っぽい声で言う。
」
きりと言える人が好きよ」
いますと，あなたと今度お食事をしたいんです」
」
な微笑みを口元に浮かべた。「いいわ。あなたにだけ教
言わないわよ。39の，……」
違いなく連絡するよ」
俺は控室を出ていく。
こかで会いましょうねぇ」
ベラが，近くにいながら決して触れることのできない，
に見えた。



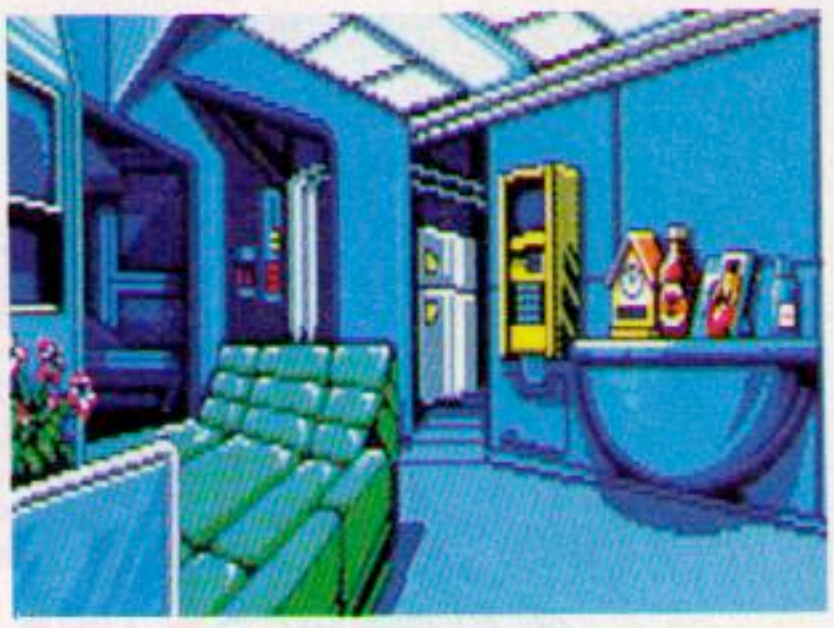
ONIGHT PARTY
——真夜中のパーティ

ンとのコンビを解消させてもらいます。ぜぇーったい！」
てトライサイクルに向かう途中，音声合成の語気も荒
歩いていく。
ちゃん。悪かった，反省してる」平謝りの俺。
く耳持ちません」言い放つと，メタルは自分の頭部に
ッと縮めた。
どいことをした。……イザベラと話をしているときに，
に追いだしておくなんて……。すまん，謝る。だが，
ったんだ。ほら，アウターヘブンはペット類の入店が
てただろう？　そこでロボットがうろうろしていたら，
っていることも話してくれないんじゃないかと……」
い訳はたくさんです！」
るメタル。俺はその前に立ちはだかり，手を合わせて

かないと，とてもスナッチャーどもと戦っていけない。
は，お前にイザベラと二人だけで会わせてやる」
のをぴたりと止め，俺の顔を見上げた。
ふん，どうせ捜査だとかなんとか言って，またあの店
ってもらうつもりなんでしょ」

り，ニヤリと笑いながら俺。「甘く見てもらっちゃ困る
もうイザベラと普通の仲じゃないんだよ」
リアン！」
……うん，今日はもう夜も遅い。よーし，それじゃ
屋へお連れしようか」
もついていきます！」
とメタルを乗せたトライサイクルは，俺のマンション
——。
ル君」
ンの部屋って，やもめ暮らしのくせに，きれいに片づ





むっ。一言多い奴だ。——まあいい，せっかくとったメタルのご機嫌をここで損なうこともないからな。

確かに俺も，自分の部屋のきれいさには少なからずの自信があった。秩序を乱すような物があると，整理せずにはいられない——どうやらある種の潔癖症的な性格が俺にはあるようだ。

もっとも，自分自身でその整理整頓を行なわなければならないところに，今の俺の悲哀があるのだが……。

「どれ，では俺のいとしのマドンナにラブコールを贈るとするか。——メタル君，キミのビデオフォンを貸してくれるかな」

「はい。どうぞご自由にお使いください」

ピッ，ポッ，プォッ……。

俺はアウターヘブンでイザベラから聞いた電話番号を押した。

トゥルルル，トゥルルル……。心地よい呼びだし音が響く。

「わあ，イザベラさんの顔がボクのモニターに映るのか。よし，メモリー・チップを作動させておかなくっちゃ」はしゃぐメタル。

ガチャン。——受話器を取る音がして，かわいらしい女性の声が聞こえた。

しかし，それは……。

「コンニチハ。ワタシ，リカデス。オデンワ，アリガトウ。ワタシノトモダチニ，ナッテクダサル？……」

——しばらくの間，俺とメタルは呆然として，一言も口がきけなかった。目と目を見合わせて，ぺたりと床にへたりこんだまま。

「やられた——」ようやく俺の口から言葉が洩れる。

「はあっ。女が魔物だとは，いみじくも言ったものですねえ」

「くそう，せっかくイザベラとお付き合いができるかと思ったのに……」

「……」

「ちくしょう」

「——ギリアン，部屋に入ったときから気になっていたんですが，あの写真スタンドの中の女性はどなたですか？」

落ち込む俺を見て，メタルがなんとか話題を変えようとする。さすがロボット，下心がない分，立ち直りは早い。

「ああ，あれは俺の別れた妻だ。ジェミーと言ってな，俺と同じで今，記憶喪失中なんだ」

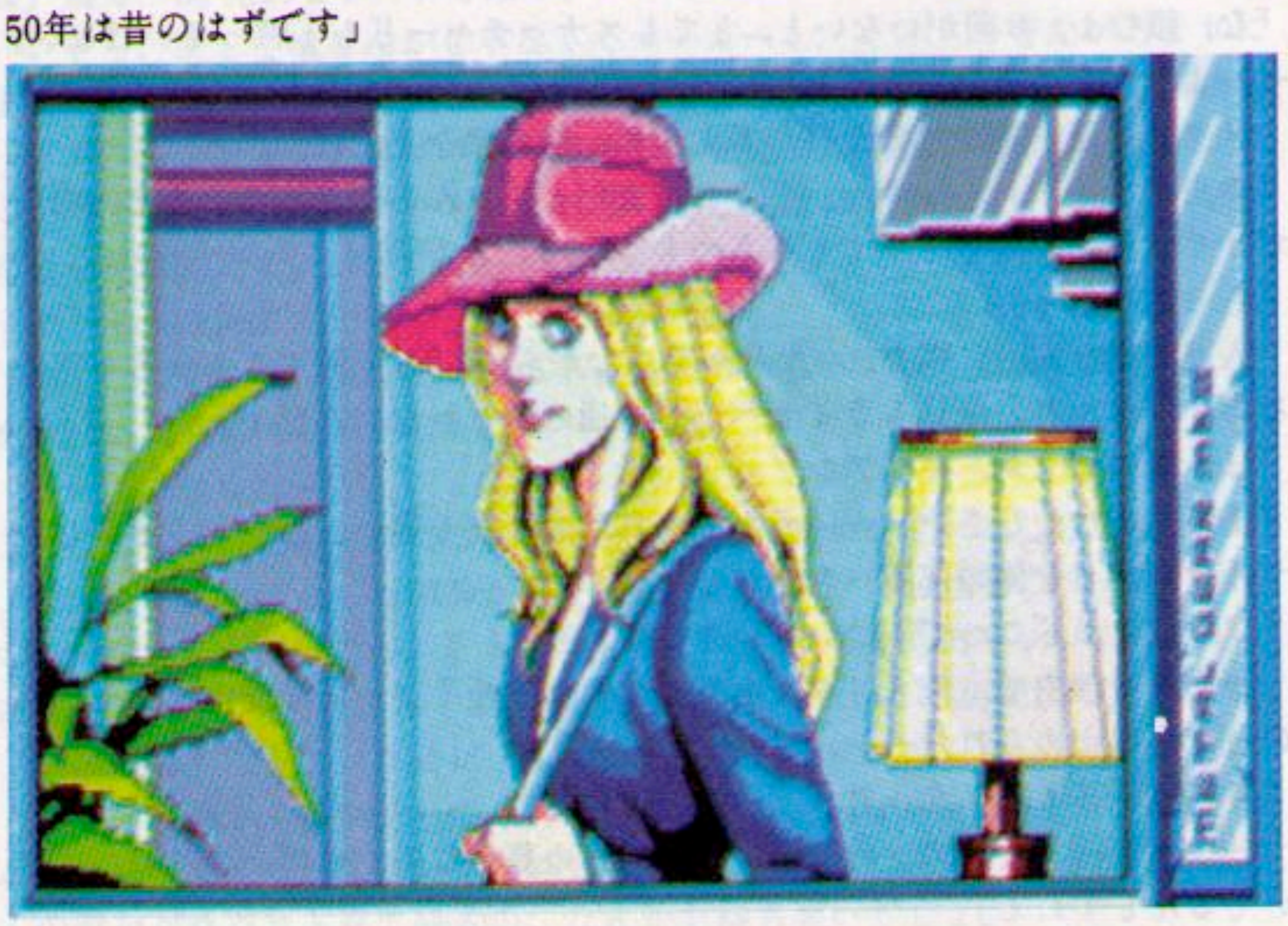


「へえ，きれいな女ですねえ。これは……オリンピックのときのポスターですか？」

「——!! そうだ……」

メタルの言葉によって，ふいに今まで失われていた記憶の一片が，俺の脳裏に甦ってきた。「確か……ジェミーは……モスクワ・オリンピックのキャンペーン・ガールに選ばれたんだ……」

「ちょっと待ってください，ギリアン！ モスクワ・オリンピックっていうのは，たしか20世紀の終わり頃に行なわれたんですよ。少なくとも，今から50年は昔のはずです」

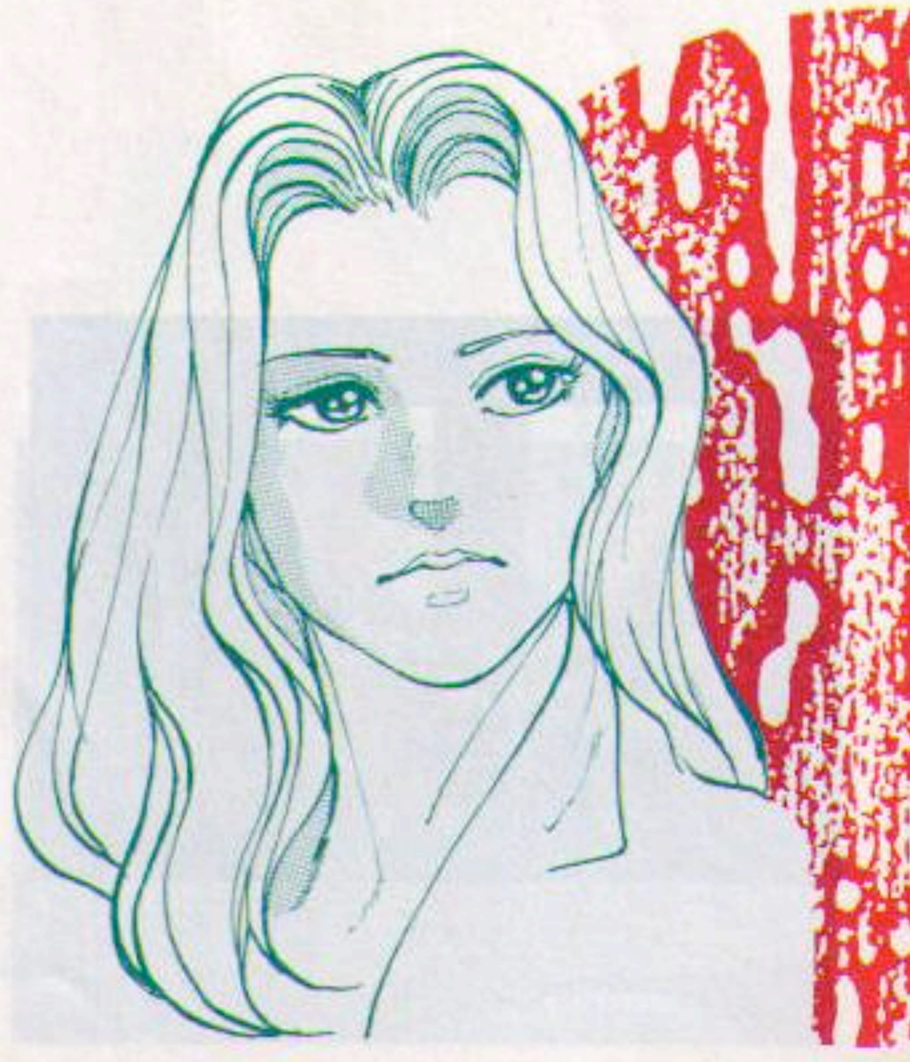


「なにっ？」
言われてみれば，確かにそうだ。
おかしい，なぜ俺とジェミーはこんなにも若さを保っていられるんだ？
「メタル，もう一度ビデオフォンを貸してくれ」
「いいですけど——どこにかけるんですか？」
「ジェミーのところだ。聞いてみる」
もはや暗唱できるほど親しみのある電話番号を押すと，モニターに外出用の服装をしたジェミーが映った。
相変わらず，下手なモデル顔負けの美しさである。
「あら，ギリアン。お久し振り。今日はなあに？」
「実は俺たちの過去について，重要なことを思いだしたんだ。ほら，キミはたしかモスクワ・オリンピックのキャンペーン・ガールをやったよね？」
そう尋ねた途端，ジェミーの顔が曇る。
「……。ごめんなさい。覚えてないわ。だめなのよ，ギリアン。昔のことを思いだそうとすると，頭が割れるように痛むの」
「そうか……。いや，それならいいんだ……」
「お役に立てなくてごめんなさい……。ねっギリアン，JUNKERの仕事はどう，順調？」
「あ，ああ。いろいろ苦労はしてるよ。まだ実際にスナッチャーと対決したことはないけどね」
「……ね，ギリアン……もしも私がスナッチャーだったら，あなた，私を殺せて？」
「なんだよ，急に」
「……どう？」
「……わからない」
「ギリアン……私，あなたのそういうところが好きよ。でも，それが命取りになるかもしれない……」
「どうしたんだ？　今日のジェミーはなんかおかしいよ。なあ，ジェミー……過去を取り戻すまで，やっぱり俺たちは一緒に暮らしたほうがいいんじゃないだろうか？」
しばしの沈黙の後，ジェミーは首をゆっくりと振りながら答えた。
「……ごめんなさい。私，なるべく過去があったということを忘れようとしているの。今を……今を，精一杯生きたい……」
「ジェミー……」
「……あっ，もう行かなくちゃ。待ち合わせしてるの」
「こんな時間にかい？」
「……ギリアン，お互いに詮索はしないって約束でしょ。それじゃ，また——」
ビデオフォンの映像は，そこで途切れた。
——はあっ。
ジェミーの様々な表情が，かわるがわる俺の心の中に，映っては消え，消えては映っていった。
ジェミーとイザベラ——あまりにも大きなダブル・ショックである。
深刻になってしまった俺を見かねて，メタルが戸棚からブランデーとグラスを持ってきた。
「さあ，ギリアン。一杯やりましょう。元気をだして……。明日は，例のスナッチャーといよいよご対面できそうですし……」
「……そうだな」
「女なんて信用しちゃいけませんよ。あなたの気持ちはボクが一番わかってます」
「……そうだな」
メタルに酌をしてもらううちに，先程まで俺たちの間にあったわだかまりは，全くと言っていいほどなくなっていた。
と同時に，俺とジェミーの年令に関する疑問も，いつしか心の片隅に追いやられていく。
「はいギリアン，もう一杯」
「おお。メタルよ，おまえもオイルでも飲むか？」

ジェミー・シード（推定29才）
Jaime Seed

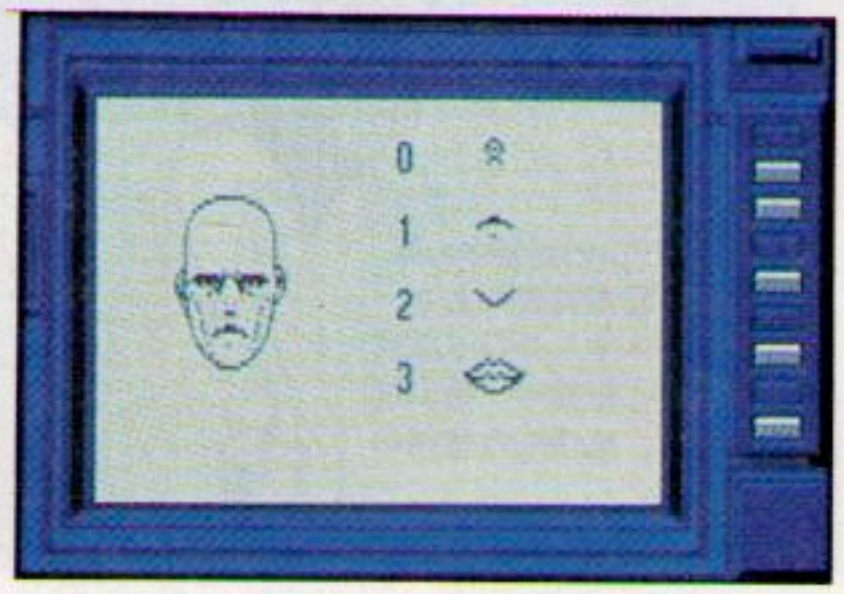


ギリアンの別居中の妻。やはり記憶喪失である。現在，ネオ・コウベ薬科研究所に勤務中。感受性が強く，感情的な性格の持ち主。



「おいしいのありますか」
「ちょっと待て。今，探してやる」
ひとりの男と一体のロボットによるこの奇妙な飲み会は，空が白んでくるまで，延々と続けられた――。

§7 MISTAKE
―過ち



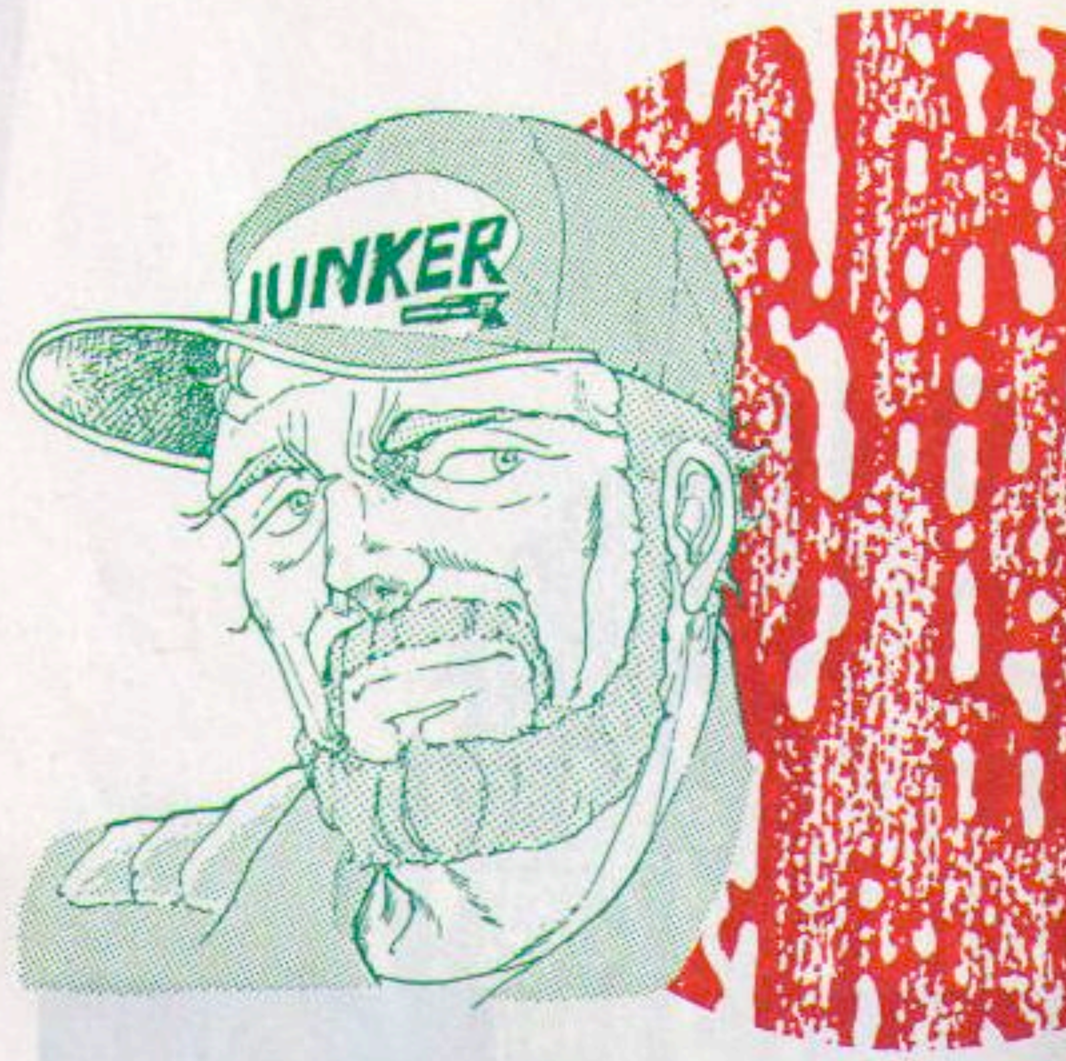
明けて翌日。
早朝から俺とメタルは，JUNKER本部のコンピュータ・ルームに詰めていた。
二日酔いで頭が割れるように痛む。そこはそれ，自業自得というやつである。
――もうかれこれ4，5時間は経っただろうか。
昨夜イザベラから聞いたデータを元に，ギブスンが追っていたスナッチャーのモンタージュを作ろうと懸命にガウディのデータを検索しているのだが，いっこうに決定打は得られそうにない。
「だいたい，どうしてイザベラさん本人にモンタージュを作ってもらわないんですか。伝え聞いた情報だけでギリアンが作ろうなんて，無理がありすぎますよ」さすがに辛抱耐えかねたのか，いらいらしながらメタルが言う。
「……言うなって。俺もそう思って，さっきアウターヘブンに電話したんだが，当のイザベラ嬢は夕べ遅く，次の仕事先に発っちまったんだとさ。大スターだから，ま，仕方のないところだな」
答えながらも，俺の視線は，ガウディのモニターに表示されている顔のパーツひとつひとつを念入りにチェックしていた。
いわゆる一般の〝モンタージュ写真〟と違って，ガウディを使いモンタージュを作るのは，非常に骨の折れる作業である。
目や鼻，口などのパーツを組み合わせて，人の顔を作る――ここまでは従来のモンタージュと同じなのだが，ガウディは，それを日本全国のあらゆるデータを公的に管理するアルファビルと照合し，該当者がいるかどうかを検索してくれる。便利ではあるが，逆に言えば，該当者のいないモンタージュは，すべて不完全品としてハネられてしまうのである。
しかも今回は，ネオ・コウベ・シティに在住していて，30前後の男性という制約つきであったから，該当者が発見されるような精度の高いモンタージュを作るのに，それなりの時間を要してしまうのは，仕方のないところであった。
「ったく，だからですねえ，イザベラさんと話すときにボクを一緒にいさせれば，こんな面倒は起こらなかったんですよ。その場でボクのモニターを見せながら，モンタージュを作ってもらえば良かったんですから……」
「わかった。わかったから頼む，大きな声をだすのはやめてくれ。頭に響いて死にそうだ」
「あんなにむちゃな飲みかたをするからですよ，もう」
「馬鹿野郎，お前がすすめたんじゃないか……いてて」
そんなとりとめもない会話を続けながらも，ようやく俺たちがこれというモンタージュを完成させたのは，いい加減俺の二日酔いも治り，太陽もビル街の谷間に沈んでいこうかという頃であった。
「おっ，アルファビルからデータが返ってきたぞ。……なになに，該当者2名か。イワン・ロドリゲス，27才，職業エアーサーファー，該当率70%……，それにフレディ・ニールセン，29才，職業タクシー運転手，該当率65%……」



「やったじゃないですか，ギリアン」
「ふうむ。しかし，俺たちが勝手に作ってしまったモンタージュを，どこまで信じていいものなんだろうか……」
そんなことを考えていた矢先，メタルのビデオフォンが鳴りだした。
受話器をとると，モニターに映ったのは実にタイミングのいいことに，下着姿の小悪魔――イザベラである。
「はあい，ダーリン。お店に自分のテレフォン・ナンバーをことづけるなんて，粋なことしてくれるじゃない。急用ってなあに？――そうまでして，あ

たしと食事がしたいの？」
「グッドタイミング！……しかし，なんだってまた，そんな恰好で……」
「うふん。今，ニュートーキョー・シティで，新作下着の発表会をやってるの。ダーリンが連絡を欲しいっていうから，空き時間に電話してるのよ」くねくねと身を揺り動かしながら，相変わらずの艶かしい声で言う。
「……そうだ。あのなぁ……」
俺は例のリカちゃん電話について文句をぶつけようとしたが，寸前で思いとどまった。今はそんなことをしている場合ではない。
「これだ，このモンタージュを見てくれ」
メタルの送信カメラの前に，できたばかりのモンタージュ写真を置く。すると，イザベラの表情に，みるみる驚きの色が広がっていった。
「ああ……そうよ，この人だわ。アウターヘブンの常連のお客さん……。でも，どうしてこんなにそっくりなモンタージュが作れたの？　あたしは，あんな適当なことしか言わなかったのに……」
「フッ，以心伝心って奴かな。どうやらキミと俺との間には，運命的な結びつきがあるようだ」我ながらキザな台詞である。
「まっ，ダーリンったら。相変わらず口がうまいんだから。……で，用件はそれだけ？」
「ああ，それともう一つ，君の本当の電話番号についてなんだが……」
そう言いかけたとき，受話機の向こう側から，こうるさいブザーの音が聞こえた。
「ごめんなさい。次のステージが始まるみたい。そのうち気が向いたら，あたしのほうから電話するわ。じゃあまたね。ばいばーい」
ガチャリ。ビデオフォンが切れた。
まったく，肝心のところで，スルリと逃げていっちまう——。だがまあ，モンタージュがスナッチャー本人そっくりというのが確認できただけでも良しとするか……。
問題は，二人いる該当者のうち，どちらから捜査するかってことだな。もたもたしていると，こちらの動向をつかまれてしまう恐れもあるし……。
コン，コン。
ノックの音がした。直後，コンピュータ・ルームの耐磁性のドアが，すっと開く。入ってきたのは，局長であった。
「ギリアン，捜査のほうはどうかね」
「はっはい，現在ようやく，ギブスンを惨殺したスナッチャーの正体とおぼしき人物が二人，線上に上ってきたところです」
「うむ。だいたいのいきさつは，メタルから送られてくる映像で見ていた。で，問題の容疑者なんだが……そのイワンという男がどうも怪しい。奴は前々から，我がJUNKER本部がマークしていた男なのだ」
「……そうなんですか。わかりました。さっそくイワン・ロドリゲスを調べに行ってきます」
「頼んだぞ」普段から厳しい局長の表情が，一層険しくなったような気がした。
「メタル，行くぞ。場所は……SN地区だ」
が，メタルからは返事がない。振り返ってみると……。
「うふん……うふん……うふん……」
メタルのモニターには，先刻のイザベラの電話——その中でも艶っぽく微笑むシーンが，何度も何度も繰り返し映しだされていた。
「ああ，イザベラさん，なんて美しいんでしょう。このメモリーは，ボクの宝物だ！」と，陶酔しながらメタル。
——あちゃあ，なんたるこった！　俺の性格に合わせてメタルが作られたとはいうが，いくらなんでも，俺はここまでひどかないぞ。

SN地区は，ネオ・コウベ・シティ唯一のスラム街であった。半壊状態の汚らしい建物が立ち並び，その壁には，とてもセンスが良いとは言い難い，極彩色のスプレーによる落書きが施されている。
区画整理が全くと言っていいほど進んでいないので，ネオ・コウベ・シティのデータを司るアルファビルでも，この地区に関しては，極めて曖昧なデ





ータしかファイルされていない。

従って，管理社会の束縛から脱して自由な生活を送ろうとする連中が，こぞってここに集結していた。彼らのような浮浪者は，〝ホームレス〟と呼ばれ，社会問題の一つにまでなっているのである。

俺はその〝ホームレス〟たちに，モンタージュを見せてみた。

と，彼らは口々にしゃべり始める。

「おい，こりゃあイワンのバカじゃねえか」

「そうだ，あのアホウじゃ」

「あの野郎，近ごろ金回りが良くなったらしくてよ。一人で美味いものを食ってやがる」

「今まで受けた恩も忘れて，おいらたちを無下に扱いやがって」

「まったくじゃ」

「兄さんよ，イワンなら，そこのアパートの301号室に住んでるぜ。会いたかったら，行ってみるんだな」

「そうじゃそうじゃ，イワンと言えばな，この間，金髪の女を部屋に連れ込んでおった」

「ほう，どんな女だ」

「それがのう……」

彼らの噂話は当分終わりそうもなかったので，俺は正気に戻ったメタルを連れ，301号室に向かった。



ドンドン，ドンドン……。

力強くドアをたたいても，なんの返事もない。301号室の中は，しーんと静まりかえっていた。

もちろん，ドアにはしっかりと鍵が掛けられている。

――留守なんだろうか。

あきらめようとしていたとき，メタルが重大な発見をした。

「ギリアン，見てください！」

ドアの左下に位置しているボックスの中には，ひどく旧式の電力メーター計があった。電力を使用しているときには回転板が回り，それに伴って数値メーターも視覚的に変化していくという，20世紀後半に普及していた型である。

その回転板のスピードが，単に冷蔵庫などだけではなく，室内でかなりの電力が消費されていることを示していた。

俺は無言のままメタルに向かって首を縦に振ると，再びドアに手をかける。

ドンドン，ドンドン……。

「開けろ！　中にいることはわかっているんだ！　開けないと強行突破するぞ！」

脅しが効いたのか，ようやくドアの向こう側から反応があった。

「うるせえなあ，誰だよ？」ドアの向こうの人物は，覗き窓からこちらを見ている。

「JUNKERだ。ちょっと聞きたいことがある」

「――JUNKER？　俺はスナッチャーなんかにゃ関係ないぜ」

「いいから開けろ。ごたくはそれからだ」

「へいへい，わかりましたよ」

ガチャッ。ドア・ロックが外れる音がした。

一時の間をおいてから，勢いよくドアが開かれる。

バアァーン！

「ちっ――」思わず舌を打つ俺。

開かれたドアの後には，拳銃をかまえた男――イワン・ロドリゲスが立っていたのである。

「ひぇっひぇっ，死ねえぃ！」



――イワンにしてみれば，その一言が余計であった。

素人が銃の狙いを定め，勝ち誇った台詞を吐く――そのタイムラグは，プロの俺にとって，照準を合わせて引き金を引くのに十分すぎる時間だったのである。

バシュッ！



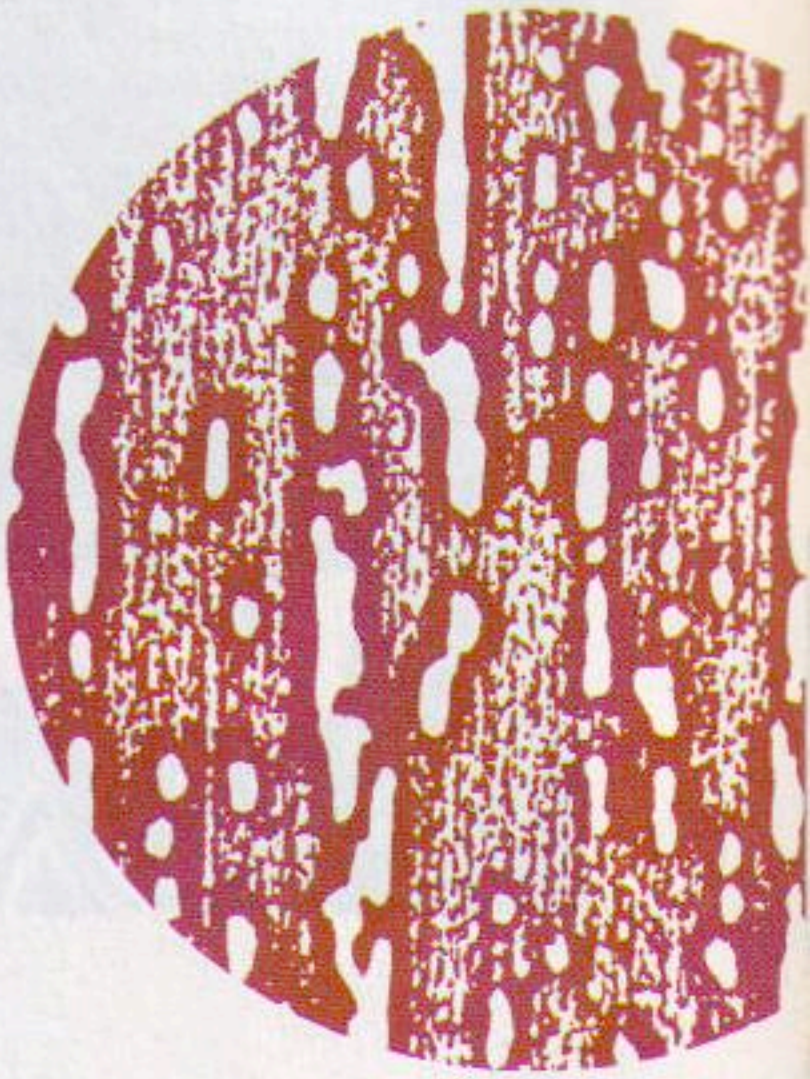
俺のブラスターが火を吹く。
　イワンの持った拳銃が大きく跳ね飛ばされた。
　その反動で，イワンの体も部屋の中へと吹っ飛んでいく。
「いてえ，……いてえよぉ。手が，手があ……」
　いくら直撃しなかったとは言え，スナッチャーをも一撃で破壊するブラスターが，力を入れて握っている銃身を捕らえたのである。手が普通でいられるほうがおかしい。
　ここぞとばかりに，俺はイワンを締め上げる。
「きさま，スナッチャーだな」
「ち，違う……。あんた，なにか勘違いをしてるんだ」
「なら，なぜ俺を撃とうとした？」
「……」
　イワンは目を閉じ，口もつぐんだ。
「メタル，こんな奴の言い分を聞くのもうざったい。さっさとセンサーで，こいつの体をスキャンしちまってくれ」
「……それはできません，ギリアン」
「なにっ？」
「民事法第18条12項，スナッチャー問題に関する人権保護規定により，裁判所から『スキャニング令状』が発行されていないと，その人物の科学的直接検査はできないことになっています」
　――ったく，どこのどいつが，そんなややこしい法律を作りやがったんだ？
「わかった。じゃあ，裁判所から早くそいつをもらってくれ」
「ええ，今申請している最中です」
　仕方ない――。
　これ以上イワン本人を調べることができなくなったので，俺は部屋の中を物色してみることにした。もちろん，ブラスターの照準は，イワンに合わせたまま。
　もしも奴がスナッチャーであるならば，なんらかの手掛かりが発見されるはずだからである。
　まず初めに目についたのが，戸棚に飾られた，純金のトロフィーであった。台の部分には「第12回ネオ・コウベ・エアロ・サーフィン大会優勝」という文字が刻まれている。
　エアロ・サーフィンか……。
　――ん，待てよ……？　今までどうして，こんな単純なことに気づかなかったんだ！
　汚染されてしまった海に代わって，空対力学を応用して空中でできるようにしたサーフィン――それがエアロ・サーフィンである。えてしてその大会は，炎天下の日中に開催されることが多い。
　未だ目をつぶり，黙秘を続けているイワンに視線をやる。



案の定，その肌は小麦色を通り越して，限りなく原色の黒に近いと思われるほど日焼けをしていた。
——スナッチャーにとって，日焼けは命取りになるはずだ。間違ってもエアロ・サーフィンなんてスポーツをやるわけがない。とすると，イワンはスナッチャーではないのか？
その考えにさらに確信を深めたのは，風呂場でサン・オイルのビンを見つけたときであった。
サン・オイルは，日焼けをむらなく行なうための薬品であって，スナッチャーが携帯（けいたい）しているという日焼け止め，サン・スクリーンとは，根本的に効能が異なる。
——わからん。ならば，どうしてイワンは，俺に銃を向けてきたんだ？
その疑問の解答は，それほどの時間をかけることもなく，風呂場を調べているうちに得られた。
壁に立てかけられたサーフボードの裏から，白い粉が大量に入ったビニール袋が見つかったのである。
「メタル，これは……？」
「分析してみます。……この粉は，LSDです。しかも，リキッド・スカイという最も強力なタイプに間違いありません」
常用（じょうよう）すると，確実に廃人（はいじん）になるというリキッド・スカイか——。なるほど，今までのイワンの不審（ふしん）な態度の理由がわかったぞ。
見ると，平静を装（よそお）っていたイワンの顔には，うっすらと油汗が浮かび上がっていた。
ビイィー，ビイィー。
例によって，メタルからけたたましいアラーム音が鳴り響いた。
「おいおい，今度はなんだ？」
「はい。今，裁判所からスキャニング令状が下りました」
「よし，早くイワンの奴をスキャンしてみてくれ……たぶん違うとは思うがな」
「わかりました。スキャン開始します」
メタルの右目の位置のカメラがスーッと前方に伸びると，照準を合わせるかのごとく，レンズが小刻みにクイックイッと左右に回転を始めた。やがてピタリとそれが停止すると，頭部の赤いランプがチカチカと点滅を開始する。
モニターには，イワンの体内を温度別，細胞別に色分けした透視図がカラフルに表示されていた。
しばらくデータの計算を繰り返した後，メタルが言う。「スキャニング終了。ギリアン，イワンは完全な人類——ホモ・サピエンスです」
やはりな——。
予想どおり，イワン・ロドリゲスはスナッチャーではなかった。とすると……。
「けえっ，だから言ったじゃねえか。俺はスナッチャーなんかにゃ関係ねえんだよ」
今まで沈黙を守っていたイワンが，突如大声で吐き捨てるように言った。
その態度にカチンときた俺は，左手で襟首（えりくび）をつかみ，右手に持ったブラスターをイワンの口の中に突っ込む。





「ずいぶんとでかい態度をとってくれるじゃないか。LSDを食らってるのは，そんなにご立派なことなのかい」
　イワンは必死に首を左右に振り，口からブラスターをだすと，まだ強気で反論した。
「俺は単なるバイヤーだ。エアロの大会のために軍資金を稼いでいただけよ。それにあんた，JUNKERだろ。LSDは管轄外じゃねえのか……なあ，見逃してくれよ」
「口だけは達者なやつだ」
　俺はニコリと笑みを浮かべると，出血を始めているイワンの右手をギュッと力強く握った。
「うぎゃあ！　いてえっ！　なんてことするんだよぉ！」
「メタル，本庁に連絡しておいてくれ。薄汚いドブネズミが1匹，スラムでLSDをたんまりと隠してるとな」
「了解，ギリアン」
　俺とメタルは，もはや用のなくなった301号室から，立ち去ろうとする。
　その背後でイワン。泣きだしそうな声で。
「頼むっ！　医者を呼んでくれっ。血が，血がぁ……」
「傷口にLSDでもつめときな！」
　バタン。力強くドアが閉められた。
　――空振りか。
　JUNKER本部がかねてから目をつけていたというのも，当てにならないもんだ。
　が，これで容疑者は一人に絞られた。
　フレディ・ニールセン，タクシー運転手か……。
　この寄り道が，影響を及ぼさなければいいんだが――。

§8 FIRST ATTACK
――初めての戦闘

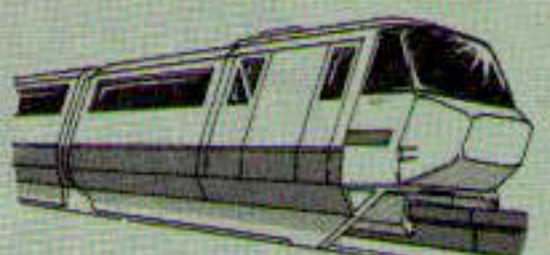
　いつのまにか，俺の心の中には，スナッチャーと戦ってみたいという思いが激しく渦巻くようになっていた。
　よくよく考えてみると，それは，今は亡きエリートJUNKER，ジャン・ジャック・ギブスンへのライバル意識から生まれたものなのかもしれない。
　数え切れないほどのスナッチャーを破壊し，ネオ・コウベ・シティの平和を一人で守ってきた男，ギブスン――彼の桁外れの捜査力・戦闘力は，出会う人たちが口々に絶賛するものであった。
　そのギブスンも殺ったスナッチャー。そいつを見つけ，仕とめることができれば，俺の実力がギブスンよりも高みにあることの――とまではいかなくとも，対等ぐらいのレベルにはあることの証明になるかもしれない……。
　――それは，間違いなくエゴであった。
　今や実力を比べることが不可能になった相手に対して，スナッチャーを媒介に腕比べを挑んだからと言って，どうなるわけでもない。たとえスナッチャーを破壊できたとしても，それは単なる自己満足の対象にしか過ぎないことはわかっている。
　しかし，自分の実力を試してみたい。やる以上は，誰よりも強くありたい――。
　それは，戦いの場に身を置く者ならば，誰しもが持つであろうエゴであった。
「ギリアン，着きましたよ」
　メタルの言葉で自分の思考回路から抜けだしたとき，トライサイクルは，広いメイン・ストリートの交差点の一角に停止していた。
　周囲を見渡すと，そこが極めて人通りが激しく，交通量も多い通りであることがわかる。一時停止した俺たちのトライサイクルの脇を，さも迷惑そうに次から次へとトライサイクルがすり抜けていく。
　――こんなに人の往来が激しい場所で，スナッチャーは堂々と生活してるのか？　それほどまでに奴は，普通の人間のごとく自分自身をカムフラージュすることができるものなのか？



チューブ・ライナー



超伝導を利用したリニア・カー。シティを戦後40年間ささえてきたが、「南」のスラム化，「自動交通システム」の登場により，廃止となる。



そう考えると，あらためてスナッチャーに対する警戒心を覚えずにはいられなかった。
「メタル，どれがフレディ・ニールセンの家だ？」
「住所から判断すると，正面のアパートの202号室のはずですが」
交差点の角に建っているアパートに目をやると，2階の部屋には，煌々と明かりがついている。
「よし，行くぞ」
俺とメタルはトライサイクルを降り，アパートの入口へと歩を進めた。
12月のネオ・コウベの夜は，コートを着ていても時折耐え難さを感じさせるほど寒い。道行く人々は皆，重苦しそうな衣類に身を包み，冷たい風に肌をさらすのを避けるように襟をすぼめながら歩いている。
が，アパートに入ろうとしたときに，その常識に準じていない数人の〝ホームレス〟風の男たちがいることに気づいた。彼らは，服をだらりとはだけさせ，ある種の恍惚の表情を浮かべて，アパートの壁にもたれかかっている。
——あいつら，何をしてるんだ？ LSDでトリップでもしてるのか……？
不思議に思った俺は，その場に足を運んでみた。
と，すぐさまその恍惚の表情の理由がわかる。格子状の鉄網で蓋をされたマンホールから，暖かい蒸気が白く吹き上がっているのである。
「メタル，これは一体……？」
「どうやら地下で暖まった下水が，蒸気となって吹きだしているようですね」
「とすると，この下は地下道なのか」
「ちょっと待ってください。ネオ・コウベの地上と地下マップを照合してみます。……わかりました。以前この下には，地下鉄〝チューブライナー〟が走っていたようです。それが廃線になって，地下道だけ残っているんでしょう」
「なるほどな……。おっと，こんなことに感心してる場合じゃない。アパートに入るぞ」



俺とメタルは足音を忍ばせて，202号室のドアの前に立った。飾りつけのない，極めて普通の鉄製のドアである。
俺は小声で「メタル，動体反応をチェックしてくれ」
メタルはしばらくセンサー類を使ってから，やはり音声のボリュームを下げて返事をした。
「ギリアン，ドアの向こう側に動体反応が確認されました。反応は一つだけ……スナッチャーの可能性もあります」
無言で頷くと，俺は右手をコートの裏のブラスターにやりながら，左手でドアを力強くたたいた。
「JUNKERだ。聞きたいことがある。ここを開けろ！」
が，意外にもスムーズな反応が返ってくる。
「はい。JUNKER……ですか。ちょっと待ってください。今，ドアを開けますから」
予想とは裏腹に，出てきたのは，一人のスマートな女性であった。
「ごめんなさい。ちょっと歯が痛むもので……」
彼女は，手を右のほほに当て，憂鬱そうな表情をしている。珍しい緑色の髪に，黒のエナメル・コーティングのボディコン・スーツという見た目の派手さと，その表情が，妙に対照的であった。
俺はJUNKER証を見せ，質問を始める。
「フレディ・ニールセンはいますか？」
「今日は朝から仕事にでておりますが……」
「失礼ですが，あなたとフレディとの関係は？」
「私はフレディの家内のリサです。主人がなにか——？」おどおどした，か細い声である。
「実はあなたのご主人に，スナッチャーの容疑がかけられているのですが」
「フレディが……ですか？　そんな……」彼女の顔からサッと血の気が引くのが見てとれた。
「ご主人は，有人タクシーの運転手でしたよね。最近，なにか変わった行動に気づいたりしませんでしたか？」



「いえ，そんな……。でもそう言えば，仕事もせずに夜，出歩くことが増えてきたような……。だけど，あの人がスナッチャーであるはずがありません。……ずっと一緒に生活しているんですもの。私が一番良くわかっています」
心なしか声が震えている。
「……それです。身近にいる者でさえ正体がわからないのが，スナッチャーの恐ろしいところなんです。リサさん，あなたがそこまで言うんなら，この前の木曜日午後6時頃のご主人のアリバイを証明できますか？」
「木曜日ですか……。確か主人は，非番でテレビを見ていたと思います。ほら，第一次火星移民の〝ビーグル・エルサレム号〟の打ち上げの生中継をやってましたよね。あれを私と一緒に……。あっ，でも私は途中で友人の家に行ってしまったのですが……」
「うーん。それではアリバイの証明にはなりませんねえ。そうだ。有人タクシーの乗務記録が残っているでしょう。それを見せていただけませんか？」
そう尋ねると，リサは唇をキュッと噛み，視線を床に落とした。
「どうしたんですか，奥さん。乗務記録を見せてほしいと言っただけですが……」と，たたみかける俺。
一時の間があってから，ようやくリサの唇が開く。
「記録は……ありません」
「記録がない？ ……ひょっとして，ご主人は闇タクシーをやっているんですか」
リサはこくりと首を縦に振った。
闇タクシー，それは市の許可を得ずにタクシー業務を行なう者たちを称した隠語である。取り決め料金よりも安く利用できるので市民には人気があったが，秩序を乱すとしてネオ・コウベ・シティでは，一掃計画を実施中であった。
「仕方がなかったのよ。生活していくためには……。でも来年の4月には認可が下りるはずだったの。フレディは一生懸命働いていた……。あの人が……，あの人がスナッチャーだなんてことは絶対にありません……」
リサは次第に涙声になり，最後には手のひらで顔を覆った。
自分の愛する人間がスナッチャーにすり替わっていたとしたら，それは耐え難いことであろう。リサがフレディを信じたい気持ちは良くわかる。
だが，ここまでの俺の捜査で，フレディはかなり高い確率でクロとでている。それを軽視することはできない。
「わかりました，奥さん。では，とりあえず，部屋の中を調べさせていただきます。あなたにとっても，ご主人がスナッチャーかどうか，一刻も早くわかったほうがいいでしょうから」
「はい……お願いします」目元の涙を指先で拭いながら，リサは切れぎれの声で言う。その仕草に，いたく女性らしさが感じられた。
許可を得た俺は，さっそく居間の調査を開始した。
そこで俺の目を釘付けにしたのが，壁に張られた一枚の地図であった。
どこの場所だかはさっぱりわからないのだが，なぜかある種の郷愁を感じずにはいられない。
「メタル，これはどこの地図だ？」
「任せてください。そういうデータ・チェックは，ボクの最も得意とするところです」
頭部の赤いランプをしばし点滅させてから，メタルが結果を報告する。「これはモスクワの地図ですね。それも〝大惨事〟が起こる前の物のようです」
──モスクワの地図か。なぜこんなものに懐かしさを感じてしまうんだろう？
自問自答する俺の頭の中では，〝おやじさん〟ことハリーの声がこだましていた。「はて，以前にどこかで会ったような気がするのだが，気のせいかのう」──。
「JUNKERさん，こちらがフレディの浴室です。どうぞお調べになってください」
俺たちがあまりにも長い間，地図の前に立ちつくしていたためか，リサが少々しびれを切らした様子で，浴室へと案内してくれた。
──うん，スナッチャーがいるかどうかを知るには，風呂場というのが一















つの手掛かりになる。浴槽や床などに付着している物質の中に，新陳代謝の行なわれた皮膚の老廃物があるかどうかを調べればいいわけだ。

「ギリアン，分析にはちょっと時間がかかりますので待っててください。……それにしても，この浴槽は変ですねえ。水が張ってあるのに，どこにも栓がない……」

メタルが浴槽に近づき，付着物の分析を始めた。

が，その結果を待つまでもなく，答えは明らかになる。洗面台の脇の棚に載っていた白いビンが，すべてを物語ってくれたのである。

「こ，これは……!!」

ギブスン家で見たのと寸分たがわぬ，JOY-DIVISIONのシールが付いたサン・スクリーンであった。加えて，蓋の回りに真新しい液が付着しており，つい最近も使用した痕跡がうかがえる。

――間違いない。フレディ・ニールセン，奴がスナッチャーだ！

そう確信したとき，背後から予想もしなかった台詞を浴びせかけられた。

「ようやく見つけてくれたわね，JUNKER」

振り返るとそこには，ギラギラと目を輝かせたリサが立っていた。その目の光りかたは，さしずめ獲物を狩る前の野獣とでもいうところだろうか。

先程までの弱々しさは微塵も見せず，荒々しいアクセントで言う。「見てご覧なさい，これを」

リサは会ったときからずっと頬に当てていた手をすっと降ろした。すると，そこには，醜い巨大な傷がパックリと口を開けており，その傷口からは不気味に光るメカニック類が覗いている。

「あなたのお仲間が，この傷をつけてくれたのよ。まったく，どうしてくれるのよ。……あなたたち人間と違って，あたしたちはお肌のお手入れが大変なんだから」

突然の出来事に，体が硬直してしまって動けない俺を見据えて，リサは不敵な笑みを浮かべる。

「……でも，まあいいわ。あなたを殺せば，少しは気も晴れるでしょうから。ふふっ，準備をして待っていた甲斐があったってものね」

――準備をして待っていただと？ どういうことだ!!

「あたしのような美人に殺されるんだから，あなた幸せよ」

そう言うと，リサは大きく口を開いた。

「ギリアン，危ない！ レーザーカノンです！」

メタルのその一言で，俺は呪縛から解放された。床を思いっきり蹴って，浴槽の影へと飛び込む。

リサの放ったレーザーカノンは，俺の服をかすめ，バスルームとシャワー室とを区切る柱に直撃した。一瞬にして，その柱が崩れ落ちる。

「ほほほっ。無駄なあがきは見苦しくてよ，JUNKERさん。そんなところに隠れても，浴槽ごと撃ち抜けるんですからね」

「くっ。まさかあんたもスナッチャーだったとはな。まんまと騙されちまったぜ。さっきの演技には，アカデミー賞でもプレゼントしてあげたいね」苦し紛れに俺が言う。

「光栄ですこと。天国にそんな賞があればの話ですけどね」

言い終えてから，リサは再び口を大きく開けた。

――まずい。このままでは……。

そのとき，リサの死角にいたメタルが，洗面台の下から大声で叫んだ。

「やい，スナッチャー，ボクのメタルギア・ビームをくらえ！」

「なにっ？」不意を突かれてリサ――スナッチャーは動揺を見せた。

〝いまだっ！〟

俺は浴槽の影から体をだし，ブラスターの引き金を引く。「きぃぃぃーっ」それは，恐ろしいほどの反応速度だった。俺が姿を現すのと同時に，リサは標的をメタルから俺へと戻し，レーザーカノンを発射したのである。

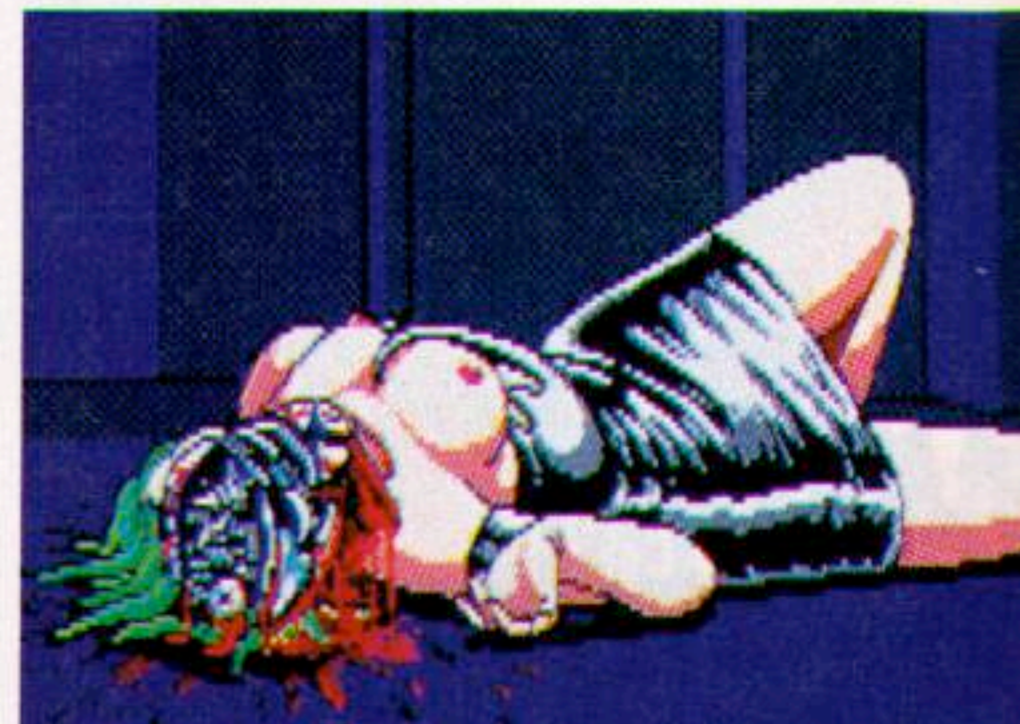
2本の光線が，狭い浴室内で交差した――。

俺の頬から，生暖かいものが流れた。

血である。

どうやら俺のブラスターのほうが一瞬早く当たっていたようだ。リサのレ

ーザーカノンは，極めて弱い出力で俺の頬をかすめたに過ぎなかった。
足元には，頭部がグチャグチャに破壊されたリサ・ニールセン——即ちスナッチャーの残骸が横たわっている。
「やりましたね，ギリアン」
「ああ。恐ろしい相手だった。まともに撃ち合っていたら，反応速度で負けていたかもしれない」
「感謝してくださいよ，ボクに」
「おお，そうだ。メタル，お前はレーザーなんて装備してたのか？」
「へへ……はったりですよ，はったり。ナビゲーターは武装することが禁じられてますからね」
メタルは首を左右に回し，おどけてみせる。
「ところでギリアン。どうですか，初めてスナッチャーを破壊した感想は？」
「うん，ギブスンと腕を比べたいなどと少しでも考えた自分が恥ずかしい。まだまだ学ばねばならないことが山ほどあるって感じだな」
「そうですね……頑張りましょう。ギリアンが一流のハンターになってくれれば，ボクもそのナビゲーターとして鼻が高いですからね」
「任せとけって。……そうだ，メタル。スナッチャーの残骸処理班〝JUNK〟を呼んでおいてくれ。こいつはちょっと処理しかねるからな」親指を立て，リサの残骸を指さす。
「了解」
メタルは内蔵の直通ビデオフォンで，JUNKへと連絡をとり始めた。
そのとき，リサの残骸の中の機械が一つ，未だに活動を続けていることに，俺もメタルも気づいていなかった——。



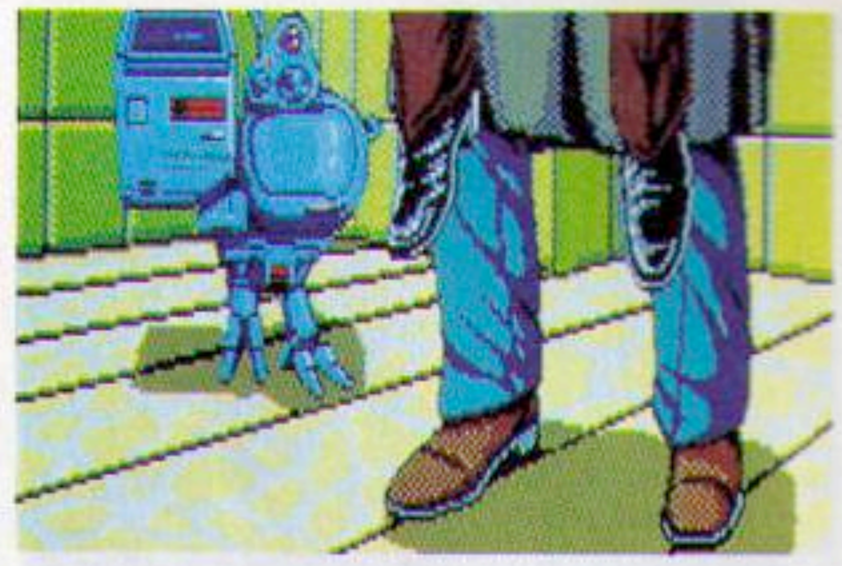
§9 RANDAM HAJILE
——ランダム・ハジル

「おかしい。肝心のフレディはどこへ行っちまったんだ？」
くまなく家宅捜索しても，なにも見つからないのにいらだちを覚えた俺の口から，期せずしてわかりきった文句が洩れる。
「ギリアン，急がば回れ，です。一旦外へ出て，張り込んでみるのはどうでしょう」
確かに，朝から仕事に出ているというフレディが，そろそろ帰ってくる時刻であるには違いない。
「そうするか。いくら残骸とは言え，頭が砕けた女の亡骸と夜を明かすのは，気持ちのいいものじゃないからな」
俺とメタルは階段を下り，交差点に止めたトライサイクルへと戻る。
202号室に異変が起こっていることに気づいたのは，愛車のドアを開け，中に乗り込もうかとしているそのときであった。
「メタル，あれを見ろ！」
指さした202号室の窓では，確かに消してきたはずの部屋の明かりが，小刻みに点滅していた。
——馬鹿な……。フレディが帰ってきたというのか？　だが，さっきから誰一人として，アパートに入っていった者はいない。……もしやリサがまだ生きているのでは？
様々な状況を想定しながら，俺たちは再び202号室のドアの前に立った。
そして，ドアを開けようとすると——なにっ？　鍵が掛かっている!?
やはり，部屋の中に活動している何者かがいるのだ。
「メタル，鍵をこじ開けることはできるか？」
「……ええ，このタイプなら，アルファビルとアクセスすれば大丈夫です」
「やってくれ」
「了解。……ただ今，アルファビルより電子ロック・ナンバーのサーチに成功。ドアをアンロックします」
ガチャリ。
その音を聞くや否や，俺は力一杯ドアを蹴り開けた。
もちろん，ブラスターをいつでも撃てるような体勢に身をおきながら。
と，部屋の中は，妙に暖かく重苦しい空気に支配されていた。

それは決して気のせいによるものではない。
足を踏み入れると，暑さと緊張のどちらからくるとも区別のつかない汗が，肌から噴きだしてきそうである。
室内灯で明々と照らされた居間に視線を一周させる。
が，先刻と変わったところは特に見当たらず，バスルームとの境に転がっているリサの残骸も元のポーズのままであった。
「メタル，リサだ。リサを調べてくれ。すべての機能が停止しているか，もう一度確認するんだ」
「わかりました」
メタルは自分に内蔵されたセンサー類を駆使し，リサの体内をくまなく調べ始めた。しばしの時間を経て，その結果が報告される。
「心配いりません，ギリアン。リサの体内のすべてのメカは，活動を停止しています」
とすると……。
バスルームを覗いてみる。
しかし，部屋の電気をつけ，ドアに鍵を掛けたような人影はやはり発見できない。
フラフラと鏡の前に立ち，意味もなく再度サンスクリーンを手にする俺。
——メタルに動体反応チェックをさせなかったことと，浴槽の水がなくなっていることに気づかなかったのが，俺のミスであった。
ガコン！
浴槽自体が，大きく横にずれた。
その跡に現れた人工的な穴から，もの凄い勢いで蒸気が噴き出す。
たちまちのうちに，バスルーム内は白いもやのかかったような状態になり，温度も急激に上昇を始めた。
その沸き上がる蒸気に混じって，黒い人影が穴から身を躍らし，とても人間のものとは思えないスピードで俺の背後に回る。
——しまった！
気づいたときには，その人影の太い腕によって，俺の首に強烈な圧力がかけられていた。
背後の男は，勝ち誇ったかのように，一語一語をゆっくりと発音する。
「くっくっくっ。You・shall・be・snatched.!!」
正面の鏡に映った男の顔を見ると——モンタージュそのままのフレディ・ニールセンが，狂気に浸ったような形相で笑っていた。
「リサも愚かな奴よ。あれほど俺が戻るまでJUNKERを引き留めておけと言っておいたのに，先走りやがって。こんな鈍い奴に殺られるとはなあ……。ギブスンのときのように二人で連係すれば，イチコロだったろうによお……けっけっけっ」
——くっ。やはりこいつら，二人がかりでギブスンを……。
俺は手にしているブラスターでなんとか反撃を試みようとした。
が，首を恐ろしい力で締め上げられているので，手が自分の意志のままにならないのに加え，フレディが俺のブラスターを持っている腕をがっちりと押さえ込んでいる。
スナッチャーの体から発せられるパワーは，とても一人の人間が対抗できるようなものではない。
「ひゃーっはっはっ。ブラスターさえ使わせなければ，おめえらJUNKERもただの人間だわな」
——い，息が……。
俺の危機に，メタルがまたもや例の作戦に踏み切った。「おいスナッチャー，お前にボクのメタルギア・ビームをくらわせてやるっ！」
しかし，フレディは全くそれに動じずに，メタルのほうをギラリと睨むと，ふてぶてしくも言う。
「ほう。おもしろい。撃ってもらおうじゃないかね，おちびさん」
「……」喉の奥に言葉を飲み込んでしまうメタル。
「いいことを教えといてやろう。俺とリサには，相互間情報伝達装置というのがついていてな……。リサのそれが，ついさっきまで作動していたのだ。つまり，おめえらの行動と会話は，すべて俺様に筒抜けだったというわけよ。



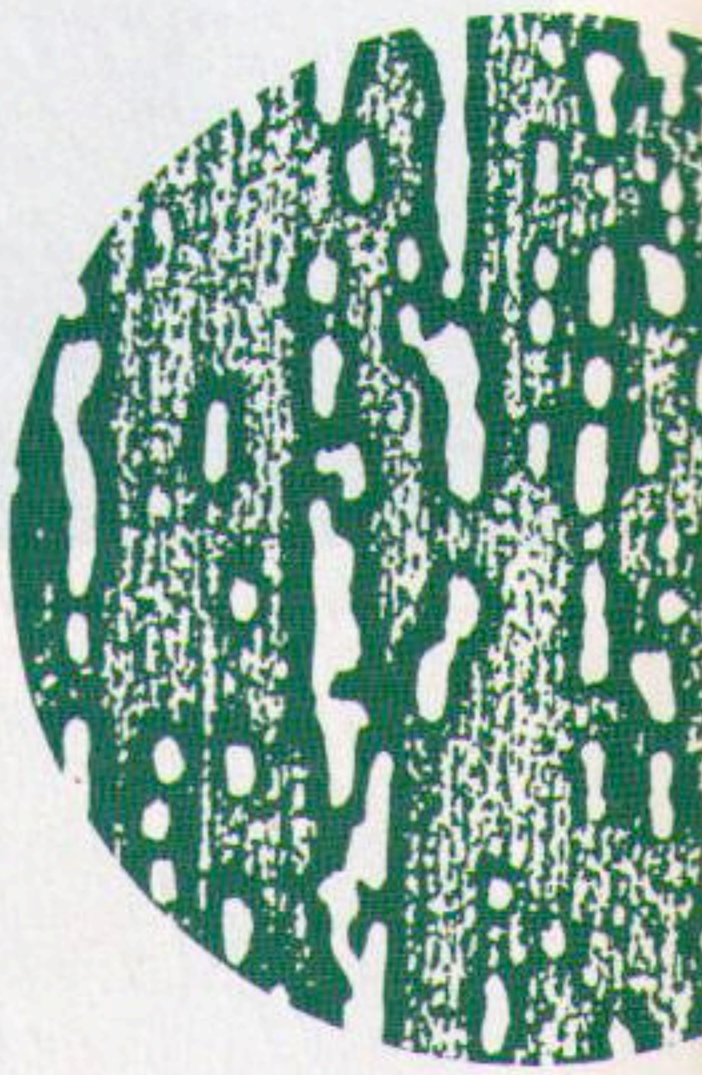




このまぬけがぁ。ひゃーっひゃっひゃっ」
「ギリアン……」メタルが泣きそうな声をだす。
「さてと。それでは，このJUNKERさんを片付けさせてもらうとするか。首を引きちぎるときは，どんな音がするのかなあ。……このお兄さん，ギブスンよりは硬そうだぞ。ほれほれ，ほれぇ」
フレディの腕に込められた力が，一層増した。俺の体は首吊りのような状態になり，ジリジリと宙に浮いていく。
——もはや，これまでか？
目の前の世界が，次第に赤く染まっていった。
人は死ぬ直前に，自分の一生を走馬灯のごとく顧みるという。
そのときの俺は，かつて体験した覚えのない映像——おそらくそれは失われた記憶の一部だと思うのだが——を，薄らいでいく意識の中で垣間見ていた。

☆

一面に白い壁が広がっており，薬品類がズラリと並んだ戸棚がある。部屋の中央にはベッドが置かれ，見たこともないような機材がその回りを囲む。
——病院だろうか？
ベッドの上に横たわっている人物は見えないが，白衣に身を包んだ数人の医師らしき連中が，その周囲でなにやら機材をいじくっているのが見てとれた。
手術を行なっているようである。
しばらくすると，白衣の人物の一人が俺の前にやってきて，手術用と思われる特殊な眼鏡と，マスクをはずした。
その素顔を見て，俺は愕然とする。
——ジェミー？　ジェミーじゃないか！
が，意識とは裏腹に，その場の俺は声を発することができない。
そんな俺の耳元に唇を寄せると，ジェミーは甘い声でささやいた。
「ギリアン，これでスナッチャーはOKよ」
——スナッチャーがOK？　一体どういうことなんだ!?
わからん。俺は以前にどこかで，スナッチャーに関係したことがあるのか……？



激しい頭痛が俺を襲った。
グワシャッ！
頭の中で，何かが爆発するような音が響いた。
ふいに目の前が明るくなる。
首のあたりが，すうっと軽くなるのを感じた。
と同時に，頭痛もきれいに引いていく。
——生きているのか，俺は？
「ごほっごほっ」
喉が強烈に痛かった。体も気持ち悪いほど汗ばんでいて，シャツがべったりと素肌に付着している。
虚ろな意識で肩のところを見ると，そこには頭部が粉々に撃ち砕かれたスナッチャー——フレディ・ニールセンがもたれかかっていた。
「危ないところだったな。もうちょっとであの世行きだったぜ」
背中越しに，初めて聞く男の声がした。
「誰だ？」脱力感に支配されそうな意識を奮い起こし，俺は身構える。
「……そうとんがるなって。俺はあんたの命の恩人なんだぜ。ありがとうの一言ぐらい言ってもらっても，ばちは当たらないと思うがな」
長めの金髪を，荒々しく蒸気の風になびかせて，一人の男がバスルームの入口に立っていた。俺とほぼ同じ，180cmくらいの長身で，薄いシャツの下に覗く，見事なまでに鍛え上げられた筋肉が，そのたくましさを物語っている。
手には，ブラスターを改造したような形状の銃が握られていた。
状況から判断すると，俺の首を締め上げていたスナッチャーの頭部を，この男が銃で打ち抜いたと考えるのが適切なようである。
「おっと，自己紹介でもしないと，口もきいてくれないって顔だな。……俺はランダム・ハジル。登録ナンバーBH75001，しがないバウンティ・ハンターだ」





バウンティ・ハンター，それは一種の賞金稼ぎである。
2041年，増殖するスナッチャーを撲滅するため，警視庁が一般市民に協力を求め，バウンティ制度を設立した。選挙権を持っているネオ・コウベの市民であれば，簡単な手続きを行なうだけで，ランナーとして名前を登録できるというシステムが，それである。
スナッチャーを破壊した際には，サラリーマンの平均月収の約10倍にも及ぶバウンティ料が支払われるため，荒くれ者どもがこぞってバウンティ・ハンターとして名乗りを挙げた。その正式登録数は500人前後，無登録で活動を行なっている〝闇ハンター〞を含めれば，ざっと1万人は下らないと言う。
が，その数の割りには，それなりの成果を上げているバウンティ・ハンターは，極めて少なかった。というのも，戦いにおいては一流であっても，捜査力を兼ね備えている人物というのが皆無に等しかったからである。
先刻からアルファベルにアクセスを試みていたメタルが，驚嘆の声を上げた。
「ギリアン，このランダムという男は凄いですよ。今月に入ってからだけでも，既に3体もスナッチャーを破壊しています」
「……ま，そういうこったな」口元を緩めるランダム。
しかし，俺の意識の中に，どうしても拭えないなにかが引っかかっていた。それは，ギブスンが残したフロッピーの中の一文――「バウンティ・ハンターのランダム・ハジルとかいう男には気をつけろ」――が，潜在的に働いていたのかもしれない。



場所をアパートの外のメイン・ストリートの一角に移して，ようやく俺は口を開く。
「俺はギリアン・シード。知っているとは思うが，他界したギブスンの後任のランナーだ。……とりあえずは，礼を言おう。が，一つ確認しておかねばならないことがある」
言葉尻が強まったのを聞き，ランダムの表情が硬くなった。それを見据え，俺は言葉を続ける。
「ランダム。お前，俺たちの後をつけていたな？」
「……ああ。JOY-DIVISIONあたりからしっかりとな……。捜査は俺に合わない。JUNKERに捜させ，おいしいところをいただく――それが俺流のやりかただ」
悪びれた様子はまったく見せず，ランダムはジャンパーのポケットから一枚の紙切れを取りだした。「こいつにサインしてくれ。俺がここのスナッチャー――フレディ・ニールセンを破壊したという証明書だ」
断る理由も見つからないので，俺は筆を走らせる。
「サンキュー。これで賞金が下りる」
「ランダム，貴様……」そのあまりに事務的な態度に，怒りを覚える俺。
「……ほらほら，すぐそうやって，感情を表にだす――悪い癖だ。それじゃ

ランダム・ハジル（年令不詳）
Randam Hajile



一月の間にスナッチャーを3体も処理した，凄腕のバウンティ・ハンター。どこからやってきたのか，何のためにスナッチャーを追い回すのか，彼についての詳しいことは誰も知らない。

冷静な判断などできやしない。……ギリアン，だいたいお前は既に3度，スナッチャーに殺られていてもおかしくないのを，自分でわかっているのか？」

——3度？　どういうことだ？

「やれやれ。その顔じゃ，全然わかってないって感じだな。よかろう，説明してやる」

ランダムは風に揺れる髪を手でかき上げてから，話し始めた。

「リサのときとフレディのとき。これはお前にもわかっているだろ。そのメタルとかいうのと，俺がいなかったら，どうなっていたかわからん」

——悔しいが反論できない。

「それと，もう1回。ギブスンの殺された現場でスナッチャーに遭遇したとき——。そこでおそらく，お前は死を見ていても当然の状況に身をおいていたはずだ。それがなぜ，殺されなかったかわかるか？」

言われてみれば，あのとき，スナッチャーは背後から容易に俺をレーザーカノンで撃ち抜けたはずだ。

それをわざわざ，時限爆弾とインセクターによる挟み討ちに切り替えた。

なぜだ……？

「お前は奴らのモルモットにされていたのよ」

ランダムが口元に冷ややかな笑みを作った。「スナッチャーにとって，JUNKERを殺すなんてことは一種のゲームに過ぎない。標的にどれだけ恐怖を与えられるか，奴ら，楽しみながら観察してやがるのさ。だから，よほどのことがない限り，初対面のJUNKERやバウンティ・ハンターを，その場で殺したりはしない。罠を張り巡らし，気も狂わんばかりの恐怖を感じさせておいて，最後に自分でとどめを刺す——ま，奴らのいつものやり口だわな」

「……」

「いずれせよ，その3度共，お前の状況把握能力の不足が招いた窮地であるには違いない。俺だったら，楽々と敵さんを破壊していたぜ。……そのへんの自分の未熟さを，良く認識しておくんだな，新米」

「……」ぐうの音も出ないとは，まさにこういうことなのだろうか。

ランダムは，なおも続けた。

「……そうだギリアン，お前にいいことを教えてやろう。スナッチャーどもを潰滅させるには，奴らが肌のメインテナンスをしている病院をたたくことだ。そうしないと奴らは，いくらでも増殖を続ける」

「貴様，ギブスンから情報を盗んでいたな」

「……だから，言っただろう。それが俺流だって。まあ，お前と俺，捜査担当と，破壊担当。仲良くやっていこうじゃないか」

ランダムは，歩道の脇に止めてあったバイク〝ロード・ランナー〟にまたがると，エンジンをふかし始めた。「あばよ。貸しはいつ返してくれてもいいぜ」

軽い爆音を残して，ランダムを乗せたロード・ランナーは，ネオ・コウベの夜景に溶け込んでいった。

ランダム・ハジル——今一つ，つかみ切れん男だ。信用していいんだろうか。

スナッチャーが肌のメインテナンスを行なっている病院——今後の捜査は，それを中心に展開していくことになるだろう。

リサ・ニールセン——奴は確かに，俺のことを準備をして待っていたと言った。一体なぜ俺が来ることを察知できたんだ？

俺の頭の中で，幾つもの考えが断続的に，現れては消え，消えては現れ，を繰り返していた。

人はこれを〝混乱〟と呼ぶのだろうか。

やがて，乱数的に発生していたそれらの思考パターンが，一片の言葉によって一掃される。

「スナッチャー……！」

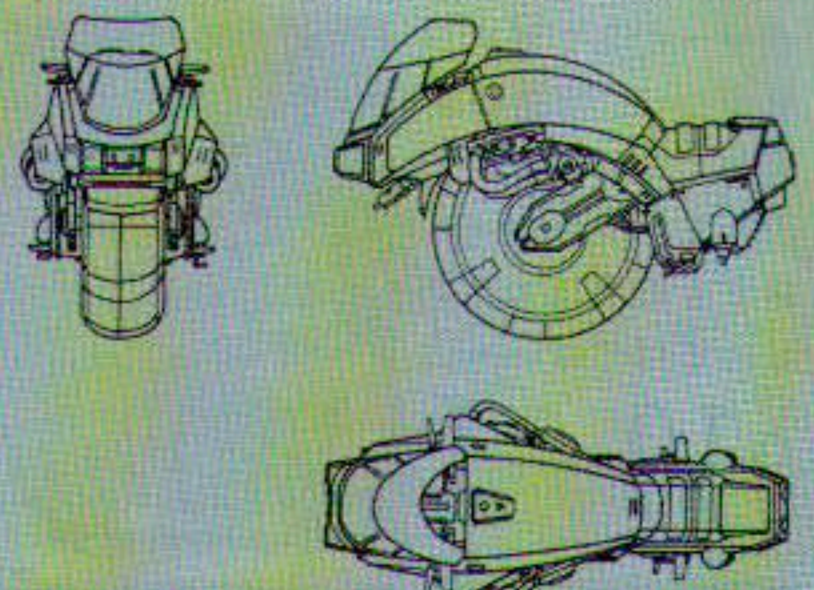
ジェミーの声であった。

死の淵で垣間見た光景が，鮮明に俺の脳裏に甦る。

このとき既に，俺の人生が決してスナッチャーと切り離すことができないものであるということを，俺は本能的に予感していた。

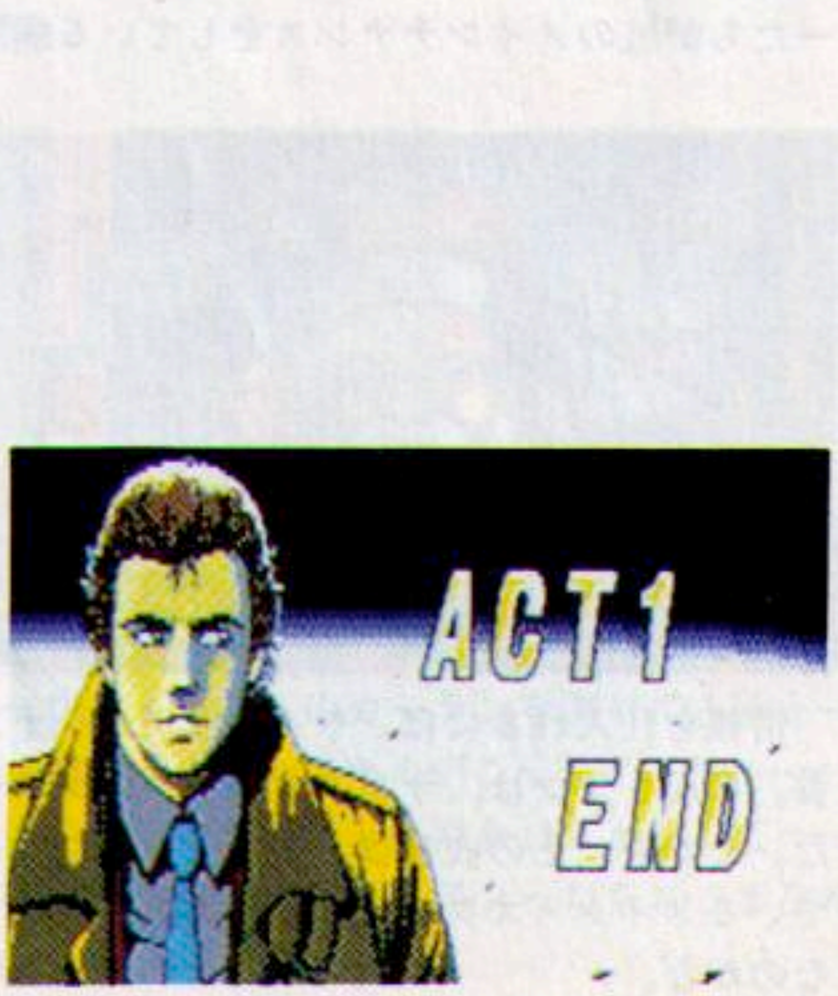
ロード・ランナー

1秒間に3000回転のジャイロ・モーメントで車体のバランスを維持する1輪バイク。今やモーター・スポーツの主流となっている。狭い路地などでも自由に移動，反転できるため，区画整理の進んでいない南のエリアで特に人気がある。



・DATA

正式名	BMX-srx-600
ボディ	炭素繊維＋セラミック・ハニカムモノコック・ボディ
全長	1,800mm（本体のみ） 2,200mm（バランサー，エアロ・カウリング含む）
最大出力	400ps（20秒以内）
最大トルク	87kg
乾燥重量（ドライ）	220kg
最高速度（整地上）	300km/h
ギア	6段10速（オート・クラッチ変換可能）



ACT 2 ☆☆☆ CURE ☆☆☆

さて，ACT 2は，軽ーく大筋だけを追っていくぞ。タイトルの“CURE”は，「治療」という意味。つまり，スナッチャーたちが肌のメインテナンス（治療）をしている病院を中心に，物語が展開していくわけだ。胸を打つランダム，笑わしてくれるナポレオン，そしてアッと驚く大どんでん返しと，見所はイッパイ。もちろんゲームを解く上でのヒントも散りばめてあるので，行き詰まった人は参考にしてね。ではでは——。

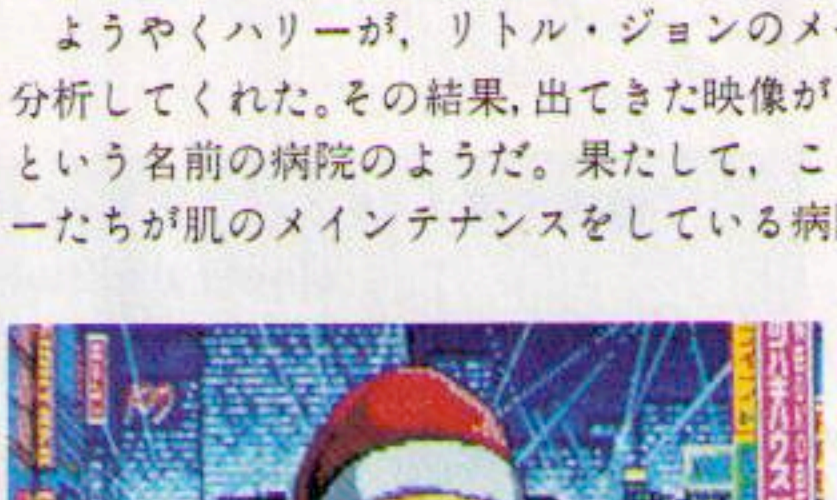
§10 JAIME ——ジェミー



ACT 2がはじまるとまず，今までのストーリーをもう一度，回顧することになる。メタルが重要人物たちの顔を表示するのに併せて，局長が要所要所を解説してくれるのだ。こういう親切設計はうれしいね。



ようやくハリーが，リトル・ジョンのメモリーチップを分析してくれた。その結果，出てきた映像がコレ。「OLEEN」という名前の病院のようだ。果たして，ここがスナッチャーたちが肌のメインテナンスをしている病院なのか？



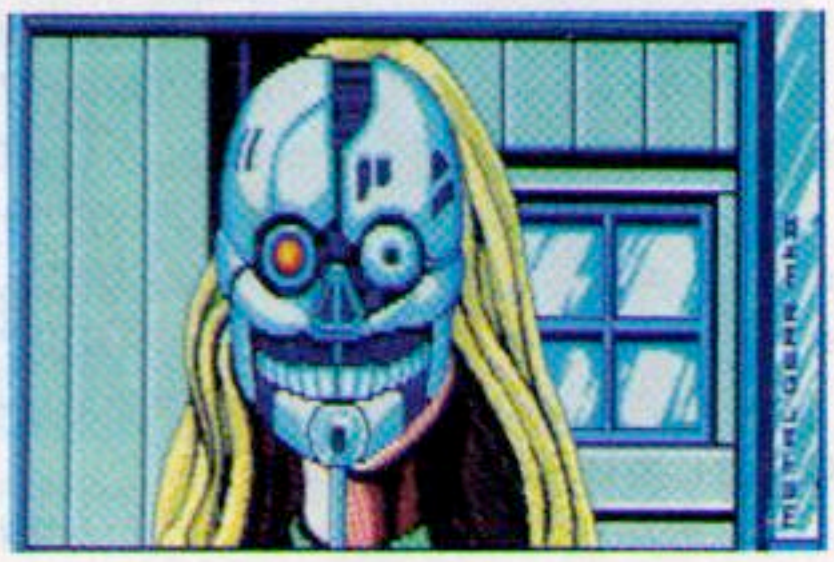
情報を仕入れるには，やっぱりナポレオンに会うのが一番。なんとヤツは，サンタクロースのコスチュームで現れた。しかも，その衣装は，アウターヘブンのマスクを作っているメイク・スタジオ製。意外とオシャレに気を使う男なのかな。



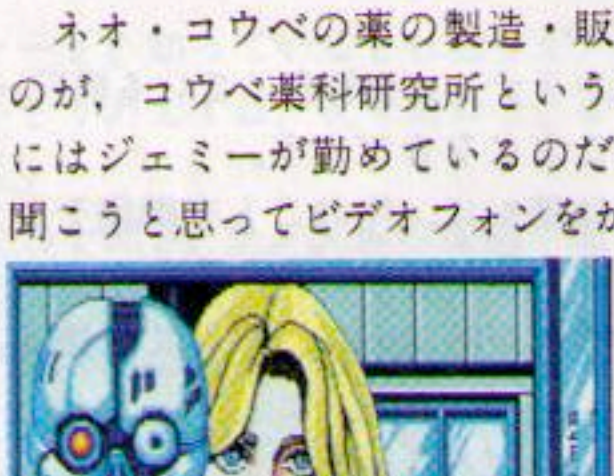
ナポレオンに教えられてやってきたのが，ここ「オウリン病院」。あのスペルを「オウリン」って読むのは，ちょっと強引な気がするんだけどなあ。ま，虎穴に入らずんば虎児を得ず。入ってみましょ。



なにやらお上品そうな奥様がたが，手に手にペットを連れている。まさか，この人たちがスナッチャーで，犬がインセクターなのか（んなわけないでしょ！）。案の定，中は単なる動物病院だった。ムダ足ってことか。



ネオ・コウベの薬の製造・販売を一手に引き受けているのが，コウベ薬科研究所というところ。何を隠そう，そこにはジェミーが勤めているのだ。「OLEEN」病院の情報を聞こうと思ってビデオフォンをかけると，出てきたのは……。



まさか，ジェミーもスナッチされてしまったのか？——と驚いたら，ちょっとした彼女のいたずらでした。これは単なる留守番電話。「そんなに慌てちゃって……ギリアンの気持ちはすっかりジェミーにスナッチされてますからね」（メタル談）



コウベ薬科研究所のビデオフォン・ナンバーをたたくと，ようやくジェミー本人と会話ができる。ポイントとなるのは，スナッチャーが肌の治療をするためには，紫外線療法のできる設備が必要だってこと。ジェミーにその種の病院のリストアップを頼むことにした。

§11　INNOCENT GIRL
——天真爛漫な少女



捜査をしている最中，メタルのビデオフォンが鳴りだした。取ってみると，血相を変えたミカが映る。「ギリアン，やっとつかまえたわ。さっきカトリーヌから電話があったの。あなたに渡したい物があるって。なんだかすごくおびえてたわ」



さっそくギブスン家へ行ってみると，カトリーヌはどこにもいなかった。イヤな予感がする……。調べていくうちに，思わぬところに隠し棚があるのが見つかった。そこには，ギブスン家のミニチュアの形をしたオルゴールが……。



一方，書斎はメチャクチャに荒らされていた。もしやスナッチャーが何かを探しに……？　待てよ，カトリーヌが俺に渡したいと言った物，ひょっとしたら，それがヤツらの病院を知るための手掛かりとなる品なのでは？　カトリーヌよ，どこへ行っちまったんだ!?





ふいに，窓の外から大きめの物体が投げ込まれた。落ち着いて凝視すると——アリスじゃないか／　これはヒドイ。全身がズタズタに引き裂かれている…。これほどむごたらしいことができるのは，やはりスナッチャー以外に考えられない。



カトリーヌがどこにも見つからず，疲れ果てて自分のマンションに戻る。おやっ，誰かがシャワー・ルームに入っているぞ!?　まさかスナッチャーのヤツが身を清めているのか？　床に落ちている，かわいらしいランジェリーが気になるなあ。



えいっとシャワー・ルームのカーテンを開けてみると——カ，カトリーヌ!?　なんだってキミがこんなところに……。えっ，いや，決してボクは覗こうとしたわけじゃなくて……わー，ごめんなさい／「もう，ギリアンったらエッチなんだからぁ」（カトリーヌ談）







カトリーヌにお湯をかけられてビショビショになってしまったが，命からがらに彼女が持ってきてくれた物は，そんなことを忘れさせるほど貴重な品だった。そう，ギブスンが使っていた「病院リスト」なのだ。このリストの中に，問題の病院があるはず。ヒントは，ギブスンが残していったチェスの駒だっ！

§12 THE HOSPITAL

——病院



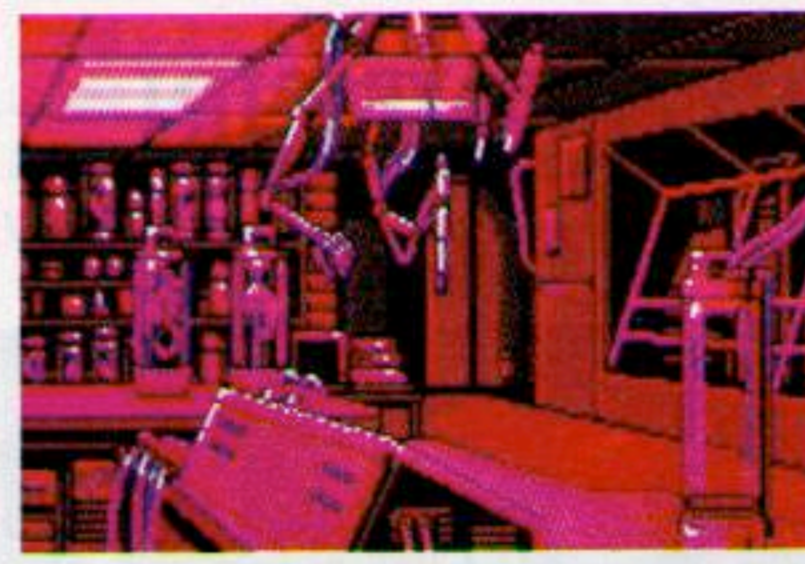
ようやく見つけた「×××××病院」。なるほど，○○○が故障してたから，あんな風に見えたわけか。どうやらこの病院も，廃線になったチューブ・ライナーの上にあるようだ。メタルにドア・ロックを解除してもらって，Let's Go！



病院内は，至るところにチリやホコリが積もっていて，人の出入りしている形跡が全くない。受付のところにあるスイッチを押すと，扉1～3が開くようになっていた。すべての部屋を調べてみるべし。



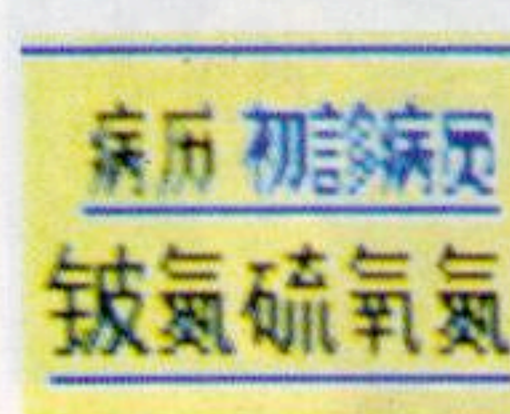
1号室は，手術室。肌のメインテナンスをするには，この部屋を使わなければならないと思うのだが，あいにく機械類は動きそうにない。おかしい，またもや読みちがいだったのか？



つづく2号室は，実験室のようだ。しかし，やはり器材はすべてホコリをかぶったまま。メタルが叫ぶ。「ギリアン，ホコリの上に真新しい足跡を発見しました！……と思ったら，ボクたちの足跡でした」



そして問題が，ここ3号室。真っ暗なのでメタルのライトをつけると，ごらんのようにスポット処理となる。ここでは，自分でスポットを動かして，三つのものを見つけださなければいけないのだ。映像を『取る』しておくことも，忘れないように！





なにやら中国語で書かれたようなメモを発見した。だけど，こんなの読めるわけがない。また，アウターヘブンのマッチが落ちているのも非常に気になる。やはりこの病院には，なにか裏がありそうだ。



いったん本部に戻って，ハリーに相談してみた。「中国語は中国人に尋ねろ」――なるほどね。さらにハリーは，1枚の写真を見せてくれる。これは，彼が子供の頃の唯一のメモリアルなんだそうだ。うーん，なんだか意味ありげ。



さっそく，その中国人のところへ電話すると，珍しくヤツは外出中。それにしても，この留守番電話は，どういう趣味をしてるんだ？――ん，待てよ。ひょっとしたら，ひょっとするのかな。

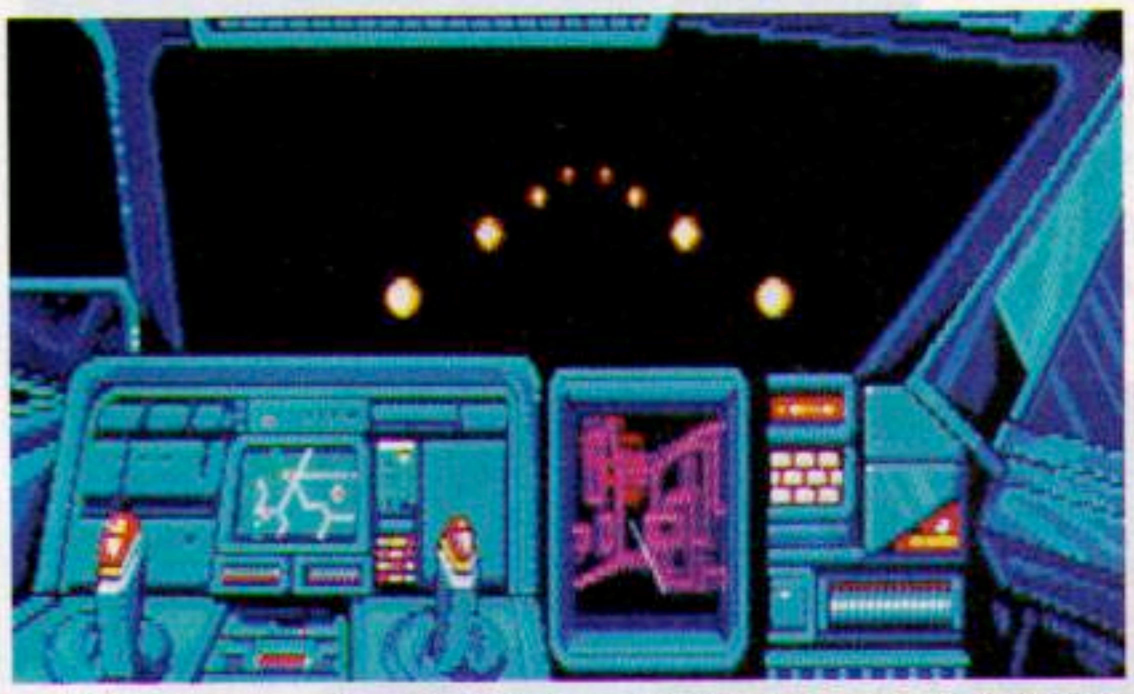


なんだ，やっぱりひょっとしたんだ（なんだか良くわからない文章だけど，まあ，そのへんは自分で推理してください）。なお，そのあとの場面の謎がどうしても解けないという人は，化学の教科書に載っている元素記号表を見てみよう。「スイヘイリーベ，ボクノフネ…」。

§13 Blow Up
――暴走



ジェミーからビデオフォンの連絡が入った。「例の病院なんだけど，2030年に地下の大規模な拡張工事を行なってるのよ。そうなの，あの病院には地下があるの！」――そういうことか。よし，もう一度チェックに行かなくては。



例によって，トライサイクルに乗り込み，行き先指定カーソルをアノ病院に合わせる。すると車体が空中に浮きアッという間にトップ・スピードに。おや？気のせいか，いつもよりも窓の外の明りの流れかたが速いように感じるぞ。

●関連映画

『ブレードランナー』を知らずして，『スナッチャー』を語るなかれ――そう，『スナッチャー』の舞台設定は，かなりの部分で映画「ブレードランナー」の影響を受けているんだ。ザッとそのストーリーを紹介すると……。

ときは近未来。舞台はロサンジェルス。地球外惑星での労働作業用に作られたレプリカント（人造人間）が反乱を起こした。そのうちの4体が人間社会に紛れ込み，人類への謀反をくわだてようとする。レプリカントは外見上，人間そのままなので，見分けることは容易ではない。そこで，ブレードランナーと呼ばれる職業の男たちが，レプリカントの破壊に乗りだした……。



「ブレードランナー」

発売元：ワーナーブラザーズ
メディア／価格：

VHS	13,900円(税抜)
Beta	13,900円(税抜)
LD	7,591円(税込)
VHD	7,591円(税込)

収録時間：117分



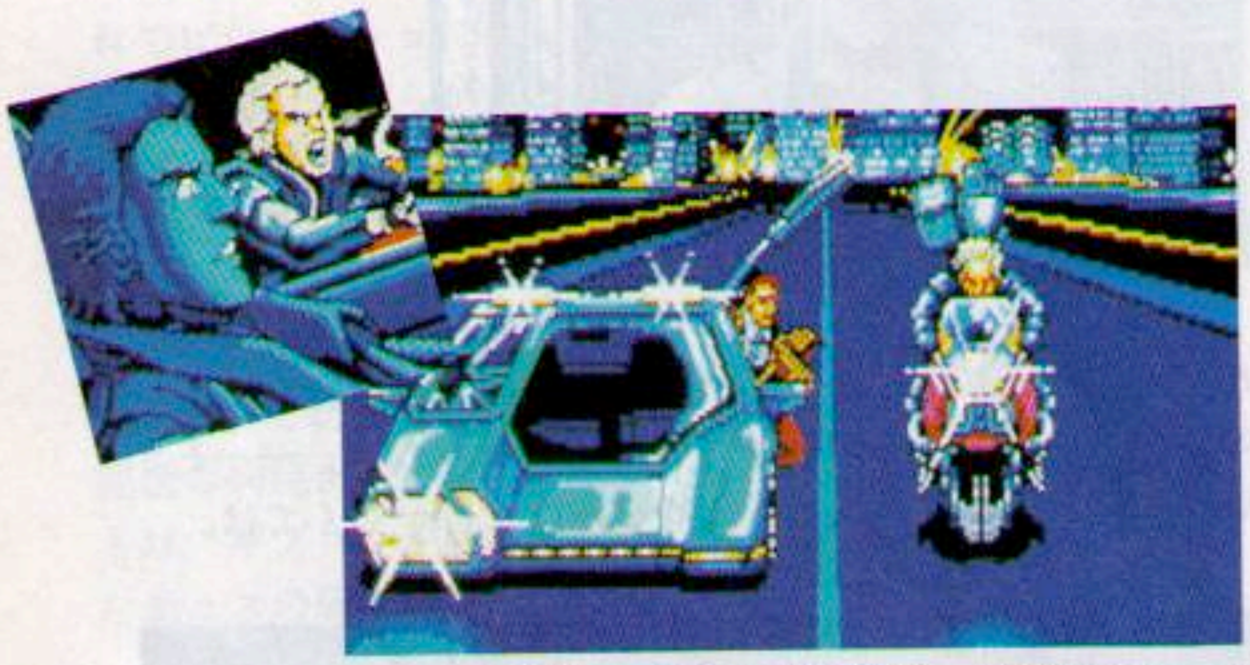
「ブレードランナー完全版」
未公開シーンや，美術担当のシド・ミードの原画集を収録したパーフェクト・バージョン。
発売元：ワーナーブラザーズ
メディア／価格：

VHS	13,900円(税抜)
Beta	13,900円(税抜)
LD	12,463円(税込)

収録時間：119分



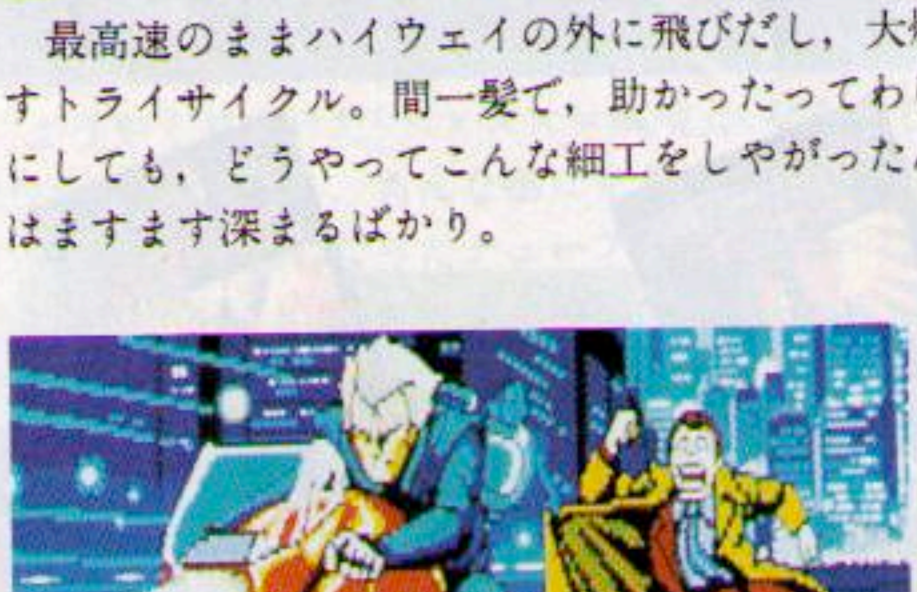
ゲゲッ，どうしたことか，ブレーキが効かない！　スナッチャーのヤツめ，俺のトライサイクルに細工をしやがったな。まずいぞ，このままではとても車体を制御しきれない。ハイウェイから転落してしまうのも時間の問題だ。



と，そのとき，すぐ脇から男の声がした。「ギリアン，こっちだ。飛び移れ！」——ランダムだっ！　ちくしょう，まったくいつも，いいときに現れてくれるぜ。まあ，俺のあとをつけているんだから，当然か……？

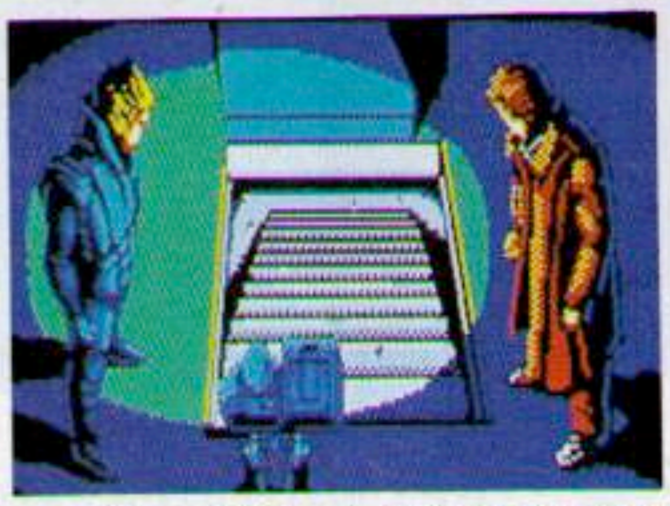


最高速のままハイウェイの外に飛びだし，大爆発を起こすトライサイクル。間一髪で，助かったってわけだ。それにしても，どうやってこんな細工をしやがったんだ？　謎はますます深まるばかり。

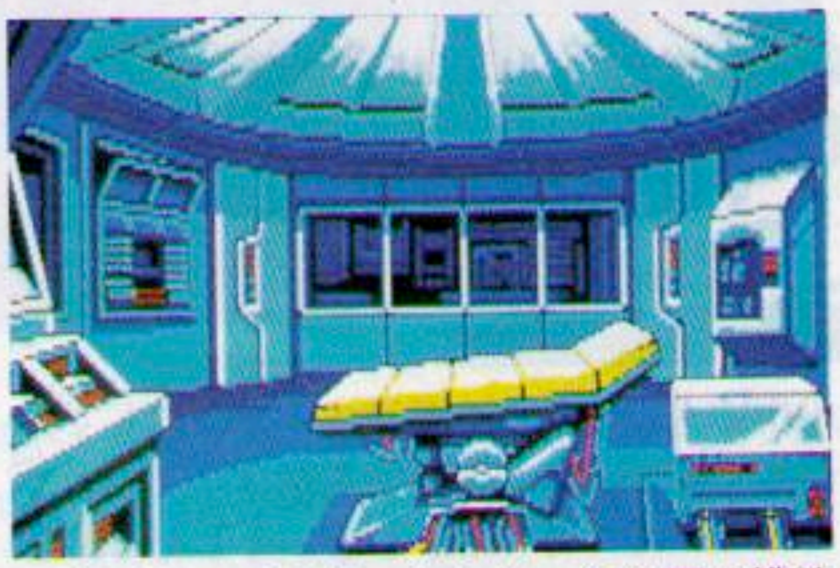


ちょっと，ねぇ，ランダムちゃん，これはあまりにもヒドイんでないかい？　バイクに乗りそこねた俺を引きずりまわすなんて……。——こういうコミカルさが，実にイイ味をだしてるよね。

§14 RESTORATION ——復元



病院に到着して，再度3号室を調査してみると，さっきは見落としていたところに階段が！　なるほど，これが地下への入口なわけか。この場面では，誰が先頭になるかを決めるために，ランダム，メタルと，3人でジャンケンをすることになるんだ。



地下のフロアは，上とまったく同じ構造になっていた。受付があって，部屋が三つ——ただし，ごらんのとおり，このフロアは多くの機械が稼動しており，ついさっきまで誰かがいた気配を感じさせる。



メタルの動体反応センサーが鳴り響いた。スナッチャーだっ！　人間の格好をしていないコイツを見るのは，はじめてだ。コッコワイ……。おっと，殺られる前に，ブラスターで破壊しちゃえ！



見事にスナッチャーを倒して部屋をでようとすると，背後でその死体（？）がムクッと起き上がった。ヤツは不死身なのか!?　えーい，もう一度，勝負だ！　俺の反応速度を見せてやるぜ！

ちょっとおもしろい情報

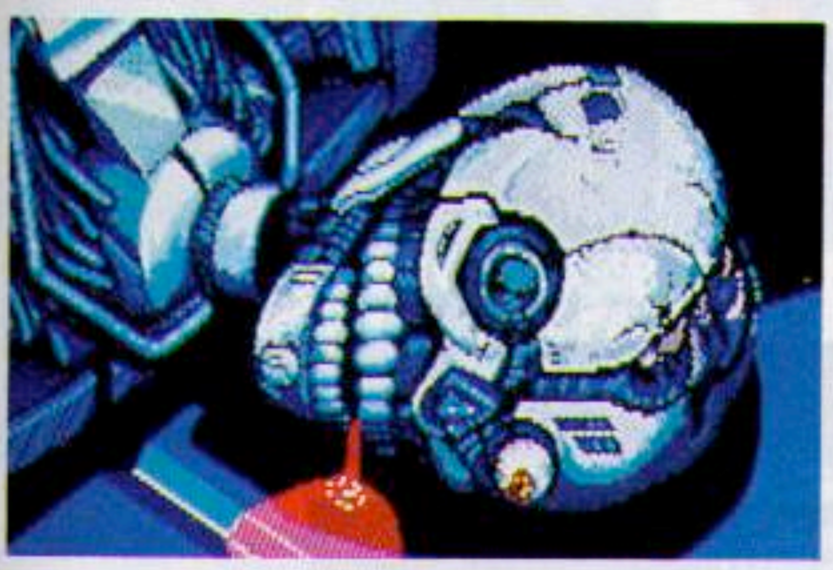
ゲーム中なかなか見られない画面をご紹介しよう。まず，ジェミーに電話したときに，タイミングによっては写真Aのような画面がでてくる。しつこくTELすること，これがポイント。淡泊な人には見ずらいグラフィックなのだ。

それから，噂のCDモードというのが，やっぱりあった。これは，ギリアンが自分の部屋にきたときに，しつこく「見る」「調べる」すればOKだ（写真B）。


▲写真A



▶写真B



今度は間違いなく，ヤツの機能も停止したようだ。口から血液を流すあたりが，その精密さをうかがわせる。いったい誰がこんなバイオロイドを作り上げたんだ？　ランダムが言う。「こんなにしぶといヤツが何万匹もいたら，地球はおしまいだぜ」



ここは2号室。一見，何もやることはなさそうだけど，そんなことはない。実は，ここで見たり調べたりしてフラグを立てておかないと，3号室に入ることができないのだ。扉3を開けるためには，受付のボタンの使いかたに一工夫が必要だぞ。



こっこれは……!?　3号室に入ると，ものすごい悪臭と共に，腐敗（ふはい）した人間の死体が目に飛び込んできた。ほとんど白骨と化したものが4体も転がっており，どうやらここはスナッチャーどものモルグ（死体置き場）らしい。



死体の死亡推定時期は，1体が1か月以内，3体が4か月以上前だった。どうやらコレらは，スナッチされたオリジナルの人間たちのようだ。とすると，死体が誰なのかを調べることによって，現在スナッチャーがバケている人物を特定できるのでは？

さっそくメタルに，死体の復元をしてもらうことにした。一人目がフレディ・ニールセン。二人目がその妻のリサ。三人目は，この病院の院長の中国人，陳　周鳳。うん，ここまでは俺たちが調べてきたとおりだ。

そして4人目が……ええっ，まさかあの人がスナッチャーだったなんて……!!　そうか，やはり中国語の暗号は，あの人のことを指していたのか……。たしかに，そう考えれば，今までの不可思議な事件もすべてつじつまが合う。









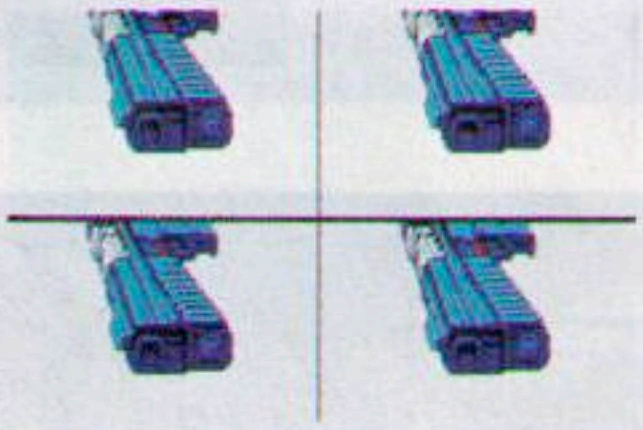


と，そのとき，暗闇の中に10個の目が現れた。俺たちの侵入に気づいた陳　周凰が，スナッチャー軍団を引き連れて襲いかかってきたのだ。ただでさえ手ごわいスナッチャーなのに，5匹も同時に相手にしなければならないなんて……。ピンチ！

ヤツらの放ったレーザー・カノンが，俺の腕を，ランダムの足をヒットした。だめだ，これではブラスターも撃てない。くそっ。俺たちのことをなぶり殺しにするつもりなのか？　ここのシーンは，ストロボ・アクションのような処理がなされていてカッコイイんだ（んなこと言ってる場合じゃないって？──ごもっともです）。









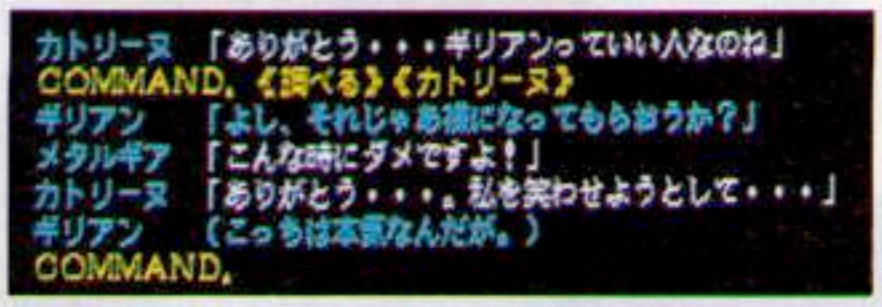


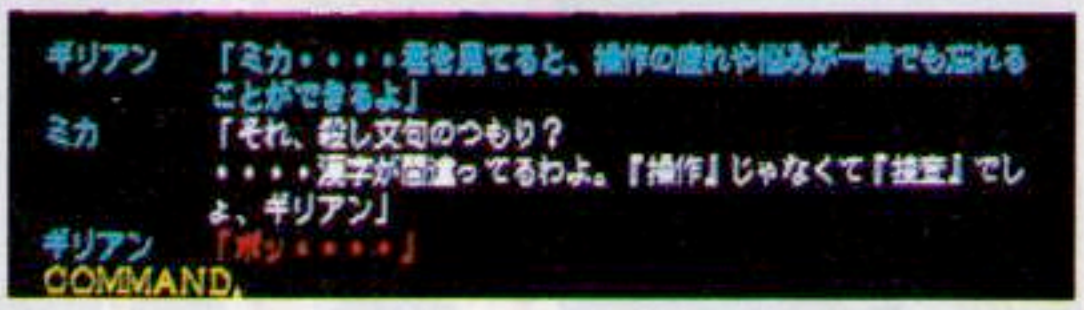
爆笑メッセージ大公開！

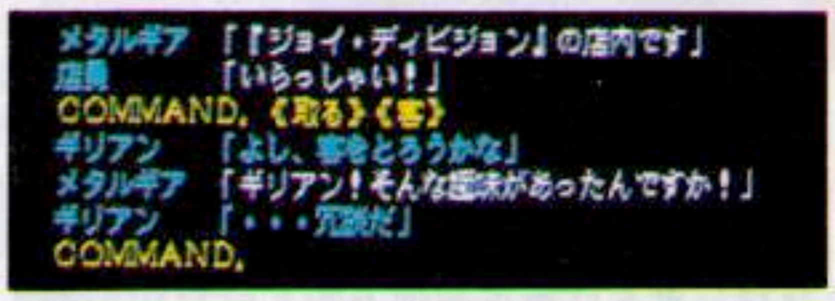
『スナッチャー』のメッセージには，ホントおもしろいものが多い。特に，ギリアンとメタルの掛け合いは，漫才を聞いているようだ。ここに，爆笑メッセージ&コマンドのいくつかを載せてみた。ゲームを解くことばかりに専念しないで，たまには（？）大声で笑っちゃおう。

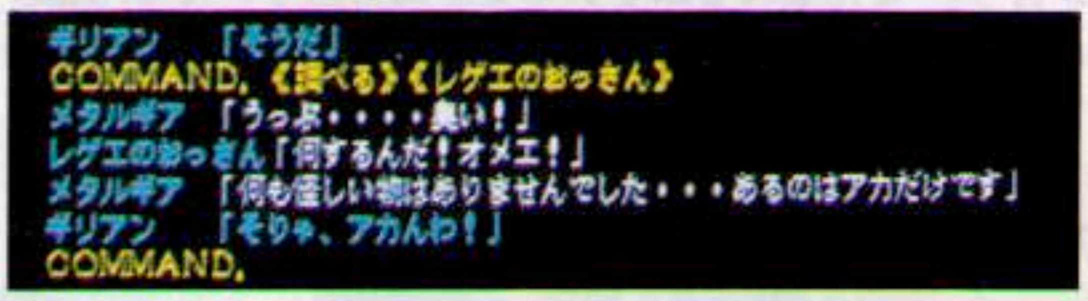


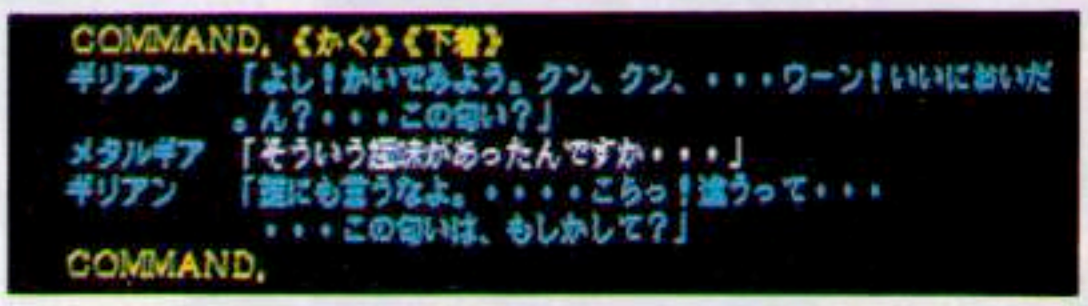


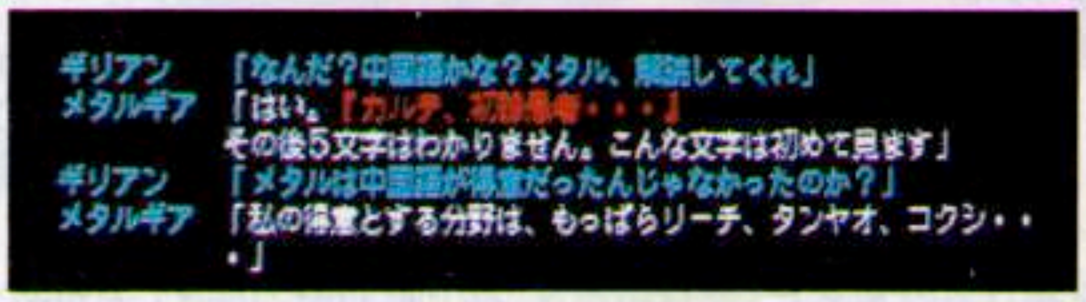


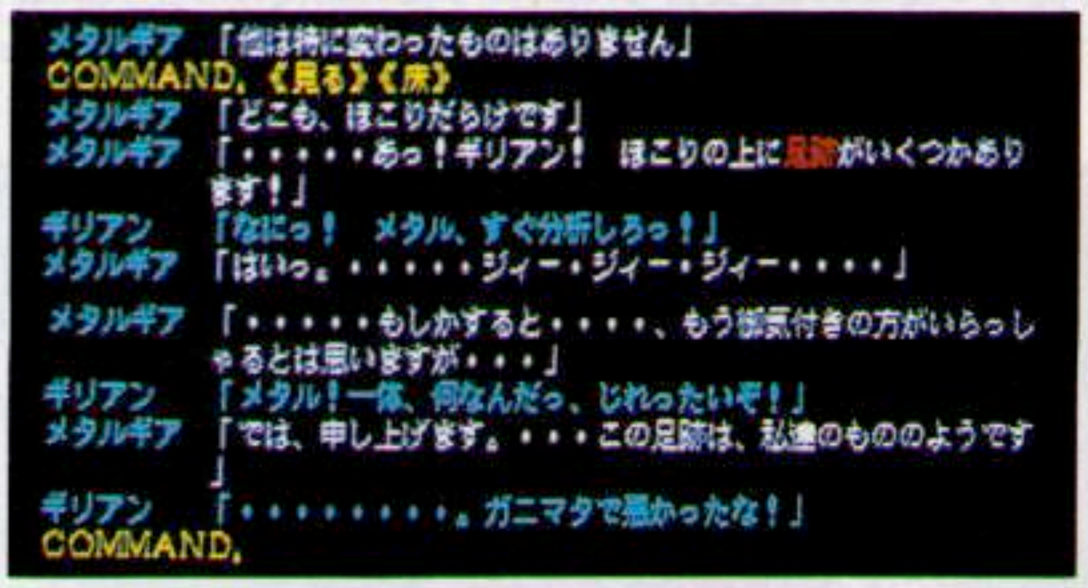


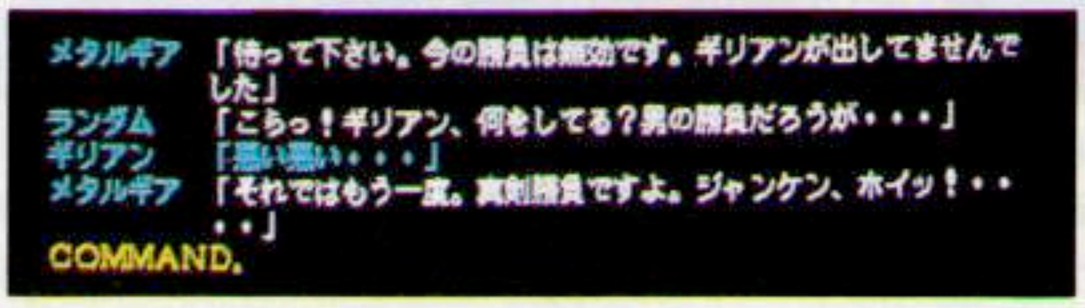












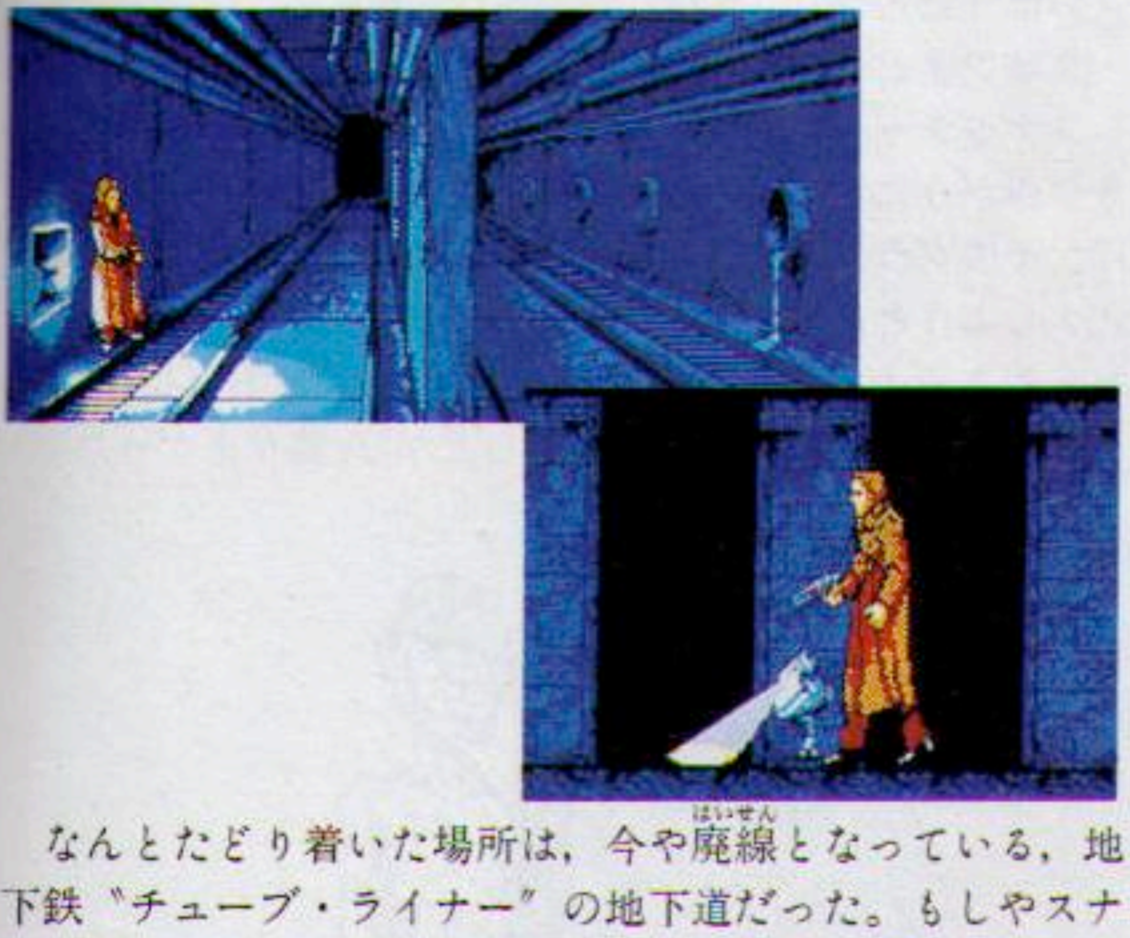


史上最大のピンチに，ランダムが一つの提案をした。「しかし，それでは……」と，言葉に詰まってしまう俺。ランダムは口元に不敵な笑みを浮かべながら言った。「季節はずれの花火を打ち上げるなら，派手なほうがいい」――シブすぎるぜ，ランダム！

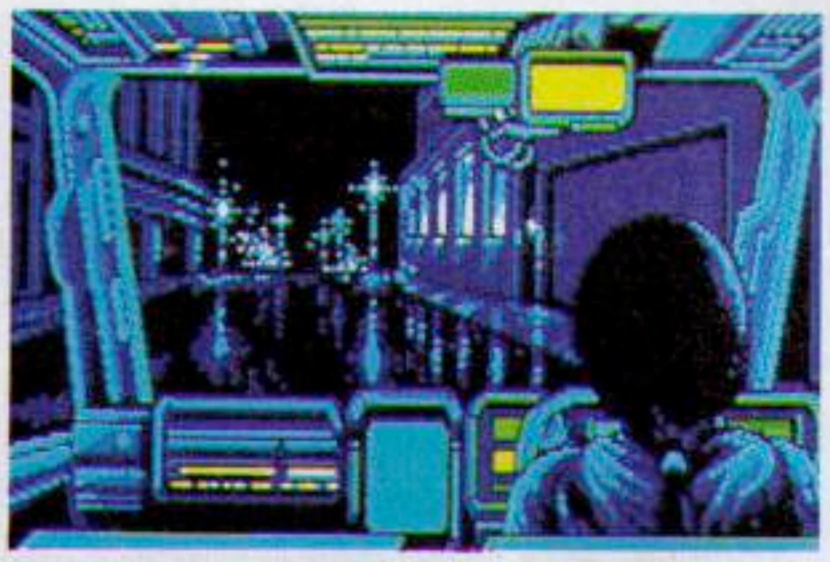
§15 JUNKER
――ジャンカー



俺とメタルが抜けでた場所は，人ひとりの体が通過するのがやっとの，狭い通路だった。メタルのライトを頼（たよ）りに，先へ進んでいくと……。こんなシリアスな場面でも笑いをとろうとするギリアンが涙ぐましい。



なんとたどり着いた場所は，今や廃線（はいせん）となっている，地下鉄〝チューブ・ライナー〟の地下道だった。もしやスナッチャーたちは，これを通路代わりに利用していたのか？そうか，だから連中は，ネオ・コウベのどこにでも自在に出現できたのか。



とりあえずは，JUNKER本部に戻らなければいけない。手近なところに止められていたタクシーに乗った。「俺はJUNKERだ。コウベ・オムニビルまで頼む」



すると，運転手が不気味に笑いながら答える。「あんたの行くところは決まってるんだがね。それは……」「それは？」「……地獄さっ！」――なんと，陳　周風がまだ生きていたのだ！



1対1なら負けやしないぜ。俺のブラスターから放たれた弾道（だんどう）が，的確に陳を貫いた。それにしてもコイツらのシブトさと言ったら，ハンパじゃない。あと一人――アイツはもっと手ごわいんだろうか？





さて，このゲームの最後に登場するスナッチャーとの対決は，実際にプレイするまでのお楽しみということにしておこう。さまざまな伏線の張りかたに感動してもらえたかな？

ただし，ヤツを倒せたとしても，まだネオ・コウベに平和が訪れたとは言えない。あくまでも拠点のひとつをたたいたに過ぎず，この街のどこかにスナッチャーは息をひそめて着々と活動しているのだ。

ヤツらを壊滅させることができるのは，いろいろな意味でギリアン・シード，キミしかいない。

人類に真の平和を取り戻すその日まで――頑張れギリアン・シード！　戦え，ギリアン・シード!!

開発おもしろこぼれ話だ

・タイトルは「JUNKER」のはずだった……

某メーカーの麻雀ソフトに，雀華（ジャンカ）というのがあって，商標が取れそうになく，泣く泣く変更……。

・コマンドはW○VYちゃんというMSXパソコンで作っていた！　WA○Yちゃんは気まぐれで，1日に何回も暴走してスタッフ泣かせの名人だった。メイン・プログラマーの私物WAV○ちゃんも強引に利用して「スナッチャー」は作られた。

で，そのコマンドは，SNATCHER BASICとでも言うべきプログラム言語だったんだけど，スタッフが日常会話やなんと結婚式の祝電にまでコマンド用語を使うのがハヤってしまった！

・ハード・ドライビングな開発にリタイア続出

バリウム飲んでるかーい！　点滴打ってるかーい！

血尿でてるかーい！　胃の穴開いてるかーい！

・必須開発ツール！　リポ○タンDスーパー！

リ○D以外にもドリンク剤は大はやり。中にはリキッド・スカイまっ青のドリンク剤を見つけてきて，こわごわ飲んじゃうヤツも！

・陳シュウホウは実在した！

なんとコナミビデオの香港ムービー「？」にチン・シュウホウという人が出演している！（実在の人物とは関係ありませんのであしからず）

・ちょっとオマヌケ，コピーガードです

適当にコピーすると，ミカが泣く!?　知ってるヤツは悪いヤツだ！　ちゃんと買ってよん！

Message from Creator

チーム・メタルスレイブ

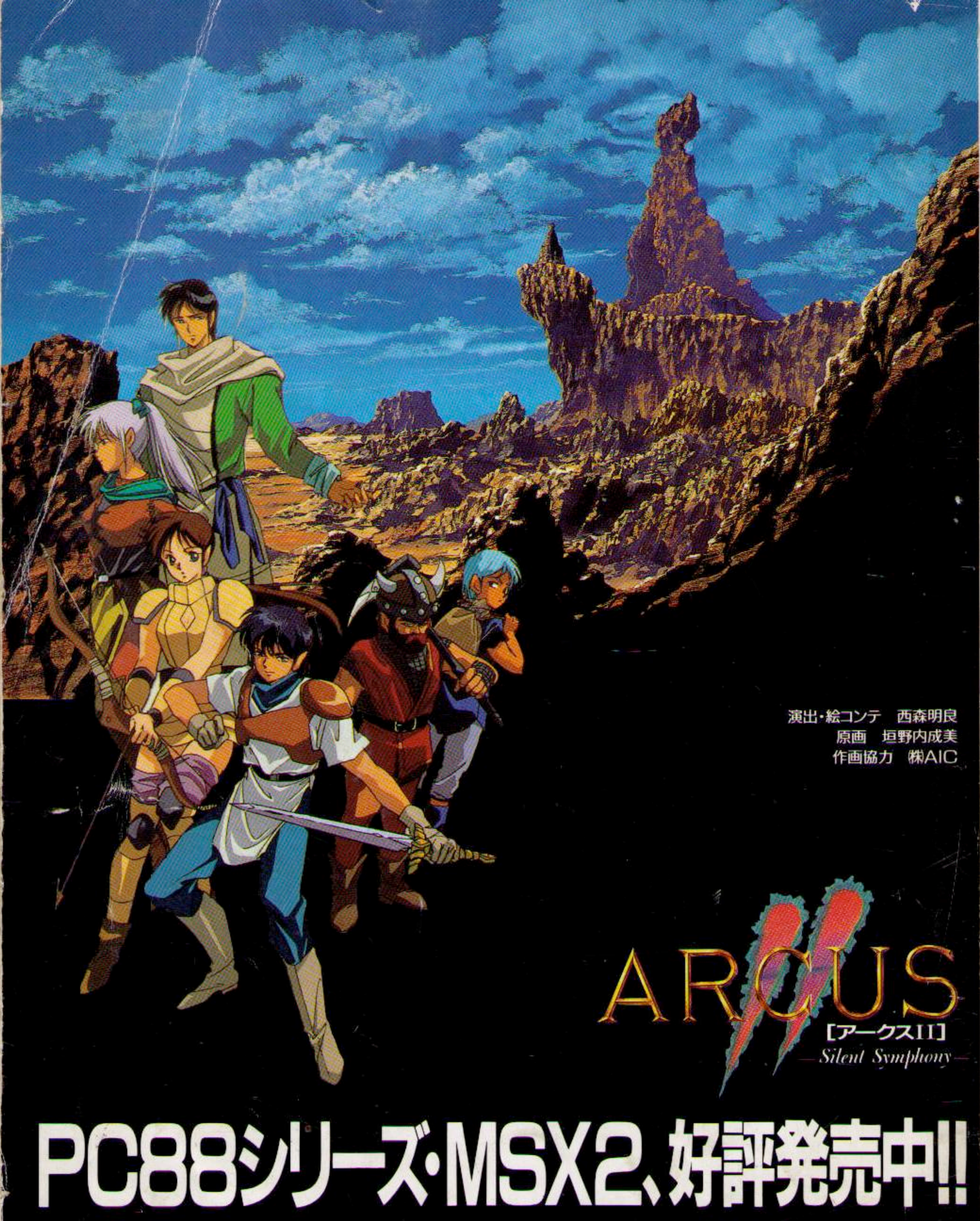
・オトリ捜査ならぬオトリ調査

ゲームも完成に近づいたある日，ユーザーのお子様たちをコナミに招いて反応を見る，というイベントを行なった。でも，こわいお兄さん（スタッフ）にニラまれてると本当の感想を言ってくれないだろうから，ニセユーザーを送り込んだワレワレ。スタッフのひとり「とよ坊」（当日22才）を高校生に仕立て上げ，回りの子供たちから生の声を聞いてもらったのだ。帰るときにユーザーの子たちにはプレゼントをあげるんだけど，とよ坊にはカラのプレゼントをあげたりと，楽しんでいたのはスタッフのほうだったりして。

・グラフィックのためなら，うじ虫も！

スナッチャーに殺された人間のグラフィック――そう，うじ虫がうにょうにょ動くアレ。細部まで凝るワレワレは，そのグラフィックを仕上げるため，うじ虫を大量購入！しようと思ったけどコワイのでやめた。ハエになったらどうしようとか，本当にメタルの言うとおりに食いつくすのか実験しようとかの声も上がり，盛り上がった。





電波新聞社〒141東京都品川区東五反田1-11-15電話03(445)6111　定価2,100円(本体2,039円)　雑誌18362-02

マイコンBASICマガジン別冊チャレンジ!!パソコンアドベンチャーゲーム&ロールプレイングゲームⅤ　一九九〇年二月二十八日発行